

一般国道253号

八箇峠道路関係発掘調査報告書

堅木遺跡

2008

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道253号
八箇峠道路関係発掘調査報告書

かた
堅木 遺跡

2008

新潟県教育委員会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

八箇峠道路は十日町市大字八箇と南魚沼市大字余川を結ぶ地域高規格道路（自動車専用道路）で、上越市から南魚沼市に至る延長約60kmの一般国道253号上越魚沼地域振興快速道路の一部です。この地域高規格道路は、地域の活性化と他地域との交流を促進することを目的として建設される道路です。十日町地域・南魚沼地域においては、高規格幹線道路である関越自動車道と併せて、信頼性の高い循環型広域ネットワークを形成することを目指し、これによって、沿線地域の産業・経済・文化の交流・発展が促進されるものと期待されています。

本書は、この八箇峠道路建設に先立ち、平成18・19年度に実施した堅木遺跡の発掘調査報告書です。

調査により、調査区内の微高地から炉跡、溝状遺構、土坑、ビットを検出しました。また遺物では古代の土師器・須恵器、中世の珠洲焼などがわずかながら見つかっています。その結果から、当遺跡は庄之又川左岸の河岸段丘上に立地する古代から現代に継続的に繋がる集落・耕作地遺跡であることがわかりました。

今回の調査成果が、地域の歴史を解明するための研究資料として広く活用されるとともに、県民の方々の埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、この調査に関して多大なご協力とご支援をいただいた南魚沼市教育委員会、ならびに地元の方々、また発掘調査から報告書刊行に至るまで格別のご高配をいただいた国土交通省北陸地方整備局長岡国道事務所に対して厚くお礼を申し上げます。

平成20年12月

新潟県教育委員会

教育長 武藤克己

例　　言

- 1 本報告書は、新潟県南魚沼市（旧六日町）大字野田堅木820-1ほかに所在する堅木遺跡の発掘調査記録である。
 - 2 発掘調査は、一般国道253号八箇幹道路の建設に伴い、国土交通省から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したものである。
 - 3 発掘調査は県教委が調査主体となり、財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に調査を依頼した。
 - 4 埋文事業団は掘削作業等を株式会社吉田建設に委託して発掘調査を実施した。
 - 5 整理作業および報告書作成に係る作業は当該年度を行った。
 - 6 出土遺物および調査・整理作業に係る各種資料は、一括して県教委が保管・管理している。
 - 7 遺物の注記は「カタギ」とし、出土地点や層位を統けて記した。
 - 8 本書の図中で示す方位は、すべて真北である。
 - 9 遺物番号は種別に係りなく通し番号とし、本文および観察表・図面図版・写真図版の番号はすべて一致している。
 - 10 遺構番号はすべて「調査区・種別・番号」で統一して表記した（例：B-SD01）。
 - 11 引用文献は著者および発行年（西暦）を中心に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。
 - 12 自然科学分析は株式会社パリノ・サーヴェイに委託してを行い、了承を得て再編集した。
 - 13 遺構図のトレースおよび各種図版作成・編集に関しては、株式会社セビアスに委託してデジタルトレースとDTPソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者へ入稿して印刷した。また遺物写真撮影はデジタルカメラ（D100）で撮影し、遺構写真同様デジタル化して編集を行った。なお、図面作成・編集作業に係り、業者に支給した資料は以下のとおりである。
 - 本文・挿図：テキスト形式・Excel形式のデータ・トレース原図・貼り込み版下
 - 遺構図面図版：デジタルデータ・レイアウト図・文字データ
 - 遺物図面図版：トレース図・拓影・レイアウト
 - 図写真図版：デジタルデータ（CD）・レイアウト図
 - 14 本書の執筆は、平成18年度は奥村伸男（新潟県埋蔵文化財調査事業団 主任調査員）、高橋勝広（株式会社吉田建設埋蔵文化財調査部 主任調査員）。平成19年度は高橋勝広・植木紀子（株式会社吉田建設埋蔵文化財調査部 調査部員）がこれにあたり、藤巻正信（新潟県埋蔵文化財調査事業団 調査課長）が補筆した。執筆分担は、奥村伸男：第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章1、高橋勝広：第Ⅲ章2、第Ⅳ章1～6・8、第Ⅴ章、第Ⅵ章、植木紀子：第Ⅳ章7、パリノ・サーヴェイ：第Ⅵ章である。
編集は奥村・高橋が担当し、藤巻が調整した。
 - 15 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々および機関から多くのご教示・ご協力をいただいた。ここに記して厚くお礼申し上げる（敬称略）。
- 池田 亨　　南魚沼市教育委員会　　国土交通省北陸地方整備局長岡国道事務所

目 次

第Ⅰ章 序 説

1 調査に至る経緯	1
2 調査と整理	2
A 調査と体制	2
1) 試掘調査	2
2) 本発掘調査	2
3) 調査体制	4
B 整理と体制	5
1) 整理作業	5
2) 整理体制	5

第Ⅱ章 遺跡の環境

1 地理的環境	6
2 歴史的環境	7

第Ⅲ章 調査の概要

1 調査区とグリッドの設定	10
2 基本層序	11
A区基本層序	11
B区基本層序	12
C区基本層序	14
D区基本層序	15

第Ⅳ章 遺 構

1 A区の遺構	16
A 土 坑	16
2 B区上面の遺構	17
A 炉 跡	17
B 土 坑	18
C 溝	19
3 B区下面の遺構	23
A 土 坑	24
B 溝	25
4 C区の遺構	27
A 土 坑	27
B 柱 穴 列	27
C 流 路	28

5 D区第1面の遺構	28
A 溝	29
6 D区第2面の遺構	30
7 D区第3面の遺構	30
A 土 坑	31
B 溝	31
8 D区第4面の遺構	36
A 4-1面の遺構	37
1) 土 坑	37
2) 溝	37
B 4-2面の遺構	38

第V章 遺 物

1 遺物の概要	39
A 遺構の遺物	39
1) 炉 跡	39
2) 土 坑	40
3) 溝	40
B 遺構外の遺物	41

第VI章 自然科学分析

1 はじめに	42
2 試 料	42
3 分析方法	42
A 花粉分析	42
B 植物珪酸体分析	42
C 種実分析	43
4 結 果	43
A 花粉分析	43
B 植物珪酸体分析	44
C 種実分析	45
5 考 察	46
A 栽培植物	46
B 古 植 生	46

第VII章 ま と め	50
《要 約》	52
《引用・参考文献》	52
《別表 遺物観察表》	53

插図目次

第1図 調査範囲と周辺の地形	1	第9図 B・C・D区	12
第2図 試掘調査トレンチ位置図	2	第10図 B区基本層序	13
第3図 A区検出の柱根	3	第11図 C区基本層序	14
第4図 A区柱根の覆土	3	第12図 D区基本層序	15
第5図 遺跡の位置	6	第13図 植物珪酸体含量の層位的変化	44
第6図 坚木遺跡と周辺の遺跡	8	第14図 花粉化石	48
第7図 調査区とグリッド設定図	10	第15図 植物珪酸体・種実遺体	49
第8図 A区基本層序	11		

表 目 次

第1表 花粉分析結果	43	第3表 種実分析結果	45
第2表 植物珪酸体含量	45		

図 版 目 次

【図面図版】

- 図版1 遺構配置図 ①D区第1面②D区第2面
③A区・B区上面・C区・D区第3面
図版2 遺構配置図 ④B区下面・D区4-1面
⑤B区下面・D区4-2面
図版3 A区の遺構
図版4 B区上面・D区3面の遺構
図版5 B区上面の遺構 個別図(1)
図版6 B区上面の遺構 個別図(2)
図版7 B区下面・D区4-1面の遺構
図版8 B区下面・D区4-2面の遺構
図版9 B区下面の遺構 個別図
図版10 C区の遺構
図版11 C区の遺構 個別図
図版12 D区1面の遺構
図版13 D区2面の遺構
図版14 D区3面の遺構 個別図(1)
図版15 D区3面の遺構 個別図(2)
図版16 D区4-1・2面の遺構 個別図
図版17 出土遺物

【写真図版】

- 図版18 遺跡の位置と周辺の景観・坂戸山から遺跡を望む
図版19 近景・調査区
図版20 A区の土層と遺構
図版21 B区の土層と遺構
図版22 B区の遺構
図版23 C区の土層と遺構
図版24 D区の土層(1)
図版25 D区の土層(2)
図版26 D区1面の遺構
図版27 D区2面の遺構
図版28 D区3面の遺構(1)
図版29 D区3面の遺構(2)
図版30 D区4-1面の遺構
図版31 D区4-2面の遺構
図版32 D区の遺構(18年)
図版33 出土遺物

第Ⅰ章 序 説

1 調査に至る経緯

八箇峰道路は、上越市から南魚沼市を結ぶ自動車専用の地域高規格道路として計画された上越魚沼地域振興快速道路（一般国道253号）のうち、十日町市大字八箇から南魚沼市（旧六日町）余川までの9.7km区間を指す。現国道253号のうち八箇峰区間では、自然条件などの要因から、安定した交通の確保や高速交通体系の構築が困難な状況にある。そこで、安定的な交通の確保や関越自動車道六日町インターチェンジへのアクセス強化、地域連携強化の支援などを図る目的で八箇峰道路が計画された。

建設省（現、国土交通省）は八箇峰道路の着工に向けて、県教委に計画予定地内における埋蔵文化財の分布調査を依頼した。県教委の委託を受けた埋文事業団が平成12（2000）年12月に分布調査を実施したところ、遺物は採取されなかった。しかし、丘陵部では大小の河岸段丘が発達していること、水田部は扇状地に当たり遺物採取の有無だけでは遺跡の有無は判断できないこと、周辺には蟻子山古墳群・飯綱山古墳群が位置することなどから、現道・河川部分を除いたほぼ全域にわたり、試掘調査による遺跡の有無確認が必要であると県教委に報告した。

国土交通省の依頼を受けて、県教委は埋文事業団に試掘調査を委託し、埋文事業団は平成15（2003）年10月に114,870m²を対象に試掘調査を実施した。調査により、堅木遺跡を新たに発見し、金屋遺跡は範囲を拡大した。堅木遺跡については古代の遺物包含層を確認し、遺構も検出されたことから1,270m²について本発掘調査が必要であると県教委に報告した。

その後、国土交通省・県教委・埋文事業団の三者で協議し、平成18（2006）年9月から本発掘調査を実施することを決定した。



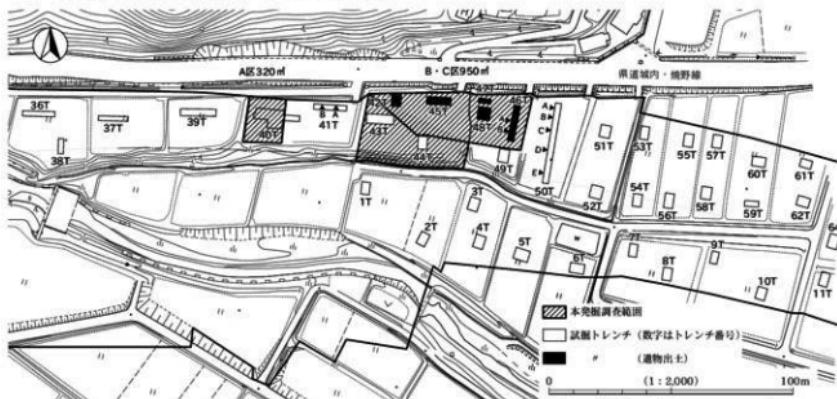
第1図 調査範囲と周辺の地形

2 調査と整理

A 調査と体制

1) 試掘調査(第2図)

試掘調査は、埋文事業団が平成15年10月6日から9日、10月16日から30日にかけて実施した。調査は対象範囲114,870m²に任意にトレンチを設定し、重機及び人力による掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無を確認した。堅木遺跡では、現地表下60cmで古代の遺物包含層が確認された。40Tでは遺物包含層は確認できなかったが、柱根が10基検出された(第3図)。出土遺物は古代の土師器などで、47T・48Tからの出土が比較的多い。柱根・遺物包含層・現地形のあり方から図示のA~C地区、計1,270m²の本発掘調査が必要であると判断した。



第2図 試掘調査トレンチ位置図

2) 本発掘調査

堅木遺跡を挟む西側、東側は建設工事が開始されていた。以下、調査日誌から経過を抄録する。

18年度

8月 9日 地元説明会。野田集落センターに、地元住民、南魚沼市都市計画課、長岡国道路事務所、道路建設会社、新潟県埋蔵文化財調査事業団、調査支援業者が集まり、道路工事及び遺跡調査の計画概要を説明した。

8月 24日 調査支援業者の現場代理人が現場に入り、現場事務所設営等事前準備を行う。

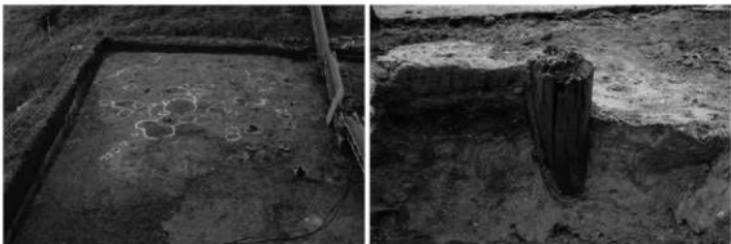
9月 4日 調査開始。調査区最西のA区からバックホー及び人力で表土除去を開始。終了後ベルトコンベアを設置し人力により開渠、包含層掘削に着手。順次B区、C区と東進する。

近世以降の耕作による破壊により、中世の遺跡はほぼ壊滅状態であり、C区では古代の遺物包含層もほとんど残っていなかった。

9月 19日 A区の表土除去・精査を行ったところ、多くの杭・柱根が見つかったが、覆土の観察により

近世以降のものであることが確認された（第4図）。

新潟県では近世以降の遺跡の取り扱いは、県教委と打合せのうえ南魚沼市教育委員会（以下、市教委）に相談したところ、「記録化の必要はないが、出土品は収納・保護する」よう要請があった。後に、一括して市教委に引き渡した。



第3図 A区検出の柱根

第4図 A区柱根の覆土

10月 3日 B区南側に溝らしきものが確認された。平面では検出が困難だったので、サブトレレンチを設定し、断面で確認することとした。

10月 11日 ローリングタワーを設置しA区の全景写真を撮影した。

10月 17日 B区のサブトレレンチによる断面観察により、溝30条を検出し、さらに下面遺構の存在することが判明した。

10月 26日 A区、B区上面、C区の調査が終了し、ラジコンヘリコプターにて全景写真を撮影する。

10月 31日 B区下面の取扱いについて、県教委・長岡国道事務所六日町出張所と協議し、調査期間を延長することとした。

11月 3日 A区の溝らしきものが東側に延びるかどうか確認するため東側に向け拡張調査したが、溝の確認には至らなかった。

11月 4日 B区上面の測量終了後、B区下面の調査に着手。

11月 6日 A・C区の調査終了確認を行い、B区を残しA・C区は長岡国道事務所に引き渡した。

11月 10日 B区下面の溝については平面での検出が極めて難しいため、さらに2.5mの間隔で縦横にサブトレレンチを設定し断面確認を行った。

11月 15日 B区上・下面の調査により、遺構の分布範囲が調査区外に広がると見られることから、長岡国道事務所と協議し、調査区を南側に約450m²拡張（D区）することとした。降雪期が迫っていることから、調査は来季以降とした。

11月 16日 建設工事の必要から、B区東側拡張範囲（D区）の一部について先行調査を開始する。

11月 18日 拡張区先行調査を終了した。

11月 21日 拡張区先行調査部分、B区東側部分の県教委終了確認を受け、長岡国道事務所に引き渡した。

11月 28日 B区下面全体の遺構写真を撮影する。

11月 28日 B区中央部下面に新たに確認された最下面（B-SK11～15）の調査に着手。

12月 2日 最下面の調査終了。18年度の調査面積は延べ2,295m²である。

12月 6日 器材、記録類を梱包搬出し、現地から引き揚げる。

12月12日 県教委の終了確認を受け、18年度調査範囲を長岡国道事務所に引き渡した。

12月17日 地元住民を対象とした発掘調査説明会を開催した。

平成18年度調査B区の溝・土坑・ピット等が南側へ続くことが判明したことから、調査区を拡張（D区）した。一部を18年11・12月に調査し、残りは19年4月～7月に調査した。

19年度

4月25日 現場代理人が現地に入り、現場詰所設営等の事前準備を行う。

5月 7日 調査を開始。重機による表土除去を着手。

5月 16日 ベルトコンベアの設置、開渠掘削等を行う。

5月 17日 人力による包含層掘削、遺構精査、遺構発掘を開始した。包含層は土層観察によってVa層、黄砂層、Vb層、VI層が確認でき、最も上層のVa層から順次調査した。遺構調査は各包含層の除去後に遺構確認・発掘を行った。遺構の確認面はVa層下の黄砂層上面を第1面、黄砂層下のVb層上面を第2面、Vb層下のVI層上面を第3面（B区の上面に相当する）、VI層下のVII層上面を第4面（B区の下面に相当する）としている。また、第4面（4-1）の遺構発掘終了後に、若干の掘り下げとサブトレーナによって確認した各遺構を4-2面とした。

6月 27日 3面の調査終了後にラジコンヘリによる空撮を行った。

7月 12日 地元住民を対象とした発掘調査説明会を行った。

7月 13日 4-2面の調査を終了。19年度の調査面積は延べ2,700m²、2か年の調査総面積は延べ4,995m²である。

7月 17日 県教委の終了確認を受け、平成19年度調査範囲を長岡国道事務所に引き渡した。

3) 調査体制

試掘調査

調査期間 平成15（2003）年10月6日～9日、10月16日～30日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 板屋越麟一）

調査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

総括 黒井 幸一（事務局長）

管理 長谷川二三夫（総務課長）

庶務 高野 正司（総務課班長）

調査統括 藤巻 正信（調査課長）

調査指導 田海 義正（調査課国土交通省担当課長代理）

調査担当 尾崎 高宏（調査課班長）

調査職員 田中 一穂（調査課嘱託員）

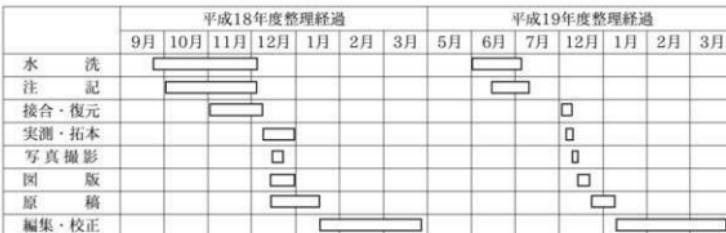
平成18年度・19年度本発掘調査

調査期間	平成18年9月4日～12月12日	平成19年4月25日～7月17日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）	新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）
調査受託	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	波多 優二（事務局長）	木村 正明（事務局長）
管理	斎藤 栄（総務課長）	斎藤 栄（総務課長）
庶務	長谷川 靖（総務課班長）	長谷川 靖（総務課班長）
調査総括	藤巻 正信（調査課長）	藤巻 正信（調査課長）
調査担当	同上	同上
調査職員	奥村 伸男	
支援組織	株式会社吉田建設	株式会社吉田建設
現場代理人	藤田 系伍（見附支店営業部長）	富山 成幸（土木部係長）
調査員	高橋 勝広（調査部主任調査員）	高橋 勝広（調査部主任調査員）
補助員		植木 紀子（調査部員）

B 整理と体制

1) 整理作業

図面・写真の整理及び出土遺物の水洗・注記等の基礎整理は、調査現場で本発掘調査と並行して行った。遺物は図化できるよう最低限の復元を行った。12月下旬から実測・拓本等の図化作業を実施するとともに、遺物の写真撮影、図版作成、原稿執筆を行った。整理作業の主な流れは下記のとおりである。



2) 整理体制

平成18年度・19年度整理体制

整理期間	平成18年12月7日～平成19年3月31日	平成19年12月1日～平成20年3月31日
整理主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）	新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）
整理受託	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	波多 優二（事務局長）	木村 正明（事務局長）
管理	斎藤 栄（総務課長）	斎藤 栄（総務課長）
庶務	長谷川 靖（総務課班長）	長谷川 靖（総務課班長）
整理総括	藤巻 正信（調査課長）	藤巻 正信（調査課長）
整理担当	同上	同上
整理職員	奥村 伸男	
支援組織	株式会社吉田建設	株式会社吉田建設
調査員	高橋 勝広（調査部主任調査員）	高橋 勝広（調査部主任調査員）
補助員	北見順子・渡辺容子	植木 紀子（調査部員）

第Ⅱ章 遺跡の環境

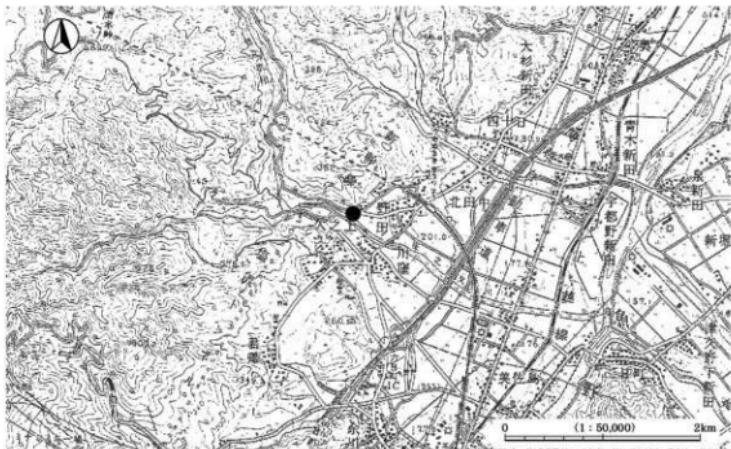
埋文事業団は堅木遺跡の周辺で、近年複数の発掘調査報告を行っている。関越自動車道六日町雪氷UTAーン路建設に伴う金屋遺跡（旧六日町余川字蟻子山35-1ほか2004・2005年調査）、六日町バイパスの建設に伴う北沖東遺跡（旧六日町小栗山字北沖19-3ほか2004・2005年調査）、長表東遺跡（旧六日町小栗山字長表322-3ほか2005年調査）である。周辺の環境については、これらの報告書に詳しく記されているので、ここではこれらを参考に概観するにとどめる。

1 地理的環境

堅木遺跡は新潟県南魚沼市大字野田字堅木820-1ほかに位置する。なお、南魚沼市は町村合併のため南魚沼郡の旧六日町・旧大和町が平成16年に合併してできた市である。さらに平成17年10月1日に旧塩沢町を編入合併するかたちで、面積584.82km²の現南魚沼市となった。人口63,329人、総世帯数19,000世帯（平成17年次）。また、近年は少雪傾向にあるが南魚沼地域は日本有数の豪雪地帯であり、年間降水量は平成17年次で2,337mmである〔2006年南魚沼市市勢要覧データ〕。

遺跡が所在する旧六日町は、新潟県中越地方南東部の六日町盆地に位置する。六日町盆地を挟んだ旧六日町の地形は東西2つの地形区に分けることができる。東は、越後山脈から三国山脈に連なる標高1,500～2,000mの起伏の大きい山岳地帯であり、六日町盆地へは急崖をなして落ち込む。それらの山地から流下し魚野川に注ぐ登川・三国川・水無川の谷筋からは広大な扇状地が拡がっている。

西は、標高800m前後の起伏の小さな魚沼丘陵が位置し、魚野川に注ぐ鎌倉沢川・平手川・庄之又川



第5図 遺跡の位置 [国土地理院 1:50,000「十日町」平成10年]

などの全長約4～5kmの小規模な河川に伴うやや傾斜の大きな扇状地を形成している。魚沼丘陵は魚野川と信濃川に挟まれた第三紀中新統上部以上の地層からなる油田褶曲帯地域であり、褶曲構造はほぼ北東～南南西方向の軸をもっている〔飯坂2006〕。六日町盆地はその中央を魚野川が北流する。並行する信濃川中流域（十日町盆地）との間の魚沼丘陵の尾根筋には、標高500～700m程度の峠道（清水峠・八箇峠・柄庭峠など）が存在する。

これら地形的な特徴は、遺跡の立地にも大きく関与していると考えられ、魚野川左岸には多数の遺跡が点在し、古くからの人々の営みの痕跡が認められる〔飯坂2006〕。また、中世にあっては上田庄をはじめ、関東との交通を抑えた坂戸城がある。

魚野川の流域は、越後と関東を結ぶ重要な交通路であった。六日町盆地は、越後平野と舟運でつながると、関東方面へ向かう三国峠越えと清水峠越えの二つの街道の結節点にあたる。また、高田平野から信濃川を経由して魚野川に至る陸路が何本も横断しており、関東地方はもちろん信州・北陸地方にも通ずる要衝の地でもあった〔桑原1976〕。また、近世に至っては三国街道の宿場町として栄えるなど、現在に至るまで関東経済圏とを結ぶ要衝地として南魚沼地域での中心的な役割を果たしてきた〔飯坂2006前掲〕。

堅木遺跡は魚野川の支流庄之又川左岸の扇頂部、河岸段丘に立地し、野田集落に隣接している。野田集落は旧六日町の北西に位置し、庄之又川の扇状地及び魚沼丘陵の縁辺部に広がり、庄之又川を挟んで対岸に位置する欠之上集落とともに、庄之又川扇状地に立地する集落としては最上流部に占地している。庄之又川は、源を樹形山と中将岳の間に発し、ほぼ一直線に東流し、岩之沢川を合わせ、二日町対岸付近で魚野川に注ぎ、中・下流には、魚野川左岸最大の氾濫原（扇状地）を作っている。この氾濫原は砂礫混在の地城が多く、扇頂部・扇端部には用水・湧水の便がきいて水田もできたが、扇央部には耕地として不適当の土地が多かった。そのため、かつては広大な原野を残していたが昭和35年に完成した中央土地改良区の開田事業によって、一望数kmの皆水田地区となった〔余川誌編集委員会1990〕。野田集落から西に進み清水峠を越えると十日町市赤倉に、庄之又川の支流岩之沢川沿いには十日町市西枯木又に至る。さらに、十日町市から松之山街道を西に進むと上越市に至る。また丘陵沿いに北上すれば南魚沼市五日町に至る。

2 歴史的環境

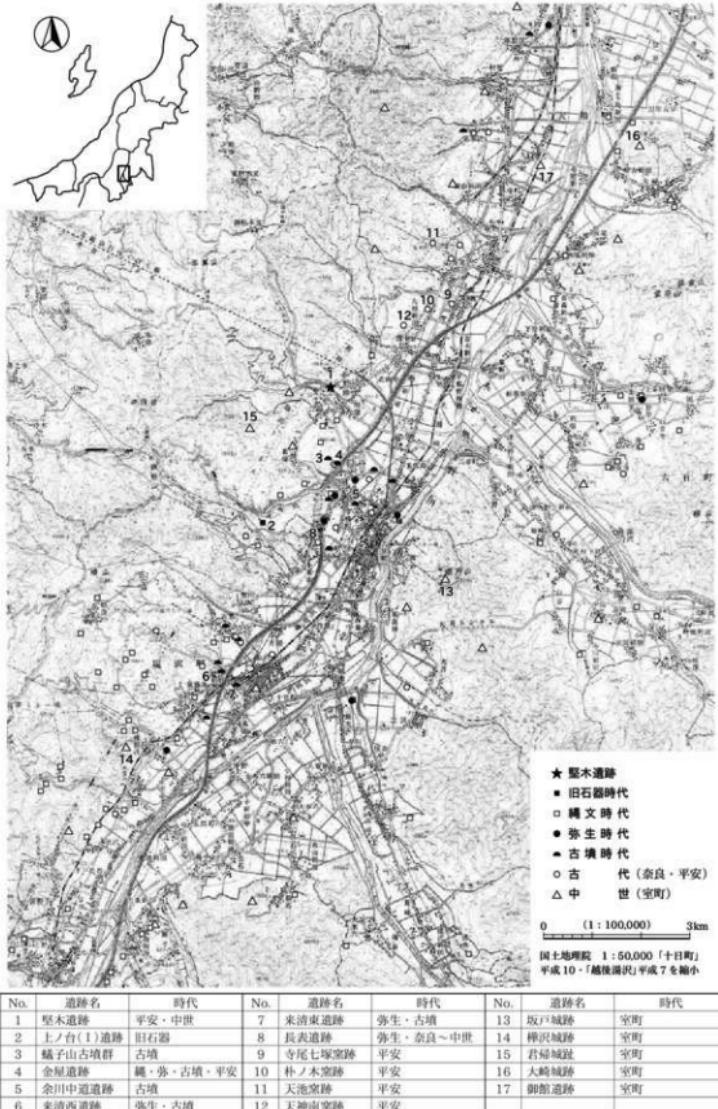
遺跡の所在する南魚沼市を含む魚沼地方は、その地理的位置から、古くから群馬県や長野県方面とも密接な関係を持っていた。以下では、南魚沼市を含む魚野川流域の旧石器時代から中世の遺跡を中心に概観する（第6図）。

旧石器時代の遺跡では上ノ台（1）遺跡（2）が確認できる。樹形山から延びる丘陵上に位置し、ブレードなどが表採されている。

縄文時代の遺跡は多数存在し、中期から後期の遺跡が多い。段丘上や丘陵上などに立地する傾向が認められる。

弥生時代になると、遺跡数は縄文時代に比較して減少するものの、一部で縄文時代の遺跡と重複するものも確認できる。遺跡の位置からみると扇状地や低地部への進出が認められる。

古墳時代になると、集落などの遺跡は弥生時代と同様、丘陵縁辺の扇状地などに立地し、丘陵上や丘陵末端などには古墳が造営される。古墳の多くは群集墳である。中期以降、魚野川流域には古墳が造営され、新潟県内でも古墳の多い地域の1つとなっている。蟻子山古墳群（3）の立地する丘陵の裾部の近尾川に



第6図 竪木遺跡と周辺の遺跡

〔版坂2006〕を改変)

より形成された扇状地には金屋遺跡（4）が位置する。金屋遺跡は古墳前期～後期の集落で、竪穴住居等が検出された。また古墳中期後半の余川中道遺跡（5）では竪穴住居のほか居住地から少し離れた低地で土器集中遺構が検出された。土器集中遺構からは供獻土器のほか、白玉を主とした石製模造品が出土しており、集落とそれに伴う祭祀場と考えられる。このような状況は旧塩沢町に位置する米清西遺跡（6）・米清東遺跡（7）でも確認されている〔安立2001・2002〕。

古代の南魚沼市周辺は『和名類聚抄』によると、魚沼郡に当たる。魚沼郡には加瀬・那珂・蘿上・千屋の4郷が確認でき、南魚沼市の旧六日町から旧塩沢町は加瀬郷に相当する〔余川誌編集委員会1990〕。古代の遺跡は扇状地とともに丘陵上にも分布する傾向にある。魚野川左岸の扇状地に位置する長表遺跡（8）では土師器や須恵器、木製品が出土した。遺物量に比して、墨書土器の割合が高い点が注目されている〔戸根ほか1986〕。金屋遺跡（4）では竪穴住居や掘立柱建物が検出され、土師器や須恵器とともに少量ながら灰釉陶器も出土した。出土した須恵器は、産地が地元であると考えられる製品のほかにも佐渡・阿賀北・頸城の製品が見られ、1軒の住居内で多数の産地が見られることは特異である〔飯坂2004〕。魚沼郡内の須恵器窯跡は魚野川左岸の丘陵部に寺尾七塚窯跡（9）・朴ノ木窯跡（10）・天池窯跡（11）・天神南窯跡（12）が確認できる。寺尾七塚窯跡・朴ノ木窯跡は丘陵底部に位置し、7世紀末の食膳具、貯蔵具がみられる。検出された状況から、斜面部に7m程度の窯体を持つ小規模なものである。また群馬系の杯蓋が認められる。〔田村2002〕。天池窯跡・天神南窯跡は丘陵中腹に位置する。9世紀前半の食膳具、貯蔵具がみられる。また、天池窯跡では、杯の底部切り離しは、技術系譜が異なる糸切りとヘラ切りによる2つの技法が見られる〔田村2002〕。また、土師器片が出土していることから土師器生産も行われていた可能性が高い。

堅木遺跡（1）は古代の遺跡である。周辺にはわずかに绳文時代の遺跡や中世の城館跡が位置するのみであるが、鎌倉沢川流域の遺跡分布などを参考にすると丘陵縁辺に遺跡が所在する可能性があり、また扇状地性堆積物に遺跡が覆われている可能性も考えられる。

中世になると丘陵上や沖積地に城館が分布する。巻機山から六日町盆地中央にのびた尾根の先端に位置する坂戸山には、坂戸城跡（13）が所在する。南北朝期、魚沼地方に勢力をもっていた南朝方の新田氏を越後守護上杉氏が駆逐した後、上杉氏の家臣長尾氏が坂戸山を本拠とした。慶長3（1598）年、上杉氏の会津への転封に伴い、越前から堀氏が入城する。その後、慶長15（1610）年、堀氏が信濃国飯山に転封となったことにより、坂戸城は廢城となった。現存する城郭施設は16～17世紀初頭に築かれたもので、丘陵のほぼ全体に分布する。坂戸城は丘陵上の城郭部分と丘陵西麓の居館部分からなり、石垣も残存していて、昭和54年3月12日には国指定史跡となった〔大河内1980〕。また樺沢城跡（14）は魚野川と登川の合流点から約2km魚野川本流を遡った丘陵上に所在する。樺沢城は坂戸城の支城としてその配下が在番した。坂戸城や周辺の山城は越後と関東を結ぶ三国街道沿いに位置する一方、越後府中と三国街道を結ぶ街道を押さえる位置にある。堅木遺跡周辺の君帰集落背後の丘陵上に所在する君帰城跡（15）も坂戸城の支城として、妻有方面への出入りを押さえる役割を担ったものと考えられている。大崎城跡（16）は魚野川と田川の合流付近、八海山系からのびる丘陵上に所在し、南東側の丘陵下には大崎館跡が位置する。御館遺跡（17）は魚野川氾濫原の微高地に立地する中世城館跡である。掘立柱建物や井戸側を伴う井戸などが検出されたとともに、青磁類・染付舶載品が出土した。階級的人物の居住が推測される〔池田1992〕。このほかにも三国川の流域にいくつかの城館跡が確認できる。

第III章 調査の概要

1 調査区とグリッドの設定

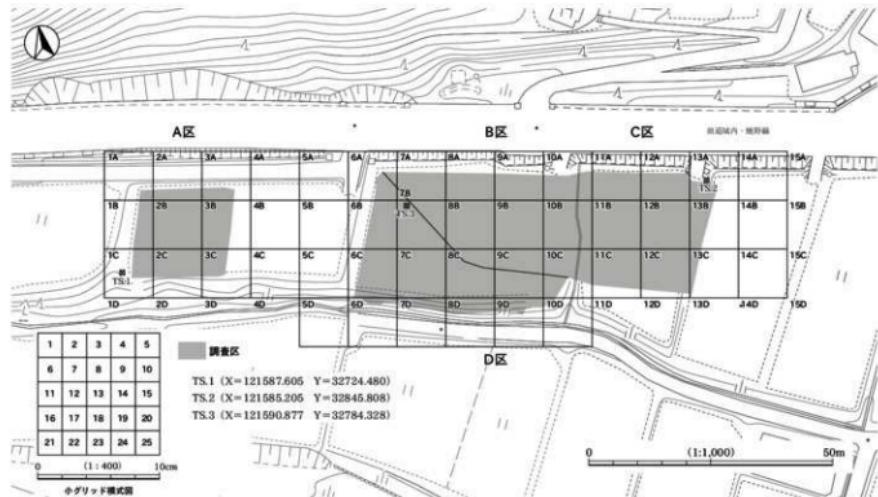
遺跡は庄之又川左岸の狭い河岸段丘に立地し、標高は現地表下約0.7mの229.9~233.8mを測る。調査前の現況は水田で、周辺の水田の標高は約233mを測り、西から東に傾斜する。

現地形により調査対象を当初A~Cの3区に分けた。当地区の現況は段々田圃で、調査区内にもA区・B区間とB区・C区間の2か所に大きな段差が存在している。土層断面の観察により、この段差は近世以降の地行で出現し、最終的には昭和30年代の耕地整理によって現状となったと考えられる。この段差は古代面では傾斜の強弱程度と考えられ、さほどの段差は存在しなかったようである。

なお、調査の進展により、B区遺構群が南側範囲外に連続することが明らかになったことから、調査対象範囲を拡張しD区とした。

グリッドは任意の点を基点とし、各調査区それぞれに最低4か所のグリッド杭が入るよう設定した。南北軸は真北から $10^{\circ} 06' 24.49''$ 東偏している。

大グリッドは1辺が10mの方眼とし、南北軸を北から南にアルファベット順、東西軸を西から東に算用数字順とし、両者の組み合わせで、例えば「3B」のように表示する。小グリッドは大グリッドを2m方眼に25分割し、北西隅を1(基点)とし南東隅が25となるように算用数字順で表し、「3B14」というように大グリッド表示の後に付して呼称した。



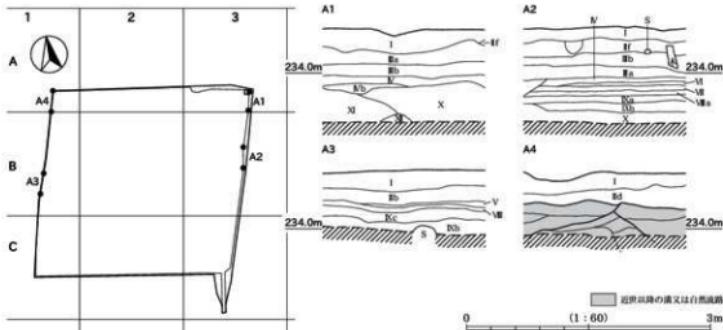
第7図 調査区とグリッド設定図

2 基本層序

A区は標高の最も高い所にあり、最も遺構の遺存状態が良いと考えていた。しかし、実際には河川の氾濫や流路の発生などによる擾乱が著しく、遺存状態は良くなかった。反してB区は古代の遺物包含層が残り、調査区の中では最も良好な遺存状態であった。また、B区とC区の土層のつながりも良く観察できた。C区は最も低位置にあり、近現代の流路による擾乱や近世以降の水田耕作などにより、中世の遺構は破壊され、古代の遺物包含層もほとんど残されていなかった。

A区基本層序

- I 層 黄灰色土 現表土・現水田耕作土。
- II 層 昭和30年代の耕地整理以前の堆積土及び耕作土をまとめた。
 - II a層 黄灰 旧水田耕作土。1~3cmの小礫を少量含む。締まり・粘性ともにある。
 - II b層 灰黄褐色砂礫 自然流路又は河川の氾濫によって運ばれたと考えられる。
 - II c層 黄灰色粘質土 旧水田耕作土。II b層堆積前の水田耕作土で、小礫をほとんど含まない。締まりややある。粘性ある。
 - II d層 黄灰色粘質土 旧水田耕作土。小礫を少量含む。II c層に比べ締まりが強い。
 - II e層 灰黄褐色砂礫 河川の氾濫によるものと考えられる。
 - II f層 灰黄褐色砂礫 II e層との間に段差が認められたため分層した。同一砂礫層の可能性がある。
- III 層 近世以降の水田耕作土と考えられる。
 - III a層 黄灰色粘質土 1mm以下の白色細粒を含む。締まりややあり、粘性ある。
 - III b層 黄灰色粘質土 3mm以下の白色細粒を少量含む。締まりややあり、粘性ある。
- IV層~VII層 中世から近世頃の堆積土層。
 - IV a層 灰色土 青灰色シルト・小礫を少量含む。締まり・粘性ともにある。
 - IV b層 灰色土 小礫を多く含む。締まり・粘性ともある。
- V 層 暗灰黄色土 暗灰黄色砂層。締まり・粘性ともに弱い。

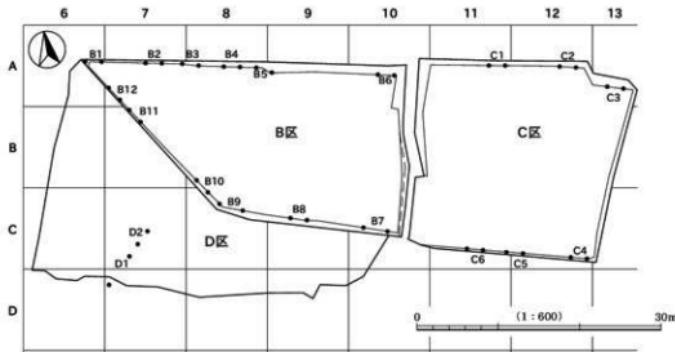


第8図 A区基本層序

- VI 層 紫黒色土 腐植土で木の葉・小枝・樹皮などを多く含む。締まり弱い。粘性ややある。
- VII 層 暗緑灰色土 暗緑灰色砂層。粒子が0.5mm以下と細かい。西壁側では色調が黄褐色となる。
- VIIa層 黒色粘質土 古代遺物包含層でB・C区のVb層に対応すると考えられる。白色細粒・炭化物を含む。
- VIIb層 灰黄褐色土 砂粒・小礫を多量に含む。当土層はA区のみで確認されている。
- IXa層 黒褐色土 古代遺構検出面。基本的にはX層と同様のシルトで、VII層土の混じり込みが多い。
- IXb層 VII層土の混入が少ない。
- IXc層 VII層土をほとんど含まない。
- X 層 青灰色土 地山で河川の氾濫や新たな流路の発生等の影響を受けている。当土層は青灰色シルト層・疊層・砂層が互層堆積している。
- XI 層 暗褐色土 5~20cmの礫を多量に含む。
- XII 層 暗灰色シルト層。

B区基本層序

- I 層 当土層は昭和30年代の耕地整理の造成土である。
- Ia層 暗灰黄色土 現表土・現耕作土 現水田耕作土及び盛り土層。
- Ib層 暗灰黄色土 埋め土。コンクリート塊・大小礫多く含む。
- Ic層 黒褐色土 暗渠埋め土。土管の周りに粗粒を詰めている。
- Id層 暗灰黄色土 塵み地形(旧河川)の埋め土。シルト塊を多く含む。
- II 層 耕地整理以前の水田耕作土及び埋め土・盛り土。
- IIa層 黒褐色粘質土 水田耕作土。腐植土でいわゆるガツボ層。10cm以下の礫を少量含む。
- IIb層 黄灰色土 青灰色シルト塊を多く含む埋め土。
- IIc層 黄灰色土 青灰色シルト塊を少量含む埋め土。
- IId層 暗黄灰色粘質土 水田畦畔。黄褐色砂を多く含み、締まり・粘性がある。
- IIe層 黄灰色土 黄灰色シルトを主体とした埋め土。旧水田の造成土と考えられ、当土層の上に畦畔



第9図 B・C・D区

が設けられている。

III 層 近世以降の耕作土及び埋め土・盛り土。

III a 層 黒褐色粘質土 近世以降の水田耕作土。灰白色粒子・小礫を少量含む。腐植土で板材や小枝などの木質を含み、表面が茶色に酸化する。締まりはやや弱く、粘性がある。

III b 層 暗灰黄色土 水田畦畔。基本的にIII a層と同様であるが、板材や小枝はあまり含まない。当畦畔はIII c層上に作られている。締まりややある。

III c 層 褐灰色粘質土 近世以降の水田耕作土。灰白色粒子をやや多く含む。腐植土で木材や小枝を最も多く含む。当土層は7A区・8A区の境付近で後世の地行又は耕作で消滅している。

III d 層 暗灰黄色土 近世以降の水田畦畔。III c層に類似し、木材や小枝をIII b層よりも多く含む。

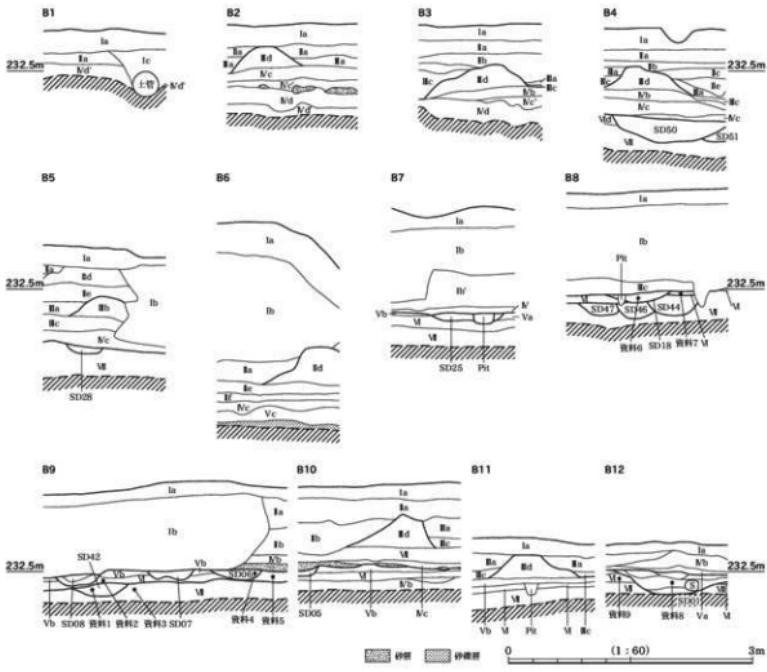
IV 層 中世から近世頃の堆積土層。

IV a 層 黒褐色土 埋め土。黒褐色土塊を主に青灰色シルト塊・黄砂が混在する。当層以下にはIII層で出土する木材・小枝がほとんど認められない。締まり・粘性ともにややある。

IV b 層 黒褐色土 灰白色粒子と1~3mmの小礫を含む。締まりがある。粘性ややある。

IV c 層 黄灰色土 灰白色粒子と小礫を多く含む。堅く締まる。

IV d 層 黄灰色土 埋め土。灰白色粒子と小礫を多く含む。黒褐色土塊と黄褐砂塊・青灰色シルトを斑



文状に含み、それらの含有量によってIV d1層からIV d3層の三分できる。IV d1層は青灰色シルト塊を含まない。IV d2層は黒褐色土塊・黄褐色砂塊・青灰色シルト塊を最も多く含む。IV d3層は黒褐色土塊・黄褐色砂塊・青灰色シルト塊が少ない。

V 層 古代遺物包含層。黄砂を挟み上層のV a層と下層のV b層に分層できる。

V a層 黒色粘質土 砂粒を多くと0.1mmほどの白色細粒を含む。本層直下には黄砂層が堆積している。縫まりはあるが、粘性ややある。

V b層 黑褐色粘質土 0.1~0.2mmの白色細粒を少量と2~3mmの炭化物を含む。砂粒はほとんど含まず、VI層土の混入が目立つ。縫まり・粘性がある。

VI 層 暗灰黄色シルト 上面古代遺構検出面。当土層上位はV層土が混入する。縫まりややあり、粘性がある。

VII 層 青灰色シルト 下面古代遺構検出面。縫まりは弱く、粘性がある。当土層は部分的に小礫層・砂層が混在しており、河川の氾濫や新たな流路の発生などの影響と考えられる。

C区基本層序

C区の基本層序はB区基本層序とほぼ同一である。

I 層 当土層は昭和30年代の耕地整理の造成土である。

I a層 暗灰黄色土 表土・現耕作土 現水田耕作土及び盛り土層。

I e層 にぶい黄褐色土 現農業用水の掘形埋め土。

I f層 暗灰黄色土 現水田畦畔。

II 層 耕地整理以前の耕作土及び埋め土・盛り土。

II a層 黒褐色粘質土 旧水田耕作土。礫をB区に比べ多く含む。

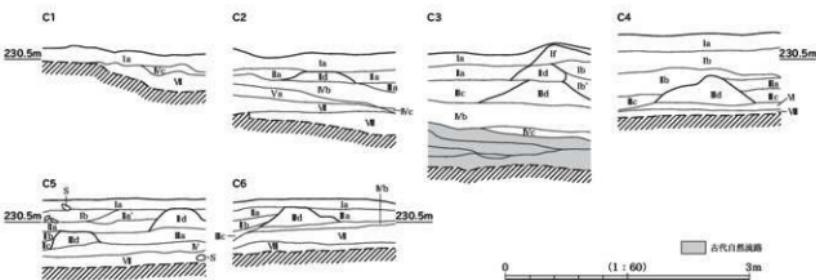
II d層 暗黄灰色粘質土 旧水田畦畔。黄褐色砂を多く含み縫まり・粘性がある。

II f層 灰オリーブ色粘質土 旧用水の埋め土。

III 層 近世以降の耕作土及び埋め土・盛り土。

III a層 黑褐色粘質土 近世以降の水田耕作土。灰白色粒子・小礫を少量含む。板材や小枝などの木質を含み、表面が茶色に酸化する。縫まりはやや弱く、粘性がある。

III c層 褐灰色粘質土 近世以降の水田耕作土。灰白色粒子をやや多く含む。木材や小枝をB区と比べ



第11図 C区基本層序

- て多く含む。表面が茶色に酸化する。
- III d 層 暗灰黄色土 近世以降最初に作られた水田畦畔。
- III d' 層 暗灰褐色土 III c 層と III d 層の混土層。畦畔の修復又はかさ上げ土と考えられる。
- IV 層 中世から近世頃の堆積土層。北壁は旧河川の上に位置するため当土層以下は礫を多く含んでいる。
- IV b 層 黒褐色土 灰白色粒子と小礫を含む。締まりがある。粘性ややある。
- IV c 層 黄灰色土 灰白色粒子と小礫を多く含む。堅く締まる。
- V 層 古代遺物包含層はほとんど検出できず、古代河川 SD31 の覆土として残っている。
- V c 層 褐色砂礫層 当土層には V a 層土塊が混在しており、SD31 の氾濫で形成された土層と考えられる。
- VI 層 暗灰黄色シルト 古代遺構検出面。当土層上位は V 層土が混入している。締まりややあり、粘性がある。
- VII 層 暗オリーブ灰色シルト 締まりは弱く、粘性がある。当土層は部分的に小礫層・砂層が混在しており、河川の氾濫や新たな流路の発生などの影響と考えられる。

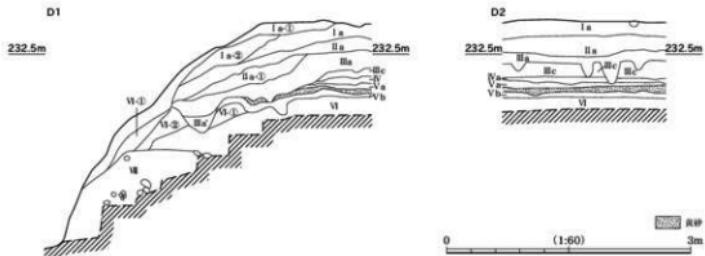
D 区基本層序

当区は基本層序がわりと良好に残され、遺物包含層である V a 層と V b 層は黄砂層の良好な堆積によって上下に分層できた。以下、D 区の基本層序は B 区基本層序とほぼ同じであることから、B 区との相違を記述することにしたい。

I ~ IV 層は水田畦畔こそ確認できなかったが、B 区と良好に連続している。III a 層はところどころに地割れによる落ち込みがみられる。V 層は V a · V b 層の間に厚さ 5 ~ 10cm の黄砂層が当区の東側をのぞく広い範囲に堆積し、B 区において分層した V a · V b 層の上下関係は V a 層が上位であることが明確となった。また、黄砂層は庄之又川の氾濫によって運ばれたものと考えていたが、当区 2 面のビットには断面ロート状に吹き上がるような黄砂に貫かれたもの（図版 27）があることから、単純に河川の氾濫とも決められないようであり、現状では不明としておきたい。

D 区南端の河岸段丘崖では VII 層下に庄之又川の旧河床と考えられる砂礫層が確認でき、この砂礫層を VII 層とした。

VII 層 黄褐色土 砂礫層で酸化している。礫のすき間に粗い砂と粘質土が混在している。



第12図 D 区基本層序

第IV章 遺構

1 A区の遺構

当区は河川の氾濫及び流路の発生などの擾乱を多く受け、砂礫層、砂屑の堆積が見られる。また、近世以降の擾乱もあり、遺物包含層及び遺構の遺存状態は良くなかった。検出した遺構は擾乱の影響を受けた調査区中央2B南部と1A-Cに遺存している。擾乱の影響の少なかった3A・Bにはまったく遺構は存在していなかった。検出した遺構は土坑3基、ピット32基である。土坑は調査区ほぼ中央の2Bと2Cの境付近で3基検出している。A-SK01とA-SK02は坑内に礫が埋められている。時期不明のピットは平面形が円形・楕円形のもので径10~30cm、深さは5~20cmである。調査区内のやや高地を遺地していることから何らかの施設と考えられるが、建物、柱穴列、杭列になるようなものは認められない。

以上の遺構群はIX層上面で検出され、覆土はB区上面遺構及びC区遺構覆土のV層土に対応するⅧ層土を主体としていることから古代の所産と考えられる。

遺物は今回出土していないが、試掘調査では少量の土師器が出土しており、その出土層位を包含層(Ⅷ層)としている。また、試掘では柱根・杭根群を検出し、C¹⁴の測定値から中世の所産であり本発掘調査が必要と判断した。しかし、今回の調査では柱根・杭根群が包含層上に堆積するⅧ層の上面で柱根痕跡を確認し、杭穴に入り込む土は近世以降の堆積土であるⅢ層又はⅣ層であると判明したことから、柱根・杭根は近世以降の所産と判断した。そこで、県教委・市教委と協議し、調査対象から除外することとした。なお、柱根には掘立式と打ち込み式があった。柱材は角材と丸材があり、角材には割り材と面取りした角材がある。丸材には樹皮が残るものも認められた。杭根は打ち込み式で樹皮なしの丸材が大半である。

A 土 坑

A-SK01 (図版3・20)

2B24・25に位置する。平面形は略円形を呈し、径約1.1m、深さ約20cmを測る。やや窪む底部から壁が緩やかに立ち上がり、断面形は弧状を呈している。覆土には青灰色シルト塊が多く混入し、埋め戻されたと考えられる。坑底には5~15cmの礫が10個まとめて置かれていた。出土遺物はない。

A-SK02 (図版3・20)

2C7に位置している。平面形は略円形を呈し、径約62cm、深さ約34cm。窪んだ底部から壁がやや急に立ち上がり、断面形は半円状を呈している。覆土は黒色粘質土に酸化鉄分が斑文状に混在する。南西壁には径約30cmの礫が立て掛けるように埋め込まれていた。出土遺物はない。

A-SK09 (図版3・20)

調査区中央部の2B18・23に位置している。平面形は略円形を呈し、径約1.3m、深さ約8cm。やや窪んだ底部から壁が緩やかに立ち上がり、断面形は弧状を呈している。覆土は黒色粘質土に酸化鉄分が斑文状に混在している。出土遺物はない。

2 B区上面の遺構

当区はA区同様に河川の氾濫及び流路の発生などの擾乱を受け、砂礫層、砂層の堆積が見られる。また、近世遺構の擾乱もあるが、遺物包含層と遺構の遺存状態はあまり良好でない。しかし、遺物包含層はA・C区と比べ調査区に広く遺存している。

V層包含層上面には杭根が検出され、すべて打ち込み式である。入り込む上はII層土をベースとしている。また、杭根の周囲からは近世以降の陶器器が出土し、棒掛け兵士の磁器人形も出土していることから近現代の所産と考えられる。杭根はA区の柱根・杭根同様に調査対象から除外した。また、III層（近世以降の水田土層）からは木製部材が出土し、長さ約20cm、幅約4cm、厚さ約5mmほどでホゾ・ホゾ孔のあるものなどを見られた。

古代の遺構はVI層の上面とVII層の上面（VI層下面）で検出し、VI層上面（以下、上面）で検出した遺構は炉跡4基、土坑6基、溝30条、ビット808基である。このうち、炉跡は調査区の微高地を東西方向に分布している。土坑はB-SK05～07がまとまっている。溝とビットは分布の濃淡が若干認められるものの調査区のはば全面に分布している。

溝は方向性からA～Eの5群に分けられると考えられる。北東方向に向くB-SD01～04とB-SD30のA群、北北西方向に向くB-SD05～15のB群、北北東方向に向くB-SD16・18・19とB-SD22～26のC群、西北西方向に向くB-SD17・20・21・29のD群、調査区中央から北側に位置するB-SD14・15・27・28のE群である。これらの溝は各群内の合流は認められるが、切り合いは確認できない。ほかの群との重複はC群とD群以外は現状では認められない。また、覆土はVa層とVb層の間に堆積する黄砂を含むものとあまり含まないものが認められる。それが直ちに時期の相違を表すか否かは出土遺物がないため明確でなく、同一群内にも黄砂を含むものとあまり含まないものが混在している。その割合は黄砂を含むもの14条、黄砂を含まないものの16条ではほぼ半々である。D群はすべて黄砂を含まないが、ほかの群は概ね半数が黄砂を含んでいる。

ビットは平面形が円形・楕円形のもので径10～30cm、深さは5～20cmを測る。ビットは建物、柱穴列、杭列として組めないが、何らかの施設であったと考えられる。なお、ビットにも黄砂を含むものと含まないものが認められた。

以上の遺構の覆土はV層土を主体としており、炉跡はVa層土を主体とし、溝・ビット・土坑は若干下がりVa層直下の黄砂層を含むものと黄砂を含まないVb層土を主体とするものがあると考えられる。ただし、遺構出土遺物ではほぼ同時期に取まってしまうようである。

A 炉跡

B-1号炉跡（図版4・5・22）

7B5に位置している。平面形は楕円形を呈し、長径約79cm、短径約66cmを測る。長軸方位はN-88°-Wを指す。当炉跡は火床の遺存であり、掘形は存在しない。火床面は中央の径約30cmが明赤褐色によく焼けていた。しかし、火床は被熱硬化が認められずやや軟弱で、厚みは約4cmである。

当炉跡の東半には土師器甌・杯、被熱剥離した礫・剥片が散在している。これらは炉の周囲で使用されたものと考えられる。周囲の堆積土が通常の遺物包含層と異なり、焼土粒子及び焼土塊を含んでいる。ま

た、堆積土には砂質を多く含み基本層序のV a層に近似することから、比較的新しい遺構と考えられる。出土遺物から概ね平安時代中頃としておきたい。

B-2号炉跡（図版4・5・22）

9A24から9B4に位置している。平面形は大半を壊されているため不明瞭であるが、遺存部分から円形又は梢円形と考えられるが、規模及び長軸方位は不明である。当炉跡は火床の遺存であり、掘形は遺存していない。火床面は暗褐色土が被熱して淡赤色化していた。火床の厚みは約4cmである。出土遺物は土師器細片のみである。

B-3号炉跡（図版4・5・22）

10B6・10B7に位置し、B-4号炉跡と近接している。平面形は梢円形を呈し、長径約70cm、短径約34cmを測り、西辺が幅約10cm、長さ約20cm張り出している。長軸方位はN-16°-Wを指す。当炉跡は火床の遺存であり、掘形は遺存していない。火床面は暗褐色土が被熱により淡赤色化している。火床の厚みは約2cmである。周囲からの出土遺物もないため時期は明確でない。

B-4号炉跡（図版4・5・22）

10B7に位置し、B-3号炉跡と近接している。平面形は梢円形を呈し、長径約85cm、短径約36cmを測り、西辺が幅約10cm、長さ約20cm張り出している。長軸方位はN-3°-Wを指す。当炉跡は火床下層に地山のVII層土を主体にV b層土が混在していることから掘形を埋め戻して火床としている可能性がある。火床面は暗褐色土が被熱して淡赤色化していた。火床の厚みは約5cmで、火床上層の被熱度合いが高くなっていた。遺物は出土していない。

B 土 坑

B-SK03（図版4・5・21）

8B5に位置している。平面形は梢円形を呈し、長径約1.06m、短径約71cm、深さ約5cmを測る。長軸方位はN-7°-Eを指す。ほぼ平坦な底部から壁が緩やかに立ち上がり、断面形は弧状を呈している。覆土は地山の暗灰黄色土が混入していた。遺物は土師器窯が出土したものの中底のみであり、時期は明確にできない。

B-SK04（図版4・5・21）

8B22～8C2に位置している。平面形は梢円形を呈し、長径約1.8m、短径約1m、深さ約36cmを測る。長軸方位はN-12°-Eを指す。東側に下がる底部から壁が急に立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は紫黒色腐植土で炭化物が多く混入し、すぐに酸化し茶系色に変色する。土師器細片を出土したが、時期は明確でない。

B-SK05（図版4・5）

9A23～9B3に位置し、B-2号炉跡、B-SK06・07と近接している。平面形は梢円形を呈し、長径約77cm、短径約50cm、深さ約8cmを測る。長軸方位はN-33°-Wを指す。北側へやや下がる底部から壁がやや急に立ち上がり、断面形は弧状を呈している。覆土は炭化物を含んでいた。土師器細片を出土したが、時期は明確でない。

B-SK06（図版4・5）

9B3～9B4に位置し、B-2号炉跡、B-SK05・07と近接している。平面形は梢円形を呈し、長径約90cm、短径約50～60cm、深さ約6cmを測る。長軸方位はN-45°-Wを指す。やや凹凸のある底部

から壁が緩やかに立ち上がり、断面形は弧状を呈している。覆土には暗灰黄色土塊が混在し、埋め戻された可能性がある。覆土上位で土師器細片が出土したが、時期は明確でない。

B-SK07 (図版4・5)

9A23～9B3に位置し、B-2号炉跡、B-SK05・06と近接している。平面形は楕円形を呈し、長径約40cm、短径約30cm、深さ約11cmを測る。長軸方位はN-45°-Wを指す。ほぼ平坦な底部から壁が垂直に近い斜度で立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土には暗灰黄色シルト塊が混在し、埋め戻された可能性があった。覆土上位で土師器細片を出土したが、時期は明確でない。

B-SK08 (図版4・5)

8B5～9B1に位置し、B-SK03と近接している。平面形は円形を呈し、径約34cm、深さ約10cmを測る。中央のやや窪んだ底部から壁がやや緩やかに立ち上がり、断面形は弧状を呈している。覆土1層には被熱したような淡赤色部分があった。覆土中で土師器細片を出土したが、時期は明確でない。

C 溝

B-SD01 (図版4・6・21)

7A13～7A21にかけて検出し、中央がふくらみ南西側にテラス状の段を持つている。南西端はD区へ逃げ、北東端は攪乱に壊されている。規模は検出長約4.8m、幅約0.8～2.1m、深さ約32cmを測る。走行方向はN-54°-Eを指している。窪んだ底部から壁が緩やかに立ち上がり、断面形は弧状を呈している。覆土は底部にV a層とV b層の間に堆積する黄砂（以下、黄砂と記載する）を含む土層が堆積していた。当溝は上面の溝の中では幅が広く、溝幅の狭いB-SD02～30とは同様に扱うべきでないとも考える。遺物は出土していない。

B-SD02 (図版4・6・21)

7B10～7B14にかけて概ね直線的に延び、南西端はD区へ逃げ、北東端は自然消滅している。規模は検出長約2.7m、幅約25cm、深さ約6cmを測る。走行方向はN-68.5°-Eを指している。ほぼ平坦な底部から壁がやや緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黄砂を多く含んでいた。遺物は出土していない。

B-SD03 (図版4・6・21)

7B20～8Bにかけて蛇行して延び、南西端はD区へ逃げ、北東端は自然消滅している。規模は検出長約3.8m、幅約20～40cm、深さ約5cmを測る。走行方向は概ねN-50°-Eを指している。ほぼ平坦な底部から壁がやや緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黄砂を多く含んでいた。遺物は出土していない。

B-SD04 (図版4・6・21)

7B20～8B17にかけて検出し、直線的に延びている。南西端はD区へ逃げ、北東端は自然消滅している。規模は検出長約3.5m、幅約20～35cm、深さ約5cmを測る。走行方向はN-59°-Eを指している。ほぼ平坦な底部から壁がやや急に立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は暗黄灰色土塊を多く含んでいた。遺物は出土していない。

B-SD05 (図版4・6・21)

8B7～8B17にかけて検出した。8B17・18と8B22・23の境で屈曲するが、ほかは直線的で逆「く」字形を呈している。南端はD区へ逃げ、北端は自然消滅している。B-SK14と重複し、当土坑が古い。規

模は検出長約4.4m、幅約30～44cm、深さ約5cmを測る。走行方向は南部N-22°-E、北部N-31°-Wを指している。ほぼ平坦な底部から壁がやや緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黄砂をあまり含まない。遺物は出土していない。

B-SD06 (図版4・6・21・22)

8B18～8C8にかけて検出し、緩やかな弧状を呈している。南端はD区へ逃げ、北端は自然消滅している。規模は検出長約6.15m、幅約28～47cm、深さ約14cmを測る。走行方向は南部N-11°-E、北部N-16.5°-Wを指している。ほぼ平坦な底部から壁がやや急に立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黄砂を多く含んでいた。遺物は出土していない。

B-SD07 (図版4・6・21・22)

8B18～8C8にかけて検出し、8B24で緩やかに屈曲するが、ほかは直線的である。南端はD区へ逃げ、北端は自然消滅している。規模は検出長約6.8m、幅約22～43cm、深さ約6cmを測る。走行方向は南部N-18°-E、北部N-17.5°-Wを指している。ほぼ平坦な底部から壁がやや緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黄砂を多く含んでいた。遺物は出土していない。

B-SD08 (図版4・6・21・22)

8B9～8C13・14にかけて検出した。8C4で屈曲しB-SD10と合流する。南西端はD区へ逃げ、北東端は自然消滅している。8B24ではB-SD09と合流している。規模は検出長約7.5m、幅約20～45cm、深さ約6cmを測る。走行方向は南部N-16°-E、北部N-20°-Wを指している。やや窪んだ底部から壁がやや緩やかに立ち上がり、断面形は弧状を呈している。覆土は黄砂を多く含んでいた。遺物は出土していない。

B-SD09 (図版4・6・21)

8B14～8B24区にかけて検出し、B-SD08と合流する8B20から直線的に延びている。北東端は自然消滅している。規模は検出長約4.2m、幅約25～45cm、深さ約5cmを測る。走行方向はN-1°-Eを指している。ほぼ平坦な底部から壁がやや緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黄砂を含んでいた。遺物は出土していない。

B-SD10 (図版4・6・21)

8B9～8C4にかけて検出し、8C4で屈曲するが、概ね直線的である。北東端は自然消滅している。規模は検出長約7.45m、幅約25～50cm、深さ約10cmを測る。走行方向は概ねN-2.5°-Eを指し、北部先端がやや西寄りに向きをかえている。ほぼ平坦な底部から壁がやや緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黄砂をあまり含まない。遺物は出土していない。

B-SD11 (図版4・6・21・22)

8B15～8C9・10にかけて検出し、B-SD12と合流する8B20で屈曲するが、ほかは概ね直線的である。南端はD区へ逃げ、北端は自然消滅している。規模は検出長約8.95m、幅約25～46cm、深さ約10cmを測る。走行方向は南部N-14°-E、北部N-15°-Wを指している。やや窪んだ底部から壁がやや緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黄砂をあまり含まない。遺物は出土していない。

B-SD12 (図版4・6・21・22)

8B15～8C10にかけて検出し、緩やかな弧状を呈している。南端はD区へ逃げ、北端はB-SD11に合流している。8C21ではB-SD13と合流している。規模は検出長約7.5m、幅約22～46cm、深さ約5cm

を測る。走行方向は南部が概ねN-11°-E、北部が概ねN-12°-Wを指している。ほぼ平坦な底部から壁がやや緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黄砂をあまり含まない。遺物は出土していない。

B-SD13 (図版4・6・21・22)

9B6～9B21にかけて検出し、概ね直線的で9B16で屈曲する。9B21でB-SD21と合流、北東端は自然消滅している。規模は検出長約6.65m、幅約29～40cm、深さ約6cmを測る。走行方向は南部N-17°-Eを指し、北部N-17°-Wを指している。窪んだ底部から壁が緩やかに立ち上がり、断面形は弧状を呈している。覆土は黄砂をあまり含まない。遺物は出土していない。

B-SD14 (図版4・6・21)

9A21～9B17にかけて検出し、中央部が西側へ弧状に張り出す。北端はB-SD28と連続し調査区外へ逃げるものとみられ、南端は自然消滅している。規模は検出長約7.45m、幅約25～43cm、深さ約8cmを測る。走行方向は概ねN-11°-Wを指している。ほぼ平坦な底部から壁がやや緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黄砂をあまり含まない。当溝とB-SD28は同一遺構の可能性がある。遺物は出土していない。

B-SD15 (図版4・6・21)

9A22～9B13にかけて検出し、蛇行している。南・北端とも自然消滅している。規模は検出長約6.15m、幅約25～33cm、深さ約8cmを測る。走行方向は概ねN-11.5°-Wを指している。窪んだ底部から壁がやや緩やかに立ち上がり、断面形は弧状を呈している。覆土は黄砂を多く含んでいた。遺物は出土していない。

B-SD16 (図版4・6・21・22)

9B18・19～9C6・7にかけて検出し、概ね直線的である。南端はD区へ逃げ、北端は自然消滅している。9C2区ではB-SD29と合流している。規模は検出長約8.5m、幅約26～80cm、深さ約7cmを測る。走行方向は南部N-17°-Eを指している。やや凹凸のある底部から壁がやや緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黄砂をあまり含まない。遺物は出土していない。

B-SD17 (図版4・6・21・22)

9B23で検出し、直線的である。B-SD18と合流する。西端は自然消滅している。規模は検出長約0.9m、幅約20cm、深さ約4cmを測る。走行方向はN-86°-Wを指している。ほぼ平坦な底部から壁がやや緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黄砂をあまり含まない。遺物は出土していない。

B-SD18 (図版4・6・21・22)

9B19～9C7・8にかけて検出し、緩やかな弧状を呈している。南端はD区へ逃げ、北端は自然消滅している。9C3でB-SD19、9B23でB-SD17と合流している。規模は検出長約7.8m、幅約34～58cm、深さ約8cmを測る。走行方向は概ねN-23°-Eを指している。やや窪んだ底部から壁が緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黄砂をあまり含まない。遺物は出土していない。

B-SD19 (図版4・6・21・22)

9B15～9C3で検出した。9B24と9B25でほぼ直角に屈曲し、南部は弧状、北部は直線的である。北端は自然消滅している。9B20ではB-SD18、9B20ではB-SD20、9B20・25ではB-SD21と合流している。規模は検出長約8.9m、幅約23～58cm、深さ約12cmを測る。走行方向は南部N-40°-E、

中央部N-87°-W、北部N-14°-Eを指している。やや窪んだ底部から壁がやや緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黄砂をあまり含まない。遺物は出土していない。

B-SD20 (図版4・6・21・22)

9B7～9B20で検出し、直線的である。東端は自然消滅している。規模は検出長約3m、幅約28～45cm、深さ約5cmを測る。走行方向はN-73°-Wを指している。ほぼ平坦な底部から壁がやや緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黄砂をあまり含まない。遺物は出土していない。

B-SD21 (図版4・6・21・22)

9B20・25～10B22で検出し、ほぼ直線的である。東端は自然消滅している。規模は検出長約3.4m、幅約23～30cm、深さ約4cmを測る。走行方向はN-73°-Wを指している。ほぼ平坦な底部から壁がやや緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黄砂をあまり含まない。遺物は出土していない。

B-SD22 (図版4・6・21・22)

9C5～9C14にかけて検出し、9C9で屈曲する。南西端はD区へ逃げ、北東端は自然消滅している。規模は検出長約3.25m、幅約45cm、深さ約10cmを測る。走行方向は南西部N-12°-E、北東部N-35°-Eを指している。ほぼ平坦な底部から壁がやや緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黄砂を多く含んでいた。遺物は出土していない。

B-SD23 (図版4・6・21・22)

9C15～10B13にかけて検出し、10B22と10C1を頂点に大きく蛇行する。南西端はD区へ逃げ、北東端は自然消滅している。規模は検出長約11.9m、幅約22～52cm、深さ約4cmを測る。走行方向は概ねN-31°-Eを指している。平坦な底部から壁がやや緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黄砂を多く含んでいた。遺物は出土していない。

B-SD24 (図版4・6・21・22)

10C2～10C11にかけて検出し、10C6で屈曲するがほかは直線的である。南西部は調査予定区へ逃げ、北東部は自然消滅している。規模は検出長約4.6m、幅約26～32cm、深さ約4cmを測る。走行方向は南西部N-26°-E、北東部N-74°-Eを指している。平坦な底部から壁がやや緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黄砂をあまり含まない。遺物は出土していない。

B-SD25 (図版4・6・21・22)

10C3～10C12にかけて検出し、緩やかに蛇行している。南西端はD区へ逃げ、北東端は調査区を横切る農業用水路に壊されている。規模は検出長約5.6m、幅約25～85cm、深さ約10cmを測る。走行方向は概ねN-54.5°-Eを指している。平坦な底部から壁がやや緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黄砂を多く含んでいた。遺物は出土していない。

B-SD26 (図版4・6・21)

10C9～10C13・14にかけて検出し、弧状を呈している。南・北両端とともに調査区を横切る農業用水路に壊されている。規模は検出長約1.25m、幅約22～30cm、深さ約5cmを測る。走行方向は概ねN-9°-Eを指している。平坦な底部から壁がやや緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黄砂を多く含んでいた。遺物は出土していない。

B-SD27 (図版4・6・21)

8A19～8B4にかけて検出した。8A20区で屈曲し、ほかは直線的である。南端は自然消滅し、北端は河川の氾濫堆積と考えられる砂礫層によって壊されている。規模は検出長約4.8m、幅約25～36cm、深さ約8cmを測る。走行方向は南部N-6°-E、北部N-53°-Wを指している。ほぼ平坦な底部から壁がやや緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黄砂を多く含んでいた。遺物は出土していない。

B-SD28 (図版4・6・21)

8A15～9A16・21にかけて検出した。北部は調査区外に逃げ、南部はB-SD14に連続するものとみられる。規模は検出長約3m、幅約44～53cm、深さ約8cmを測る。走行方向は概ねN-41°-Wを指している。ほぼ平坦な底部から壁が緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黄砂を多く含んでいた。遺物は出土していない。

B-SD29 (図版4・6・21・22)

9C2で検出し、直線的である。南端はB-SD16と合流し、北西端は自然消滅している。規模は検出長約2.9m、幅約28～34cm、深さ約9cmを測る。走行方向はN-35°-Wを指している。やや窪んだ底部から壁がやや緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黄砂をあまり含まない。遺物は出土していない。

B-SD30 (図版4・6)

7B5～7B9にかけて検出し、ほぼ直線的である。南西端はD区へ逃げ、北東端は自然消滅している。規模は検出長約2.95m、幅約21～36cm、深さ約4cmを測る。走行方向はN-61°-Eを指している。ほぼ平坦な底部から壁が緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黄砂をあまり含まない。遺物は出土していない。

3 B区下面の遺構

VI層下面(VII上面 以下、下面)の遺構は上面遺構確認のためのサブトレーンチで存在が判明したことから、上面の調査終了後に急速調査した。

検出した遺構は土坑11基、溝11条、ピット235基である。

土坑はB8西側にB-SK11～15が重複して検出されたが、ほかは8・9B・Cにまとまっている。

溝は調査区中央の8A～C、9A～Cにまとまって検出されている。重複関係及び方向性などから組み合わせが想定でき、B-SD46・47とB-SD48・49は約11mの間隔で平行している。また、B-SD46とB-SD48、B-SD47とB-SD49の組み合わせが想定でき、前者が新しい。SB-D44・45、B-SD50・51は平行且つ重複しており、B-SD44・50が新しい。また、B-SD42とB-SD53は50～80cmの間隔で平行している。

ピットは調査区のほぼ全面に分布し、8・9Bに分布の中心があるようである。平面形は円形・梢円形を呈し、径10～30cm、深さは5～20cmほどである。これらのピットは建物、柱穴列、杭列として組めるものは認められないが、何らかの施設であったと考えられる。

これらのB区下面遺構は、上面から間層(VI層)を挟んで検出され、各遺構の覆土はVI層をベースとしていて、2点の土師器も出土した。

A 土 坑

B-SK11 (図版8・9・22)

B-SK11～15はB-SD48～51の下位に存在し、8B6・7、8B11・12に位置する。B-SK12・14・15と重複し、当土坑が最も新しい。平面形は梢円形を呈し、長径約1.35m、短径約1.1m、深さ約28cmを測る。長軸方位はN-82°-Eを指す。ほぼ平坦な底部から壁が緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は紫黒色腐植土で多量の炭化物が下位に層をなし、すぐに酸化し茶色に変色する。遺物は出土していない。

B-SK12 (図版8・9・22)

8B6・8B11に位置し、B-SD49の下で検出した。B-SK11・13と重複し、当土坑はB-SK11より古く、B-SK13より新しい。平面形は梢円形を呈し、長径約1.36m、短径不明、深さ約28cmを測る。長軸方位はN-18.5°-Wを指す。ほぼ平坦な底部から壁がやや急に立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は紫黒色腐植土で炭化物粒がやや多く含まれ、酸化し茶色にやや変色する。遺物は出土していない。

B-SK13 (図版8・9・22)

8B6・8B11に位置し、B-SD49の下で検出している。B-SK12と重複し、当土坑が古い。平面形は梢円形を呈し、長径約1.75m、短径不明、深さ約16cmを測る。長軸方位はN-1°-Wを指す。ほぼ平坦な底部から壁がやや急に立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は紫黒色腐植土で炭化物粒を含んでいた。遺物は出土していない。

B-SK14 (図版8・9・22)

8B7・8B12に位置し、B-SD50・51の下で検出している。B-SK11・15、ピットと重複し、当土坑はB-SK11・ピットより古く、B-SK15より新しい。平面形は梢円形を呈し、長径約1.8m、短径不明、深さ約25cmを測る。長軸方位はN-16°-Eを指す。ほぼ平坦な底部から壁がやや急に立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は紫黒色腐植土で炭化物粒を少量含んでいた。遺物は出土していない。

B-SK15 (図版8・9・22)

8B6・7に位置し、B-SD48～50の下で検出している。B-SK11・14と重複し、当土坑が最も古い。平面形は梢円形を呈し、長径約1.36m、短径不明、深さ約28cmを測る。長軸方位はN-82°-Eを指す。ほぼ平坦な底部から壁がやや急に立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は紫黒色腐植土で炭化物粒を微量含んでいた。遺物は出土していない。

B-SK16 (図版8・9)

8B21・22に位置している。平面形は梢円形を呈し、長径不明、短径約56cm、深さ約11cmを測る。長軸方位は概ねN-44°-Eを指す。窪んだ底部から壁が緩やかに立ち上がり、断面形は弧状を呈している。覆土は紫黒色腐植土で炭化物を含んでいた。遺物は出土していない。

B-SK17 (図版8・9)

8B7・8に位置している。平面形は不整梢円形を呈し、長径約98cm、短径約55cm、深さ約11cmを測る。長軸方位はN-24°-Eを指す。窪んだ底部から壁が緩やかに立ち上がり、断面形は弧状を呈している。覆土は紫黒色腐植土でVb層に類似した黒褐色土が混在する。遺物は出土していない。

B-SK18 (図版8・9)

8B12に位置している。平面形は梢円形を呈し、長径約56cm、短径約49cm、深さ約10cmを測る。長軸方位はN-8°-Eを指す。ほぼ平坦な底部から壁がやや緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は紫黒色腐植土で炭化物を含んでいた。遺物は出土していない。

B-SK19 (図版8・9)

8C2・3に位置している。B-SK04と重複し、当土坑が古い。平面形は梢円形を呈し、長径不明、短径約96cm、深さ約22cmを測る。長軸方位はN-22°-Wを指す。窪んだ底部から壁がやや緩やかに立ち上がり、断面形は弧状を呈している。覆土は紫黒色腐植土で1・2層に炭化物を含んでいた。遺物は出土していない。

B-SK20 (図版8・9)

8C4に位置している。B-SK21と重複し、当土坑が新しい。平面形は梢円形を呈し、長径約1.8m、短径約75cm、深さ約32cmを測る。長軸方位はN-24°-Wを指す。やや凹凸のある底部から壁が急に立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は紫黒色腐植土で1・2層に炭化物を含んでいた。遺物は出土していない。

B-SK21 (図版8・9)

8C4に位置している。B-SK20・B-SD53と重複し、当土坑がB-SK20より古く、B-SD53より新しい。平面形は円形又は梢円形を呈し、検出径約68cm、深さ約8cmを測る。長軸方位は不明である。ほぼ平坦な底部から壁が緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は紫黒色腐植土で炭化物を微量含んでいた。遺物は出土していない。

B 溝

B-SD42 (図版8・9)

8B4～8C9にかけて検出し、部分的に蛇行するものの概ね直線的に延びている。南端はD区へ逃げ、北端は自然消滅している。規模は検出長約12.2m、幅約42～63cm、深さ約14cmを測る。走行方向はN-3°-Wを指している。やや窪んだ底部から壁がやや緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は炭化物を含んでいた。遺物は土師器鍋の底部1点が出土したが、時期は明確でない。

B-SD44 (図版8・9・22)

9B2～9C7にかけて検出し、概ね直線的に延びている。南端はD区へ逃げ、北端は自然消滅している。B-SD45・46・52と重複し、当溝が最も新しい。規模は検出長約12.7m、幅約29～50cm、深さ約30cmを測る。走行方向はN-1°-Wを指している。ほぼ平坦な底部から壁がやや緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は紫黒色腐植土で炭化物を含んでいた。遺物は出土していない。

B-SD45 (図版8・9・22)

9A21～9B22にかけて検出し、弧状を呈している。北端は自然消滅していると考えられる。B-SD44と重複し、当溝が古い。規模は検出長約8.5m、幅約45～75cm、深さ約21cmを測る。走行方向はN-11.5°-Wを指している。ほぼ平坦な底部から壁がやや緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は紫黒色腐植土で炭化物を含んでいた。遺物は出土していない。

B-SD46 (図版8・9・22)

9A22・23～9C7・8にかけて検出し、ほぼ直線的である。南端はD区へ逃げ、北端は自然消滅している。B-SD44・47と重複し、当溝はB-SD44より古く、B-SD47より新しい。規模は検出長約14.4m、幅約38～86cm、深さ約28cmを測る。走行方向はN-1°-Eを指している。やや窪んだ底部から壁がやや緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は紫黒色腐植土で炭化物を含んでいた。遺物は出土していない。

B-SD47 (図版8・9・22)

9A23～9C8にかけて検出し、ほぼ直線的である。南端はD区へ逃げ、北端は自然消滅している。B-SD46と重複し、当溝が古い。規模は検出長約14.4m、幅約30～108cm、深さ約28cmを測る。走行方向はN-3.5°-Eを指している。ほぼ平坦な底部から壁がやや緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は紫黒色腐植土で炭化物を含んでいた。土器細片が1点出土したが、時期は明確でない。

B-SD48 (図版8・9)

8A22～8B21にかけて検出し、ほぼ直線的である。南端はD区へ逃げ、北端は消滅している。B-SD49・50・51と重複し、当溝はB-SD49より古く、B-SD50・51より新しい。規模は検出長約9.75m、幅約70～80cm、深さ約8cmを測る。走行方向はN-3.5°-Eを指している。ほぼ平坦な底部から壁がやや緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は紫黒色腐植土で炭化物を含んでいた。遺物は出土していない。

B-SD49 (図版8・9)

8B1区～8B21にかけて検出し、ほぼ直線的である。南端はD区へ逃げ、北端は自然消滅している。B-SD48と重複し、当溝が新しい。規模は検出長約7.55m、幅約70～82cm、深さ約10cmを測る。走行方向はN-4.5°-Eを指している。ほぼ平坦な底部から壁がやや緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は紫黒色腐植土で炭化物を含んでいた。遺物は出土していない。

B-SD50 (図版8・9)

7B20～8A18・19にかけて検出した。南部はD区へ延び、北部は調査区外へ逃げている。B-SD48・49・51と重複し、当溝はB-SD48・49より古く、B-SD51より新しい。直線的に延び、規模は検出長約13.5m、幅約40～75cm、深さ約12cmを測る。走行方向はN-27°-Eを指している。やや窪んだ底部から壁がやや緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は腐植土で炭化物を含んでいた。遺物は出土していない。

B-SD51 (図版8・9)

8A19～8B21にかけて検出し、直線的である。南端はD区へ逃げ、北端は調査区外へ逃げている。B-SD48・49・50と重複し、当溝が最も新しい。規模は検出長約13.9m、幅約38～106cm、深さ約13cmを測る。走行方向はN-27°-Eを指している。ほぼ平坦な底部から壁がやや緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は紫黒色腐植土で炭化物を含んでいた。遺物は出土していない。

B-SD52 (図版8・9)

8B16～8C7にかけて検出し、緩やかな弧状を呈している。南端はD区へ逃げ、北端は消滅している。B-SD44と重複し、当溝が古い。規模は検出長約7.5m、幅約45～80cm、深さ約16cmを測る。走行方向はN-12.5°-Wを指している。平坦な底部から壁がやや緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は炭化物を含んでいた。遺物は出土していない。

B-SD53 (図版8・9)

8B24～8C9にかけて検出した。南端はD区へ逃げ、北端は消滅している。B-SK20・21と重複し、当溝が最も古い。規模は検出長約3.35m、幅約40～50cm、深さ約10cmを測る。走行方向はN-3.5°-Wを指している。平坦な底部から壁がやや緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は炭化物を含んでいた。遺物は出土していない。

4 C区の遺構

当区はA・B区同様に河川の氾濫及び流路の発生などの擾乱を多く受け、砂礫層、砂層の堆積が見られる。また、近世以降の擾乱もあり、遺物包含層と遺構の遺存状態は良くなかった。特に遺物包含層はほとんど遺存していない。また、遺構はA・B区の遺構検出面であるVI層の堆積がほとんどないためVII層からVIII層での検出である。検出した遺構は土坑1基、柱穴列2列、ピット26基で、調査区東部の11・12B・Cにまとまっている。調査区北部の11～12Aでは古代の遺物を包含する自然流路を検出している。流路に打ち込まれた杭を数本検出しておらず、管理された流路である可能性がある。ピットは平面形が円形・楕円形のもので径10～30cm、深さは5～50cmである。C-P03では径約20cmの礫が壁沿いに立てて詰め込まれていた。遺構の検出位置は、古代流路に近接したやや微高地を選地している。

以上の遺構は覆土がB区上面の遺構と同じV層土をベースとしていることから、B区上面の遺構群とはほぼ同時期の所産と考えておきたい。

当区のIII・IV層からは多くの木製品・木材が出土している。木製品には野球バットのグリップ状をしたこけし人形状のもの、墨書きされた木札などがある。木材には何らかの部材と考えられるものの、板材がある。これらの遺物は近世以降の堆積土III層・IV層からの出土であり、A・B区同様に調査対象とはしていない。

A 土 坑

C-SK10 (図版10・23)

12C20に位置する。平面形は略楕円形を呈し、遺存径約80cm、深さ約10cmを測る。長軸方向はN-65°-Wを指す。やや窪む底部から壁が緩やかに立ち上がり、断面形は弧状を呈している。覆土は暗灰黄色土がベースで、B区下面の遺構に類似する。遺物は出土していない。

B 柱 穴 列

C-SA01 (図版11・23)

13B21～13C1に位置する。規模は全長約2.6m、柱間隔約1.3mを測り、直線配置されている。主軸方向はN-67.5°-Wを指す。柱穴は円形で、P1が径約29cm、深さ約17cm、P2が径約22cm、深さ約28cm、P3が径約23cm、深さ約13cmを測る。覆土はV層に類似した黒色粘質土であった。遺物は出土していない。

C-SA02 (図版11・23)

12B10～12C8に位置する。規模は全長約2.85m、柱間隔P1-P2間が約1.4m、P2-P3間が約1.45mを測り、直線配置されている。主軸方向はN-27°-Wを指す。柱穴は円形で、P1が径約21cm、深さ約35cm、P2が径約23cm、深さ約28cm、P3が径約17cm、深さ約30cmを測る。覆土は黒色粘質土であった。遺物は出土していない。

C 流 路

C-SD31 (図版10・23)

調査区北壁沿いのA11～A13にかけて検出し、東部・西部ともに調査区外へ逃げている。平面的には中央部が南にふくらむ弧状を呈している。規模は検出長約20m、幅約3～4m、深さ約45cmを測る。走行方向は地形に沿ってほぼ東西を指している。やや凹凸のある底部から壁がやや緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。当流路は3条の流路が合流して形成され、中央の流路（流路2）が最初にあり、それが埋没後に南の流路（流路1）ができ、最後に北の流路（流路3）ができたと考えられる。流路1では南岸内側に杭が3本打ち込まれていることを確認した。しかし、杭の遺存状態は非常に悪かった。1・2層は流路で流路2の覆土、3・4・5・6層は明灰色土で砂礫の含有量で分かれる流路1の覆土、7層は黒色粘質土で流路3の覆土と考えられる。出土遺物の時期は平安時代中頃と考えられる。

5 D区第1面の遺構

D区第1面は庄之又川によって形成された河岸段丘崖の上に位置するため、当初は土層の残存状況が悪く遺跡の残存状態も良くないものと予想した。実際はB区に比べて土層堆積と残存状況が良好で多くの遺構を検出した。遺物包含層であるVa層とVb層の間に部分的に堆積している黄砂層上面で遺構を検出し、第1面とした。ただし、調査区東部（概ね9C・D）はB区同様に近世以降の水田耕作及び昭和30年代の耕地整理による埋め立て等により壊され、15cm程度（以下、段の東側を下段、西側を上段と記す）をもって低くなっている。下段では表土直下にVb・VI層が露出し、第1面の遺構は存在しない。

第1面の遺構は溝7条、小ビット（概ね径10cm以下のビット）319基、不明遺構1基（D-SX01）で、調査区中央から西側の上段に位置している。溝はD-SD04を除く大半が東西方向に走り、D-SD01・02は調査区ほぼ中央の7C15付近でやや南側へ蛇行している。また、D-SD04は規模、形状、方向性等の相違から性格が異なるものと考えている。また、溝には覆土に黄砂を含むもの（D-SD01～04・06・07）と砂礫を主体とするもの（D-SD05）があり、後者は自然流路と考えられる。前者には溝底に小ビットが多數掘られたもの（D-SD01・02・07）と小ビットを伴わないもの（D-SD04・06）がある。

小ビットはまとまりをもって検出し、6・7B区に分布するものを1群、7C区に分布するものを2群、8C区に分布するものを3群と呼称した。1群は73基からなり、7C17・22～7D4にかけて検出した。規模は長さ約4.4m、幅約2mを測り、長軸方向が概ね東西を指し、D-SD07とほぼ一致することから、消滅したD-SD07の溝底にあった小ビットのみが残存したものであろう。2群は91基からなり、西側が調査区外へ延び、東側はB区へ延びるように分布する。しかし、B区の調査では包含層（Va・黄砂・Vb層）の堆積がD区ほど良くないため、小ビットは検出していない。規模は長さ約7m、幅約2mを測り、小ビットが密集している。長軸方位はほぼ東西を指す。3群は155基からなり、規模は長さ約10m、幅約4mを測り、最も分布範囲が広く、最も密集している。長軸方位はほぼ南北を指すが、地形に沿って西側へやや弧状を呈している。小ビット1～3群の覆土には、Va層の黒色土に黄砂及び暗灰黄色土が混入するものと黄砂が充填したものがある。

不明遺構D-SX01（図版12・26・27）は6C13～6D4で検出した。平面形は不整形で土坑状の穴が密集したような複雑な平面形状である。土層の堆積をみると、河岸段丘崖に位置する6D3から階段状の3

段をもち、そこから北側へ次第に掘り広がったようにみえ、最終的には6C13で終結している。底面には拳大から一抱もあるような大型の礫である。大型の礫は扁平なものが多く、その大半は平坦面を上にしており、また、石臼片を含むことから、底面に配されたものと考えられる。当地は近世以降に水田開発されていることから、排水に関連する施設である可能性がある。出土遺物は底面から石臼1点と覆土上位から伊万里染付椀1点が出土していることから、近世以降の所産と考えている。

遺構覆土に黄砂を含む溝とビットの覆土は、B区の溝a層及びビットA層と同じであり、B区の遺構が覆土からV-a層（D区第1面）もしくは黄砂層（D区第2面）に相当する遺構であったと考えられる。しかし、B区は遺物包含層のV-a層と黄砂層の遺存状況が、近世以降の水田耕作、耕地整理などで削り取られたためか、良くなかった。そのため、B区はVI層上面での一括確認である。

A 溝

D-SD01 (図版12・26)

6C3・8～8C17にかけて検出した。ほぼ直線的に延び、7C10で南側へ屈曲する。東・西両端は自然消滅している。D-SD03と重複し、当溝が新しい。規模は検出長約19.7m、幅約0.3～1.45m、深さ約15cmを測る。走行方向は東部がN-44°-W、西部がN-86°-Wを指す。平坦な底部から壁がやや急に立ち上がり、断面形は台形状を呈している。溝底には多数の小ビットが存在し、当溝外にはほとんど見られないことから、当溝に伴うものと判断した。覆土はV-a層の黒色土に黄砂を含んでいた。遺物は出土していない。

D-SD02 (図版12・26)

6C8～8C15で検出した。直線的に延び、東・西両端は自然消滅する。規模は検出長約13.85m、幅約0.25～1.3m、深さ約10cmを測る。走行方向はN-82°-Wを指す。壁がやや急に立ち上がり、断面形は台形状を呈している。溝底には小ビットが多数伴う。覆土はV-a層の黒色土に黄砂を含んでいた。遺物は出土していない。

D-SD03 (図版12・26)

7C4～8C7にかけて検出した。ほぼ直線的に延び、東・西両端は自然消滅している。D-SD01・05と重複し、当溝が最も古い。規模は検出長約7.35m、幅約0.5～2m、深さ約15cmを測る。走行方向はN-73.5°-Wを指す。平坦な底部から壁がやや急に立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土はV-a層の黒色土に黄砂を含む土層が堆積していた。遺物は出土していない。

D-SD04 (図版12・26)

6C4・9で検出し、直線的に延びている。規模は検出長約1.8m、幅約0.25m、深さ約10cmを測る。走行方向はN-26.5°-Wを指す。やや僅んだ底部から壁がやや急に立ち上がり、断面形は概ね浅い台形状を呈している。覆土はV-a層の黒色土に黄砂を含む土層が堆積していた。遺物は出土していない。

D-SD05 (図版12・26)

7B23～8C13で検出した。直線的に延び、8C2・7で屈曲する。東・西両端は自然消滅する。D-SD03と重複し、当溝が新しい。規模は検出長約10.65m、幅約0.8～1.45m、深さ約25cmを測る。走行方向はN-62°-Wを指す。平坦な底部から壁が緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土はV-a層の黒色土に礫を多く含む土層が堆積しており、自然流路と考えられる。当溝の検出面から寛永通宝1点が出土した。

D-SD06 (図版12・26)

7C4～8C7で検出し、直線的に延びる。東・西両端は自然消滅する。D-SD07と重複し、当溝が新しい。規模は検出長約3.2m、幅約0.8～1.1m、深さ約5cmを測る。走行方向はN-75°～Wを指す。平坦な底部から壁が緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。溝底東部に小ビットが多数みられるが、西部には極端に少ないことから、小ビットは当溝に伴わないと考える。覆土はVa層の黒色土に黄砂を含んでいた。遺物は出土していない。

D-SD07 (図版12・26)

6C25～7C21で検出し、緩やかな弧状を呈している。東・西両端は自然消滅する。D-SD06と重複し、当溝が古い。規模は検出長約3.3m、幅約1～1.45m、深さ約5cmを測る。走行方向はN-84°～Wを指す。平坦な底部から壁がやや急に立ち上がり、断面形は台形状を呈している。溝底には多数の小ビットがあり、方向性・規模からみれば小ビット1群に連続すると考えられる。覆土はVa層の黒色土に黄砂を含んでいた。遺物は出土していない。

6 D区第2面の遺構 (図版13・27)

第2面の遺構は、黄砂層を取り除いたVb層上面で検出したビット141基と小ビット1246基である。当遺跡では便宜上ビットと小ビットを区分し、概ね径10cmを超えるものをビット、概ね径10cm以下のものを小ビットとしている。

ビットは141基を検出し、大半が6B南東側から8C南西側のやや高まりに群をなして帶状に分布している。ビット群の規模は長さ約20m、幅約3.3mである。ほかは上段に散在的に分布し、特にまとまりはない。下段にはみられない。また、ビット群は小ビット分布範囲の北東端に沿ったようにみえることから、何らかの関連があると考えている。ビットは円形・梢円形を呈し、径10～30cm、深さ10～20cmを測る。覆土はVa層の黒色土に黄砂を多く含む。遺物は出土していない。

小ビットは1246基を検出し、6～8C、7・8D北部に密集分布している。地形的には小ビット群の分布範囲がやや崖となっていて、小ビット群の位置する崖の北東端を沿うように高まりがあり、その高まりにビット群が分布している。小ビットは円形・梢円形を呈し、径5～10cm、深さ5～20cmである。覆土はVa層の黒色粘質土に黄砂を多く含むものと黄砂を充填したものがあり、その数は概ね半分である。遺物は出土していない。前記の如く、B区の遺構は当面に相当するものがある可能性が高い。

7 D区第3面の遺構

D区基本層における遺物包含層であるVb層を取り除いたVI層上面で遺構確認を行った。結果、土坑3基、溝39条、ビット521基を検出した。覆土は黒色粘質土、部分的にVI層の暗灰黄色土を含んでいる。

土坑は南側と東側の河岸段丘崖に沿って3基検出し、平面形が概ね梢円形・方形を呈し、南側崖沿いで2基が近接して検出された。土坑からの出土遺物はD-SK08から出土した土器2点のみであった。

溝は調査区のほぼ全体に分布し、まとまりや方向性などから考えて、A群は北東方向に向くD-SD26～31、B群は北北西方向に向くD-SD32～35・39、C群は北北東方向に向くD-SD09・36・57～60(ただし、A・B・C群に分けられる溝はB区上面遺構の溝と連続するものがあることから、B区のA～C群と同一の

群ととらえている)。F群は調査区を東西方向に延びるD-SD08・17~19・24・25・37・38・40、G群は北東方向に延びるD-SD10~16・20~23・56・63に5分類した。ただし、B区にはD・E群があり、合わせて7群となる。また、溝には等高線にほぼ直行するもの(B区D群・D区F群)、等高線にほぼ平行に走るもの(B・D区A~C群・B区E群・D区G群)がある。新旧関係は、断面の観察からF群の溝がB・G群の溝に切られ、F群の溝が相対的に古い溝であることが分かった。しかし、A・B・G群の大半がF群のD-SD17~19の手前で途切れていることから、F群のD-SD17・19は何らかの区画溝と考えられ、また、A・B・G群の溝はF群のD-SD17・19による区画を意識した配置ともみてとれる。溝の出土遺物はD-SD26出土の土師器3点のみであった。

ピットは調査区のほぼ全体に分布するが、東・西端はやや希薄になっている。このピットの分布傾向はB区も同様であり、ピット分布の中心は当区とB区である。平面形は概ね円形・楕円形のもので、径約10~50cm、深さ約10~50cmを測る。覆土から、黒色粘質土をベースとするもの(ほぼ全体)、VI層の暗灰黄色土をやや多く含むもの(主に東側)がある。しかし、建物、柱穴列、杭列として組めるものは確認できなかった。溝との重複関係では、大半のピットが溝の覆土の上から掘り込まれていて、相対的にピットが溝よりも新しいようである。ピットと溝から出土した遺物がほとんどないことから時間的な差は特定できない。

A 土 坑

D-SK01 (図版4・15・28)

8D2で検出した。平面形は方形を呈し、長軸約1.0m、短軸約90cm、深さ約10cmを測る。長軸方位はN-80°-Wを指す。ほぼ平坦な底部から壁が緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黒色粘質土がベースで、砂を若干含み、VI層の暗灰黄色土塊が少量混入する。遺物は出土していない。

D-SK02 (図版4・15・28・29)

8D2で検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸約85cm、短軸約52cm、深さ約6cmを測る。長軸方位はN-10°-Wを指す。当土坑はピット2基に切られている。平坦な底部から壁が緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黒色粘質土がベースで、砂とVI層の暗灰黄色土塊が少量混入する。遺物は出土していない。

D-SK08 (図版4・15・32)

10C16・17で検出した。D-SD57と重複し、当土坑が新しい。平面形は円形を呈し、長軸1.2m、短軸1.15m、深さ約7cmを測る。長軸方位はN-70°-Wを指す。窪んだ底部から壁が緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黒色粘質土をベースとし、砂を若干含む。遺物は1層から土師器2点が出土したが、時期は明確でない。

B 溝

D-SD08 (図版4・14・28)

9C11~17で検出し、ほぼ直線的に延びる。規模は検出長約2.4m、幅約35~40cm、深さ約8cmを測る。走行方向はN-68°-Wを指す。平坦な底部から壁が急に立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黒色粘質土がベースで、砂を若干含み、VI層の暗灰黄色土塊が少量混入する。遺物は出土していない。

D-SD09 (図版4・14・28)

9C7～12で検出した。北端は東側へ湾曲し、南端は自然消滅する。規模は検出長約1.2m、幅約50～75cm、深さ約6cmを測る。走行方向はN-30°-Eを指す。平坦な底部から壁が急に立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黒色粘質土がベースで、砂とVI層の暗灰黄色土塊が少量混入する。遺物は出土していない。

D-SD10 (図版4・14・28・29)

7C15～7D3で検出し、直線的に延びる。南・北両端ともに自然消滅する。規模は検出長約5.82m、幅約40～80cm、深さ約8cmを測る。走行方向はN-42°-Eを指す。平坦な底部から壁が緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黒色粘質土がベースで、砂とVI層の暗灰黄色土が少量混入する。遺物は出土していない。

D-SD11 (図版4・14・28・29)

7C15～7D2で検出し、直線的に延びる。南・北両端ともに自然消滅し、検出規模は検出長約7.5m、幅約60～70cm、深さ約8cmを測る。走行方向はN-45°-Eを指す。平坦な底部から壁が急に立ち上がり、断面形は台形状を呈し、走行方向はN-45°-Eを指す。覆土は黒色粘質土がベースで、VI層の暗灰黄色土が少量混入する。遺物は出土していない。

D-SD12 (図版4・14・28・29)

7C18～21で検出し、7C22でやや屈曲する。南・北両端ともに自然消滅し、規模は検出長約5.8m、幅約45～66cm、深さ約8cmを測る。走行方向は北東部N-36°-E、南西部N-59°-Eを指す。平坦な底部から壁が急に立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黒色粘質土がベースで、砂を若干含み、VI層の暗灰黄色土塊がやや多く混入する。遺物は出土していない。

D-SD13 (図版4・14・28・29)

7C12～21で検出し、7C16・17で屈曲する。南・北両端ともに自然消滅し、規模は検出長約4.95m、幅約70～80cm、深さ約9cmを測る。走行方向は北東部がN-30°-E、南西部がN-55°-Eを指す。平坦な底部から壁が急に立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黒色粘質土がベースで、砂を若干含む。遺物は出土していない。

D-SD14 (図版4・14・28・29)

6C20～7C2で検出し、6C20・7C16で屈曲する。D-SD17と重複し、当溝が新しい。南・北両端ともに自然消滅し、規模は検出長約8.2m、幅約60～120cm、深さ約9cmを測る。走行方向は北東部がN-22°-E、南西部がN-41°-Eを指す。平坦な底部より壁がやや緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黒色粘質土がベースで、砂を若干含む。遺物は出土していない。

D-SD15 (図版4・14・28・29)

6C22～7C6で検出し、ほぼ直線的に延びる。南・北両端ともに自然消滅する。D-SX01と重複し、当溝が古い。規模は検出長約11.2m、幅約40～50cm、深さ約8cmを測る。走行方向はN-59°-Eを指す。平坦な底部から壁が急に立ち上がり、断面形は台形状を呈している。D-SD16・17とほぼ平行に延び、且つ北東端が東へ向きを変えており、関連性があるようである。覆土は黒色粘質土がベースで、砂を若干含み、VI層の暗灰黄色土塊が少量混入する。遺物は出土していない。

D-SD16 (図版4・14・28・29)

6C10～16で検出し、ほぼ直線的に延びる。D-SX01と重複し、当溝が古い。規模は検出長約11.2m、幅約40～50cm、深さ約8cmを測る。走行方向はN-65°-Eを指す。平坦な底部より壁が急に立ち上

がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黒色粘質土がベースで、砂とVI層の暗灰黄色土塊が少量混入する。遺物は出土していない。

D-SD17 (図版4・14・28・29)

6C12～7C～8C19で検出し、調査区西側から東側へ弧状に長く延びている。D-SD14・22・23・39と重複し、当溝が最も古い。東端は近世以降の段切りによって消滅し、西端は調査区外へ延びている。規模は検出長約26.6m、幅約30～70cm、深さ約8cmを測る。走行方向は西側N-65°-E、東側N-111°-Eを指す。平坦な底部から壁がやや緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黒色粘質土がベースで、VI層の暗灰黄色土塊が多く混入する。遺物は出土していない。

D-SD18 (図版4・14・28・29)

6C3・4・8で検出し、直線的に延びる。D-SD63と重複するが、新旧関係は不明である。南・北両端ともに自然消滅し、規模は検出長約2.1m、幅約30～40cm、深さ約8cmを測る。走行方向はN-65°-Eを指す。平坦な底部より壁が急に立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黒色粘質土がベースで、VI層の暗灰黄色土塊がやや多く混入する。遺物は出土していない。

D-SD19 (図版4・14・28・29)

6B18～8C6で検出し、東端は自然消滅し、西端は調査区外に延びている。D-SD63と合流するが、新旧関係は明確でない。D-SD17・63とともに何らかの区画溝と考えられる。規模は検出長約18.9m、幅約30～140cm、深さ約8cmを測る。走行方向は西側がN-40°-W、中央から東側がN-105°-Eを指す。断面形は弧状を呈している。覆土は黒色粘質土がベースで、VI層の暗灰黄色土塊が多く混入する。遺物は出土していない。

D-SD20 (図版4・14・28)

8C16～7D4で検出し、直線的に延びる。南・北両端とともに自然消滅し、検出規模は長さ約6.3m、幅約50～110cm、深さ約8cmを測る。走行方向はN-42°-Eを指す。平坦な底部から壁が緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黒色粘質土がベースで、砂を少量含み、VI層の暗灰黄色土塊が多く混入する。遺物は出土していない。

D-SD21 (図版4・14・28)

8C12～7D4・5で検出し、直線的に延びる。南・北両端ともに自然消滅する。規模は検出長約7.7m、幅約40～110cm、深さ約10cmを測る。走行方向はN-42°-Eを指す。窪んだ底部から壁が緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黒色粘質土がベースで、砂少量と、VI層の暗灰黄色土塊が少量混入する。遺物は出土していない。

D-SD22 (図版4・14・28)

7D5～8C13で検出し、8C17で屈曲する。D-SD17・39と重複するが、当溝が最も新しい。規模は検出長約8.6m、幅約50～65cm、深さ約12cmを測る。走行方向は北東部がN-50°-E、南西部がN-37°-Eを指す。平坦な底部から壁が緩やかに立ち上がり、断面形は弧状を呈している。覆土は黒色粘質土がベースで、砂とVI層の暗灰黄色土塊が少量混入する。遺物は出土していない。

D-SD23 (図版4・14・28)

8C14～17で検出し、やや弧状を呈している。D-SD17・24・25と重複するが、当溝が最も新しい。規模は検出長約5.4m、幅約40～50cm、深さ約8cmを測る。走行方向はN-65°-Eを指し、断面形は台形状を呈している。覆土は黒色粘質土がベースで、砂とVI層の暗灰黄色土塊が少量混入する。遺物は出土していない。

D-SD24 (図版4・14・28)

8C22・23で検出し、直線的に延びる。D-SD23と重複し、当溝が古い。規模は検出長約2.4m、幅約60cm、深さ約8cmを測る。走行方向はN-63°-Wを指す。平坦な底部から壁が急に立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黒色粘質土がベースで、砂とVI層の暗灰黄色土塊が少量混入する。遺物は出土していない。

D-SD25 (図版4・14・28)

8C18～24で検出し、直線的である。D-SD23と重複し、当溝が古い。規模は検出長約1.5m、幅約40～50cm、深さ約6cmを測る。走行方向はN-63°-Wを指す。平坦な底部から壁が緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黒色粘質土がベースで、VI層の暗灰黄色土塊がやや多く混入する。遺物は出土していない。

D-SD26 (図版14・28・29)

6B3・9～7A21で検出し、6B9で屈曲する。規模は検出長約7.1m、幅約1.4～2.1m、深さ約17cmを測る。走行方向は北東部がN-50°-E、南西部がN-67°-Eを指す。断面形は緩やかな弧状を呈している。覆土は黒色粘質土で、砂をやや多く含み、B-SD01と同じ溝である。遺物は2層から土師器3点が出土し、B区8B4のVb層から出土した土師器2点と接合した。

D-SD27 (図版14・28)

7B19・20で検出し、ほぼ直線的に延びる。規模は検出長約1.1m、幅約50cm、深さ約10cmを測る。走行方向はN-77°-Wを指す。平坦な底部から壁が急に立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黄灰色土がベースで、B-SD03と同じ溝である。遺物は出土していない。

D-SD28 (図版14・28)

7B8～12で検出し、ほぼ直線的に延びる。規模は検出長約2.7m、幅約50cm、深さ約10cmを測る。走行方向はN-64°-Eを指し、断面形は緩やかな弧状を呈している。覆土はVI層の暗灰黄色土がベースで、黒色粘質土が混在している。B-SD30と同じ溝である。遺物は出土していない。

D-SD29 (図版14・28)

7B13・14で検出し、弧状に延びる。規模は検出長約2.2m、幅約50cm、深さ約5cmを測る。走行方向は北東部N-71°-E、南西部N-60°-Eを指し、断面形は台形状を呈している。覆土は黄灰色土がベースで、黒色粘質土と砂が混在している。B-SD02と同じ溝である。遺物は出土していない。

D-SD30 (図版14・28)

7B13・14で検出し、ほぼ直線的に延びる。規模は検出長約1.7m、幅約30cm、深さ約7cmを測る。走行方向はN-75°-Eを指す。平坦な底部から壁が急に立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黄灰色土ベースで、黒褐色粘質土と砂が混在している。B-SD02と同じ溝と考えられる。遺物は出土していない。

D-SD31 (図版14・28)

7B20で検出した。規模は検出長約70cm、幅約55cm、深さ約8cmを測る。走行方向はN-56°-Eを指し、断面形は緩やかな弧状を呈している。覆土は黒色粘質土とVI層の黄灰色土がベースで、砂を若干含む。B-SD04と同じ溝である。遺物は出土していない。

D-SD32 (図版14・28)

8C1・2で検出し、ほぼ直線的に延びる。規模は検出長約1.3m、幅約40～50cm、深さ約10cmを測る。走行方向はN-75°-Eを指す。平坦な底部から壁が急に立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黒色粘質土がベースで砂を若干含む。遺物は出土していない。

D-SD33 (図版15・28)

8C2で検出し、ほぼ直線的に延びる。規模は検出長約70cm、幅約50cm、深さ約9cmを測る。走行方向はN-45°-Eを指す。平坦な底部から壁が急に立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黒色粘質土とVI層の暗灰黄色土がベースである。遺物は出土していない。

D-SD34 (図版15・28)

8C7で検出し、直線的に延びる。規模は検出長約1.3m、幅約50cm、深さ約5cmを測る。走行方向はN-20°-Eを指す。平坦な底部から壁がやや急に立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黒色粘質土とVI層の暗灰黄色土がベースである。遺物は出土していない。

D-SD35 (図版15・28)

8C8で検出し、ほぼ直線的に延びる。規模は検出長約1.4m、幅約30～40cm、深さ約6cmを測る。走行方向はN-20°-Eを指す。平坦な底部から壁が緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黒色粘質土がベースで、VI層の暗灰黄色土が混入する。B-SD06と同じ溝である。遺物は出土していない。

D-SD36 (図版15・28)

9C6～11で検出し、北部がやや東側へ屈曲して延びる。規模は検出長約1.5m、幅約35～80cm、深さ約5cmを測る。走行方向はN-20°-Eを指し、断面形は台形状を呈している。覆土は黒色粘質土がベースで、砂とVI層の暗灰黄色土を少量含む。B-SD16と同じ溝か。遺物は出土していない。

D-SD37 (図版15・28)

9C22～9D4で検出し、直線的に延びる。東・西両端ともに自然消滅する。D-SD38と重複し、当溝が新しい。規模は検出長約3.7m、幅約35～90cm、深さ約5cmを測る。走行方向はN-77°-Eを指す。平坦な底部から壁が急に立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黒色粘質土がベースである。遺物は出土していない。

D-SD38 (図版15・28)

9D3～4で検出し、ほぼ直線的に延びる。西端は自然消滅する。D-SD37と重複し、当溝が古い。規模は検出長約1.2m、幅約35～60cm、深さ約5cmを測る。走行方向はN-77°-Eを指す。平坦な底部から壁が緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黒色粘質土がベースである。遺物は出土していない。

D-SD39 (図版15・28)

8C9～18で検出し、ほぼ直線的に延びる。D-SD22より古く、D-SD17より新しい。規模は検出長約3.9m、幅約60～80cm、深さ約10cmを測る。走行方向はN-16°-Eを指し、断面形は台形状を呈している。覆土は黒色粘質土とVI層の暗灰黄色土がベースで砂を若干含む。B-SD08と同じ溝である。遺物は出土していない。

D-SD40 (図版15・28)

8C22～8D3で検出し、直線的に延びる。北西端は自然消滅する。規模は検出長約3.9m、幅約70cm、深さ約10cmを測る。走行方向はN-52°-Wを指す。平坦な底部から壁が急に立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黒色粘質土がベースで、VI層の暗灰黄色土塊を少量含む。遺物は出土していない。

D-SD56 (図版28)

7C13～17で検出し、北端は自然消滅、南端はD-SD13と合流する。規模は検出長約3.5m、幅約30～40cm、深さ約8cmを測る。走行方向はN-30°-Eを指す。平坦な底部から壁が急に立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は黒色粘質土がベースで、砂を若干含む。遺物は出土していない。

D-SD57 (図版15・32)

10C12～22で検出し、緩やかに屈曲する。D-SK08と重複し、当溝が古い。規模は検出長約4.0m、幅約30～40cm、深さ約6cmを測る。走行方向は北東部N-20°-E、南西部N-40°-Eを指す。平坦な底部から壁が急に立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土はVI層の暗灰黄色土である。B-SD26と同じ溝の可能性がある。遺物は出土していない。

D-SD58 (図版15・32)

10C12～10D1で検出し、10C16で屈曲する。規模は検出長約8.0m、幅約50～100cm、深さ約10cmを測る。走行方向は北東部N-65°-E、南部N-7°-Eを指す。断面形は緩やかな弧状を呈している。覆土はVI層の暗灰黄色土がベースである。B-SD25と同じ溝である。遺物は出土していない。

D-SD59 (図版15・32)

9C15で検出した。規模は検出長約20cm、幅約25cm、深さ約6cmを測る。走行方向はN-22°-Eを指す。断面形は緩やかな弧状を呈し、覆土は砂を多量に含む。B-SD23と同じ溝である。遺物は出土していない。

D-SD60 (図版15・32)

9C14で検出した。規模は検出長約48cm、幅約45cm、深さ約8cmを測る。走行方向はN-12°-Eを指し、断面形は台形状を呈している。覆土はVI層の暗灰黄色土がベースである。B-SD22と同じ溝である。遺物は出土していない。

D-SD63 (図版28・29)

6C2・3・7で検出し、ほぼ直線的に延びる。D-SD19と合流するが、新旧関係は明確ではない。当溝はD-SD19とともに何らかの区画溝と考えられる。規模は検出長約3.5m、幅約1.3m、深さ約8cmを測る。走行方向はN-69°-Eを指し、断面形は台形状を呈している。覆土は黒色粘質土がベースである。遺物は出土していない。

8 D区第4面の遺構

第4面の遺構はVI層を取り除いたVII層上面で検出している。当遺構検出面（以下、当面）はB区下面に対応することが想定される。しかし、当面ではB区でも検出した土坑とピット、それに新たな溝（D-SD41～43）を検出したものの、B区下面で検出した溝（B-SD44～53）の連続部分は検出できなかった。そこで、B区下面の溝連続部分は第4面遺構調査終了後、検出面の削り込み及びサブトレンチによる断面

観察などを行って検出に努めた。結果、当面の下位からはB区で検出したものと同一の遺構と思われる溝と土坑が検出され、これを第4面のうちの下位遺構として4-2面を設定し、当面を4-1面とした。

A 4-1面の遺構

検出遺構は土坑3基、溝3条、ピット60基で、6～8Cに大半が分布し、一部9・10C・Dにみられるが特に密集することもなく散在的である。

土坑3基(D-SK03～05)は長楕円形を呈し、長軸方位はD-SK04・05が北東方向を指し、D-SK03が北東方向を指している。D-SK03・05はピットと重複し、両土坑がともに古い。覆土は紫黒色腐植土である。

溝の走行方向はD-SD41・42が北東方向を指し、D-SD43はほぼ東西方向を指している。溝の覆土はD-SD41・42がVI層の暗灰黄色土ベースで、D-SD43が砂礫層である。後者は自然流路と考えられる。また、D-SK03とD-SD41・42はほぼ同方向を指していることから、関連性が考慮できよう。

ピットは7C東側にややまとまるが、ほかは散漫な分布である。覆土は黄灰色土・紫黒色腐植土である。

1) 土 坑

D-SK03 (図版7・16・30)

7C14・15に位置している。平面形は長楕円形を呈し、長軸約1.45m、短軸約0.5m、深さ約25cmを測る。長軸方位はN-32.5°-Eを指す。中央の窪んだ底部から壁がやや急に立ち上がり、断面形はU字状を呈している。覆土は紫黒色腐植土に暗灰黄色土が混入し、炭化物も少量含む。1層は紫黒色腐植土が多い。遺物は出土していない。

D-SK04 (図版7・16・30)

8C17・22に位置している。平面形は長楕円形を呈し、長軸約62cm、短軸約20cm、深さ約10cmを測る。長軸方位はN-18°-Eを指す。平坦な底部から壁がやや急に立ち上がり、断面形は逆台形状を呈している。覆土は基本的に紫黒色腐植土と暗灰黄色土の混土で、1層は紫黒色腐植土が多い。遺物は出土していない。

D-SK05 (図版7・16・30)

8C23に位置している。平面形は長楕円形を呈し、長軸約80cm、短軸約30cm、深さ約15cmを測る。長軸方位はN-11°-Eを指す。南側が窪んだ底部から壁がやや急に立ち上がり、断面形が台形状を呈している。覆土は紫黒色腐植土と暗灰黄色土の混土で、1層は紫黒色腐植土が多い。遺物は出土していない。

2) 溝

D-SD41 (図版7・16・30)

7D5～8C16で検出し、直線的に延びる。南端はD-SD43に接される。北端は自然消滅する。規模は検出長約5.7m、幅約20～40cm、深さ約11cmを測る。走行方向はN-37°-Eを指す。平坦な底部から壁が緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は紫黒色腐植土をベースとする。遺物は出土していない。

D-SD42 (図版7・16・30)

8D1～8C17にかけて検出し、直線的に延びる。南・北端は自然消滅している。規模は検出長約5.4m、幅約25～40cm、深さ約11cmを測る。走行方向はN-35.5°-Eを指している。平坦な底部から壁が

やや緩やかに立ち上がり、断面形は台形状を呈している。覆土は紫黒色腐植土をベースとしている。遺物は出土していない。

D-SD43 (図版7・16・30)

6C19～7D5にかけて検出し、蛇行している。南・北端は自然消滅する。規模は検出長約13.5m、幅約30～120cm、深さ約6～18cmを測る。走行方向はN-78°-Wを指している。やや窪んだ底部から壁が緩やかに立ち上がり、断面形は弧状を呈している。覆土は酸化した褐色砂礫層であることから、自然流路の可能性が高い。遺物は出土していない。

B 4-2面の遺構 (図版8・16・31・32)

4-2面の検出遺構は土坑5基、溝13条で、調査区のほぼ全面に分布している。

土坑5基 (D-SK06・07・09～11) はB区との境界に4基、7C8に1基を検出した。平面形は長楕円形 (D-SK07・09～11) と、楕円形 (D-SK06) がある。規模は検出長が0.4～1.5m、幅は0.35～1.48m、深さは10～20cmである。長軸方位は北北東から西北西の間にある。D-SK06はD-SD55と重複し、D-SK06が新しい。覆土はいずれも紫黒色腐植土である。なお、D-SK06はB区B-SD49の延長上にあり、同一遺構の可能性もある。D-SK09～11についても、B区において検出されていないので土坑としたが、溝の可能性もある。

溝13条は数条のまとまりをもって分布しているものと単独のものがある。D-SD44～48は9C・Dに位置し、走行方向はほぼ南北方向に延び、南部が東側へ向きを変えている。重複関係D-SD48→47→44・46→45の順で新しい。B区の溝との関係は、D-SD44がB-SD52と、D-SD45がB-SD44と、D-SD46がB-SD46と、D-SD47がB-SD47と、それぞれ同一の溝と考えられ、D-SD48は直結しないが、その方向性からB-SD45と連続すると考える。

8C～Dに位置するD-SD50・51は、走行方向はほぼ南北方向に延び、南部が東側へ向きを変えている。重複はしない。D-SD50はB区のB-SD53と、D-SD51はB区のB-SD42とそれぞれ同溝である。

やはり8C～Dに位置するD-SD52・53は、ほぼ南北方向へ直線的に延びる。重複部分があまりなく、新旧は明確でない。D-SD53はB区のB-SD48と同溝である。D-SD52はB-SK16と位置的に重なり、B-SK16はD-SD52の一部の可能性がある。7・8B・Cに位置するD-SD54・55は、ほぼ南北方向に延び、南部が西側へ屈曲している。D-SD54はB-SD51と、D-SD55はB-SD50とそれぞれ同じ溝である。

D-SD49・62は7A・Bと9C・Dにそれぞれ単独で位置している。D-SD49はほぼ東西方向に延びている。D-SD62はほぼ南北方向であるが、北部が西へ屈曲している。

溝の覆土はVI層の暗灰黄色土をベースに、紫黒色腐植土と地山であるVII層の青灰色土が混在し、炭化物が含まれる。D-SD49の覆土は褐色砂礫層である。

4-2面のVII層の下にはVIII層の砂礫が堆積し、庄之又川の旧河床と考えられる。溝の溝底にはVII層の砂礫が露出しているもの (D-SD45・46)、覆土が砂礫のもの (D-SD43)などがあることから、自然流路の可能性がある。遺物は全く出土していない。

第V章 遺物

1 遺物の概要

当遺跡の出土遺物は総点数約523点と少ない。遺物量が少ない理由としては遺跡の性格に加え、河川の氾濫、流路の発生などの自然現象ために遺物包含層が削り取られた結果と考えられる。搅乱の多く認められたA区は遺物（近世以降を除く）が全く出土せず、またC区の遺物も古代流路直上からの出土遺物が多く、流路によって運ばれたものと考えられる。対してB区は遺物包含層が広く残り、遺物の大半はB区の出土遺物である。D区の遺物包含層は最も良好であったが、出土遺物は少なかった。

遺物の内訳は土師器504点、須恵器4点、珠洲焼8点、常滑焼1点、青磁3点、石製品2点、繩文土器1点で、出土遺物のほとんどを土師器が占めている。しかし、土師器は器種判別の困難な細片が大半である。須恵器はほとんどなく、C区 C-SD31（自然流路）から3点とC-SD31直上より1点出土しているのみである。中世の遺物はB・C区のⅢ・Ⅳ層から散在的な出土である。近世以降の遺物はB・C区を中心に陶磁器・木製品が出土し、A区も少量の陶磁器・柱・杭・金属製品が出土している。なお、以下の遺物説明にあたり、当遺跡では『山三賀II遺跡』[坂井ほか1989]の器種分類にならっている。

煮沸具は土師器甕・鍋が出土している。土師器甕190点はロクロ成形された甕Bが153点で最も多く、中にはタタキ目の中が30点、ヘラケズリされたものが多くある。ほかには平底の甕Cが1点、非ロクロ調整の甕Aが1点である。鍋B1点は底部部で内面が丁寧にヘラナデされている。小甕Aは20点あり、底部7点は回転糸切り後末調整のものと外周がナデられるものがある。

食膳具は土師器杯が178点出土し、須恵器杯は見られない。土師器杯はロクロ成形の無台杯Bが大半を占め、底部のほとんどに回転糸切り痕が残る。ほかは細片のために明確でないが非ロクロ成形の土師器杯も若干ある。ほかは鉢Aが1点あり口縁部がヨコナデされ、体部は縦方向のヘラケズリがなされる。

以上の遺物で時期を決定するとなれば、土師器の主体は甕Bにタタキ目がつくこと、杯Bは回転糸切り痕が残ること、須恵器がほとんど出土しないことを考慮すればVI期〔春日1999〕9世紀後半～10世紀初頭頃を中心とした時期となろう。ただし、金屋跡では金屋I期に多くの黒色土器が伴っているが、当遺跡では全く見られない。

A 遺構の遺物

1) 炉跡

B-1号炉跡（図版17・33）

当炉跡の出土遺物は土師器50点で、その内訳は甕42点、杯8点である。すべてロクロ成形された甕Bと杯Bで、甕はタタキ1点とケズリ13点がある。また、ロクロ痕の明瞭なものは16点認められ、杯・小甕も含めて当遺構の出土土器の大半がロクロ成形されている。平底の甕Cが1点出土している。

土師器甕 1・2の甕Bはロクロ痕が明瞭で、頸部の一条の沈線によって口縁部と体部の境が明瞭である。口縁部は直立ぎみに立ち上がっている。3の甕Cは平底で、体部外面が縦方向にヘラケズリされ、底部も外周に沿って丹念なヘラケズリがなされている。

以上の遺物で時期を決定するのは困難であるが、1・2の土師器甕Bは当遺跡の主体となる土器群の特徴と一致することから、あえて決するならば、当遺構の時期は9世紀後半～10世紀初頭頃となろう。

B-2号炉跡

当炉跡の出土遺物は土師器の細片のみで、図示し得なかった。ロクロ成形された形跡のあるものがある。

2) 土 坑

土坑の出土遺物はB-SK03・05～08で土師器が出土した。しかし、土師器細片がほとんどであり、図示し得たものは、B-SK03の土師器甕1点、B-SK06の土師器杯2点、B-SK08の土師器杯1点である。
B-SK03 (図版17・33)

当土坑の出土遺物は4の土師器甕Aの底部で、内底部の中央が若干窪み、外底部には煤が付着している。

B-SK06 (図版17・33)

当土坑の出土遺物は土師器無台杯B5点、甕7点で、図示し得たのは杯2点である。5は無台杯Bの口縁部で湾曲ぎみに立ち上がっている。6は無台杯Bの底部で回転糸切り痕が残る。

D-SK08 (図版17・33)

当土坑の出土遺物は土師器杯3点で、図示し得たのは38の杯底部1点である。底部には回転糸切り痕が残る。

3) 溝

C-SD31 (図版17・33)

SD31は自然流路であり、出土した遺物が当流路の時期を直ちに示すとはいえない。出土遺物は土師器64点、須恵器3点である。土師器は甕B34点、小甕B5点、無台杯B25点である。甕は器面にロクロ痕の残るものが多くある。また、甕Bのうち12点はタタキ目が残る。須恵器は長頸瓶1点と甕2点である。このうち図示し得たのは11点である。

土師器甕 7～9は土師器甕Bである。7は直立ぎみの口縁部から体部がスムーズに底部に至り、体部の影らみは弱いと考えられる。8・9は同一個体と考えられ、直立ぎみの口縁部にロクロの調整痕が明瞭で、頭部に一条の沈線が廻る。

土師器小甕 10は小甕で器壁が薄く、頭部が「く」字状に屈曲し口縁部が直線的に立ち上がる。小甕Aとするには躊躇するものである。17は底部ナデ調整され、回転糸切り痕が残らない。

土師器杯 12～16は土師器無台杯Bである。底部調整には2様あり、底部に回転糸切り後未調整のもの(13～15)と、底部をヘラケズリまたはヘラナデ調整し回転糸切り痕が残らないもの(16)が認められる。12はやや深い体部が直線的に立ち上がり、口縁部はやや外反ぎみである。

須恵器長頸瓶 11は須恵器長頸瓶で肩が張らずわりと丸くおさまり、肩上には降灰が付着している。

これらの遺物は、当遺跡の主体となる土器群の特徴と一致すると考えている。

D-SD02

当土坑の出土遺物は、青磁楕1点、瀬戸壺2点、寛永通宝1点であるが、細片のため図示していない。

D-SD05

当土坑の出土遺物は土師器9点、瀬戸3点、錢貨2点(寛永通宝1点)、鉄釘1点である。いずれも細片のため図示していない。

D-SD26 (図版17・33)

当溝の出土遺物は土師器杯4点である。図示し得たのは39の杯底部1点で、B区包含層の出土遺物と接合した。底部はていねいにナデられ、回転糸切り痕が残っていない。

B 遺構外の遺物

縄文時代の遺物 (図版17・33)

縄文時代の遺物はIV層中から出土した18の縄文土器1点で、縄文土器は底部外縁に2か所穿孔されているが、摩耗が著しく時期は明確でない。

古代の遺物 (図版17・33)

古代の遺物包含層はA区がⅦ層、B・C区がV層である。包含層の出土遺物は318点で、その内訳は土師器316、須恵器2点である。遺物出土量では土師器が須恵器を圧倒している。この遺物の出土傾向は遺構内遺物も同様であり、当遺跡の特徴といえる。

土師器はロクロ成形のものが大半を占め、その内訳は甕B94点、小甕12点、無台杯B115点、器種不明95点である。甕にはタタキ目の残るもののが7点、器面がヘラケズリされるもの30点、ロクロ痕が明瞭なものが10点ある。また、小甕は底部4点に回転糸切りが認められ、ヘラケズリも2点ある。

土師器甕 25～28の甕Bはロクロ成形されている。25・26は頸部が一条の沈線状になり、口縁部が直立ぎみに立ち上がる。26は口縁部がやや肥厚する。27・28は湾曲ぎみに立ち上がり、27は湾曲傾向が強くなっている。

土師器小甕 23・24は小甕の底部で、23は回転糸切り後未調整である。24は回転糸切り痕が残るが、底部外周はヘラナデされている。

土師器杯 無台杯Bは3点で、20・21は底部を回転糸切りされ、底部外縁はヘラナデされている。22は口縁部が湾曲ぎみに立ち上がる。

土師器高杯 19の高杯の杯部は脚部取り付け痕の穴があき、底部から体部が直線的に聞く。

中世の遺物 (図版17・33)

包含層の遺物は11点で、その内訳は珠洲焼8点、常滑焼1点、青磁2点である。これら中世遺物は本来の包含層が残っていないため、近世以降の堆積土であるIII・IV層から出土した遺物を掲載している。

珠洲焼 珠洲焼は29の鉢、30・31の片口鉢、32・35の甕、33・34の擂鉢がある。29の鉢は直線的に立ち上がる口縁部で、口唇は平滑である。30は片口鉢の口縁部で、口唇がやや平滑におさまる。31の片口鉢は片口部両端を内側に押し込むことによって片口を作り出している。30と同一個体と考えられる。32の甕は底部が一定方向からヘラ削りされ、上げ底状を呈している。内面には降灰が顕著に見られる。35の甕は玉縁状に肥厚した口縁部直下から平行タタキが施されている。33の擂鉢はほぼ直線的に立ち上がった口縁部で、口唇は平滑であるが若干外側へ引き出される。内面には櫛状工具による条線が残る。34の擂鉢は底部に回転糸切り痕が残り、内面には櫛状工具による9本1組の条線が施されている。

青磁 青磁は2点が出土し、36は厚手の楕で内面に蓮華紋が施されている。37は薄手の楕で断面逆三角形の高台疊き部分の軸が拭いとられている。ともに舶載品と考えられる。

第VI章 自然科学分析

1 はじめに

新潟県南魚沼市野田字堅木に所在する堅木遺跡は、魚野川の支流である庄之又川の左岸小河岸段丘上に立地している。本遺跡の発掘調査の結果、平安時代の炉跡・土坑・ピット・溝状遺構等の遺構が検出されている。なお、溝状遺構は、調査所見等から、当該期の耕作地の可能性が指摘されている。

本報告では、この浅い溝状遺構の性格、特に耕作にかかる資料の作成を目的とし、花粉分析、植物珪酸体分析、種実分析を実施する。

2 試 料

試料は、土壤試料9点からなる。土壤試料は、溝状遺構覆土とともに比較対照試料として地山から採取されており、覆土試料はB-SD42（試料番号2）、B-SD06（試料番号4）、B-SD18（試料番号6）、B-SD01（試料番号8）の溝状遺構4条が対象とされている。一方、地山試料は、前述した4条の溝状遺構の横或は直上の地山を対象に採取されており、B-SD42直上（試料番号1）、同横（試料番号3）、B-SD06横（試料番号5）、B-SD18横（試料番号7）、B-SD01横（試料番号9）が対象とされている（第10図）。本分析では、これらの土壤試料9点を対象に花粉分析、植物珪酸体分析、種実分析を行う。

3 分析方法

A 花 粉 分 析

試料10ccを正確に秤り取り、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトトリシス（無水酢酸9、濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類を対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料ではこの限りではない）。また、花粉・胞子量のほかに、試料中に含まれる微粒炭量も求める。炭片は20μm以上を対象とし、それ以下のものは除外する。

結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。微粒炭量は、堆積物1ccあたりに含まれる個数を合わせて表に示す。この際、有効数字を考慮し、10の位を四捨五入して100単位に丸める。

B 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタンクスチレン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、

その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由來した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由來した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、[近藤 2004] の分類に基づいて同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物 1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物 1gあたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。この際、10 の位を四捨五入して 100 単位に丸める。100 個体以下は「<100」で表示し、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に 10 の位を四捨五入して丸める。また、各種類の植物珪酸体含量とその層位の変化から稻作の様態や古植生について検討するために、植物珪酸体含量の層位の変化を図示する。

C 種実分析

土壤試料 200cc を水に浸し、0.5mm 目の篩を通して水洗する。篩内の残渣を粒径別にシャーレに集めて双眼立体顕微鏡下で観察し、同定可能な種実を抽出する。現生標本および [石川 1994]、[中山ほか 2000] 等の図鑑との対照から、種実の種類と部位を同定し、個数を数える。炭化材は、70°C 48 時間乾燥後の重量を求め、0.01g に満たない試料は個数を数える。

分析後の種実は、種類毎に容器に入れ、70%程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施す。

4 結 果

A 花粉分析

結果を第 1 表に示す。いずれの試料も花粉化石の産出状況は悪く、保存状態も不良である。なお、表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。

種類	B-SD42		B-SD07		B-SD12		B-SD01		
	地上	地下	地上	地下	地上	地下	地上	地下	
試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9
<u>木本花粉</u>									
セキセキ	-	1	3	-	-	-	1	-	2
ツガ属	3	5	3	-	-	-	-	1	1
トウヒ属	-	1	1	-	-	-	-	-	1
マツ属(木麻黄)	4	-	1	-	-	-	-	-	-
マツ属(木麻)	1	5	5	-	-	-	-	1	4
コナラ属	-	-	-	-	-	-	1	-	1
クスノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カシ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ハシバミ科アサダ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-
ハシバミ属	-	1	2	-	1	2	-	1	3
コラリオニナラ属	-	1	-	-	-	-	1	-	1
カシ属(カガシ)属	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クス属	-	-	-	1	-	-	-	-	-
モチノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ブナ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クヌギ属	-	1	-	-	-	-	-	-	1
ツヅクサ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-
タケノコ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-
草本花粉	3	1	2	6	6	7	13	6	2
カキツバタ科	-	-	1	-	-	-	3	1	-
サエチテラ属-クナギツカモ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-
セリ科	-	-	-	-	-	-	1	-	-
アヤメ科	-	-	-	2	-	-	2	6	-
キク科	-	-	-	-	-	-	1	-	-
不完全花粉	1	1	-	-	3	2	-	-	1
<u>シダ花粉</u>									
ヒカゼノカズラ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ゼンマイ属	1	3	1	-	-	1	-	-	9
イモトリヅラ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-
シダ花粉	48	150	74	10	18	22	28	29	220
合計	8	15	17	1	1	3	4	4	16
日本花粉	3	1	4	2	6	8	19	12	2
草花粉	1	1	0	1	2	2	0	1	1
シダ花粉	49	154	76	10	18	23	28	29	229
総計(不完全花粉)	60	170	97	18	25	34	51	45	247
1ccあたりの微粉量(g)	1,400	900	4,100	94,800	86,700	49,200	114,400	110,500	2,100

第 1 表 花粉分析結果

検出された種類は、木本花粉ではモミ属、ツガ属、マツ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属等が検出され、草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属等が、数個体検出されるのみである。また、B-SD42試料番号2(覆土試料)、3(地山試料)、B-SD01試料番号9(地山試料)等からは、シダ類胞子も多産する。

また、微粒炭量は、B-SD42では直上地山(試料番号1)は1,400個/cc、覆土(試料番号2)で900個/cc、横地山(試料番号3)で4,100個/cc、B-SD06では覆土(試料番号4)は94,900個/cc、横地山(試料番号5)は86,700個/cc、B-SD18では覆土(試料番号6)は40,300個/cc、横地山(試料番号7)は114,400個/cc、B-SD01では覆土(試料番号8)は110,500個/cc、横地山(試料番号9)は2,100個/ccである。

B 植物珪酸体分析

結果を第2表、第12図に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されたが、いずれも保存状態は不良であり、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。以下に、各構造の状況を記す。

1) B-SD42

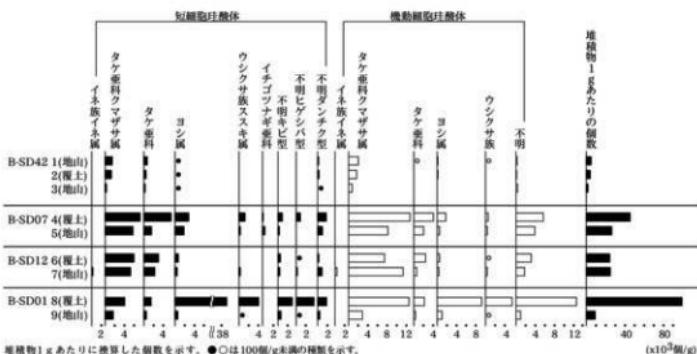
試料番号1~3のいずれからも、イネ属等のイネ科の栽培植物に由来する植物珪酸体は検出されない。クマザサ属を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属やウシクサ族等が検出される。

2) B-SD06

試料番号4・5からは、いずれもイネ科の栽培植物に由来する植物珪酸体は検出されない。クマザサ属を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族やイチゴツナギ亜科等が検出される。

3) B-SD18

覆土(試料番号6)からは、イネ科の栽培植物に由来する植物珪酸体は検出されないが、横地山(試料番号7)からはイネ属の短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が検出される。その植物珪酸体含量は、短細胞珪



第13図 植物珪酸体含量の層位の変化

種類	B-SD42			B-SD07			B-SD12			B-SD01		
	直上 地山	覆土 1	横 2	直上 地山	覆土 4	横 5	直上 地山	覆土 6	横 7	直上 地山	覆土 8	横 9
イネ科葉部細胞壁糖体												
イネ科葉部細胞壁糖体	-	-	-	-	-	-	-	-	-	300	-	-
タケ亞科クマザサ属	1,500	1,300	300	7,300	5,800	6,000	5,300	4,100	4,100	1,700	-	-
タケ亞科	200	400	200	5,700	1,600	3,000	2,200	1,600	1,600	500	-	-
ヨシ属	<100	<100	<100	2,800	1,900	700	400	39,100	600	-	-	-
ウシクサ属ススキ属	-	-	-	1,200	300	-	300	4,100	-	-	-	-
イチゴツナギ亞科	-	-	-	200	500	-	-	-	-	-	-	-
不規ヒジキ属	-	-	-	900	300	500	400	3,000	600	-	-	-
不規ヒジキバ属	-	-	-	900	-	<100	300	3,700	-	-	-	-
不規ダシタケ属	200	300	<100	1,800	1,000	200	900	1,800	400	-	-	-
イネ科葉部機動細胞壁糖体												
イネ科葉部機動細胞壁糖体	-	-	-	-	-	-	-	-	-	400	-	-
タケ亞科クマザサ属	2,000	1,700	800	12,700	8,300	7,500	11,300	12,600	12,600	2,900	-	-
タケ亞科	<100	-	-	4,100	2,000	2,500	600	2,200	2,200	400	-	-
ヨシ属	100	200	-	1,800	500	500	400	9,200	1,000	-	-	-
ウシクサ属	<100	-	-	500	400	<100	400	5,500	<100	-	-	-
不明	200	100	300	5,700	3,900	3,100	1,800	12,600	900	-	-	-
合計												
イネ科葉部細胞壁糖体	2,300	2,000	500	20,700	11,300	10,400	10,000	57,200	3,700	-	-	-
イネ科葉部機動細胞壁糖体	2,400	2,000	1,000	24,800	15,000	13,600	14,800	42,100	5,200	-	-	-
總計	4,700	4,000	1,600	45,500	26,300	24,000	24,800	99,300	8,900	-	-	-

1) 各項目の位を100単位として100単位に丸めている

2) <100 : 100個未満

3) 各子分類群の丸ない・数字を合算した後に、100単位に丸めている

第2表 植物珪酸体含量

分類群	部位	B-SD42			B-SD07			B-SD12			B-SD01		
		直上 地山	覆土 1	横 2	直上 地山	覆土 4	横 5	直上 地山	覆土 6	横 7	直上 地山	覆土 8	横 9
スブタ 種子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7	-	-	-
オモダカ科 種子	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
イネ 穂 穂片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-
ホタルイ属 果実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-
カヤツリグサ科 果実	-	-	-	-	-	-	-	-	1	6	-	-	-
チドメグサ属 果実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
炭化材	8(<0.01g)	10(<0.01g)	4(<0.01g)	0.04g	40(<0.01g)	0.02g	0.04g	0.03g	23(<0.01g)	-	-	-	-
高脚小僧(梅鉢)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	10	1	-
分析量	200 cc	200 cc	200 cc	200 cc	200 cc	200 cc	200 cc	200 cc	200 cc	200 cc	200 cc	200 cc	-
	320.7 g	352.3 g	366.8 g	343.6 g	324.3 g	328.3 g	337.9 g	306.4 g	361.1 g				

第3表 種実分析結果

酸体は約300個/g、機動細胞壁酸体は約400個/gと少ない。この他には、クマザサ属を含むタケ亞科の産出が目立ち、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族やイチゴツナギ亞科など同様の分類群が検出されるが、試料番号9ではクマザサ属を含むタケ亞科の産出が目立つ一方で、試料番号8ではヨシ属(特に短細胞珪酸体)の産出が顕著であり、その産状が異なる。

4) B-SD01

試料番号8・9からは、いずれもイネ科の栽培植物に由来する植物珪酸体は検出されない。2試料から、クマザサ属を含むタケ亞科、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族やイチゴツナギ亞科など同様の分類群が検出されるが、試料番号9ではクマザサ属を含むタケ亞科の産出が目立つ一方で、試料番号8ではヨシ属(特に短細胞珪酸体)の産出が顕著であり、その産状が異なる。

C 種実分析

結果を第3表に示す。被子植物6分類群20個の種実が検出された。なお、種実は、B-SD18から検出されるのみであり、B-SD42、B-SD06、B-SD01からは同定可能な種実は検出されなかった。検出された種実は、B-SD18覆土(試料番号6)では、草本のオモダカ科1個、カヤツリグサ科1個、地山(試料番号7)では、栽培植物のイネの穎2個、草本のスブタ7個、ホタルイ属2個、カヤツリグサ科6個、チドメグサ

属1個が検出された。この他に、各試料から炭化材が検出され、B-SD01からは高師小僧（褐鉄鉱の一種）が検出された。

5 考 察

A 栽 培 植 物

本分析では、耕作に関連する遺構と推定される溝状遺構における栽培の有無や作物の種類の復元を目的として分析調査を行った。

花粉分析では、いずれの試料も化石の産出状況が悪く、産出した種類からも栽培植物に由来すると考えられる化石は確認されなかつた。一方、植物珪酸体分析では、B-SD18横地山（試料番号7）から、僅かにイネ属の植物珪酸体が認められた。また、種実分析では、B-SD18横地山から栽培植物のイネの頸2個が確認された。

以上の結果から、B-SD18地山から栽培植物であるイネの植物珪酸体や頸が検出されたがその量は少ないとことや、この他の溝状遺構覆土や地山からは栽培植物を示唆する微化石や大型植物化石は得られなかつたことから、溝状遺構が検出された耕作地とされる箇所における耕作の可能性や栽培植物を判断することは困難である。なお、B-SD18地山（試料番号7）よりイネ属の植物珪酸体やイネの頸の検出されたことから、地山とされる土層の形成時、或はそれ以前に遺跡内でイネが利用されていたことが推定される。

花粉分析とともに行った微粒炭量の調査結果をみると、B-SD42直上地山（試料番号1）、同覆土（試料番号2）、同横地山（試料番号3）、B-SD01横地山（試料番号9）では約1,000～4,000個/ccであったのに対し、B-SD06覆土（試料番号4）、同横地山（試料番号5）、B-SD18覆土（試料番号6）、同横地山（試料番号7）、B-SD01覆土（試料番号8）では約40,000～115,000個/ccと1・2桁の差が認められた。微粒炭については、人間活動と密接に関係しているとされ、島浜貝塚（福井県）では6,000年前から微粒炭が増加することから、山野を焼き払っていたことが推測されている【安田1987】。本分析結果では、上記したように微粒炭量に差異が認められたが、遺構間や各遺構の覆土と地山間で共通した特徴を見出すことはできない。

なお、本分析結果からは微粒炭量の差と人間活動との関連を言及するに至らないが、この点については、本遺跡における土層の堆積環境や地山及びそれ以前の堆積層における産状の調査を行い、改めて評価することが望まれる。

B 古 植 生

本分析結果では、花粉化石がほとんど検出されなかつたことから、古植生推定のための解析は困難である。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壤微生物によって分解・消失する【中村1967；徳永・山内1971；三宅・中越1998等】とされていることから、堆積後の経年変化により、土壤中の花粉化石が分解・消失したと考えられる。

わずかに検出された花粉化石に着目すると、木本類ではモミ属、ツガ属、マツ属、ブナ属、コナラ属コナラ属などの花粉が検出された。このことから、少なくともこれらの木本類が当時の周辺域に生育していたことが窺われる。なお、本地域の潜在自然植生（人間の影響を一切停止したときに、現在の気候、地形、土壤条件下で成立すると考えられる自然植生）によれば、魚野川沿いなどはイヌツゲハンノキ群集、ツリフネソウーハンノキ群集、トネリコーハンノキ群集、丘陵部・山地部ではチシマザサバナ群集が分布する

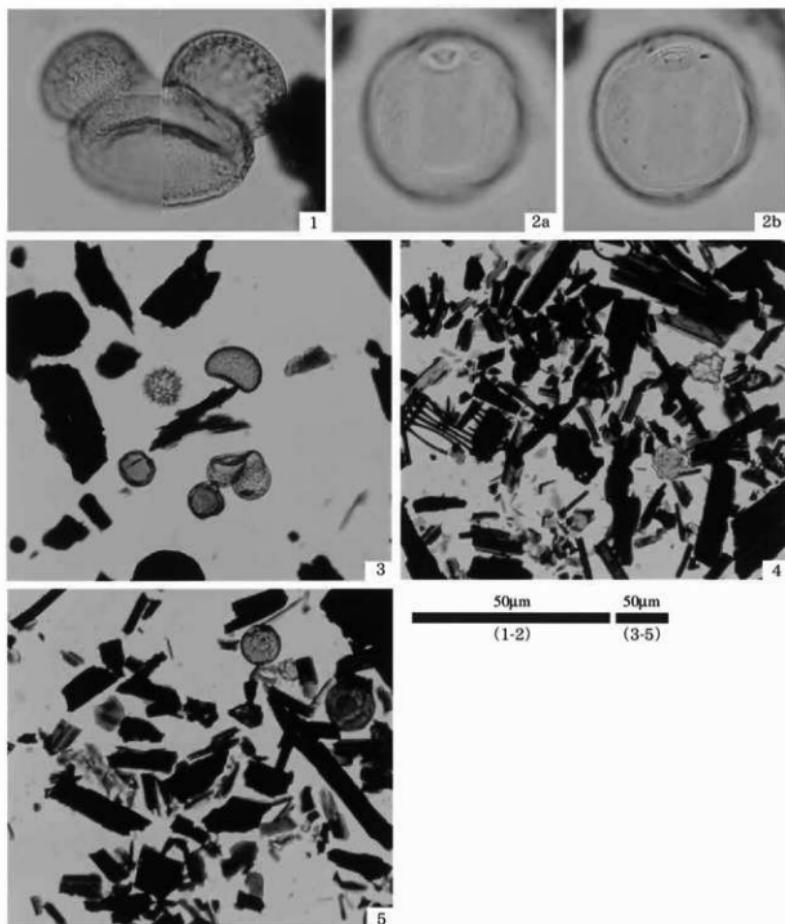
[宮脇 1985] とされている。

一方、草本類については、花粉化石ではイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属等が、植物珪酸体ではクマザサ属を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属等、種実遺体ではスブタ、ホタルイ属、オモダカ科、カヤツリグサ科、チドメグサ属等が検出された。このうち、タケ亜科やススキ属などのイネ科、カヤツリグサ科の一部、チドメグサ属（セリ科）、ヨモギ属などは、開けた場所に草地を形成する人里植物に属することから、遺跡周辺の草本群落に由来するものと考えられる。

B-SD18 横地山（試料番号7）から検出されたスブタやホタルイ属、同覆土（試料番号6）から検出されたオモダカ科は、水生植物もしくは水生植物を含む分類群であるとともに、水田雑草としても普通にみられる種類である。このことから、これらは、周囲の水湿地等に生育していた可能性がある。また、B-SD01 覆土（試料番号8）では、湿润な場所に生育するヨシ属の短細胞珪酸体の産出が顕著であった。B-SD01 内において生育していた可能性については検討の余地があるが、少なくとも、周囲にヨシ属が生育するような環境があったと考えられる。

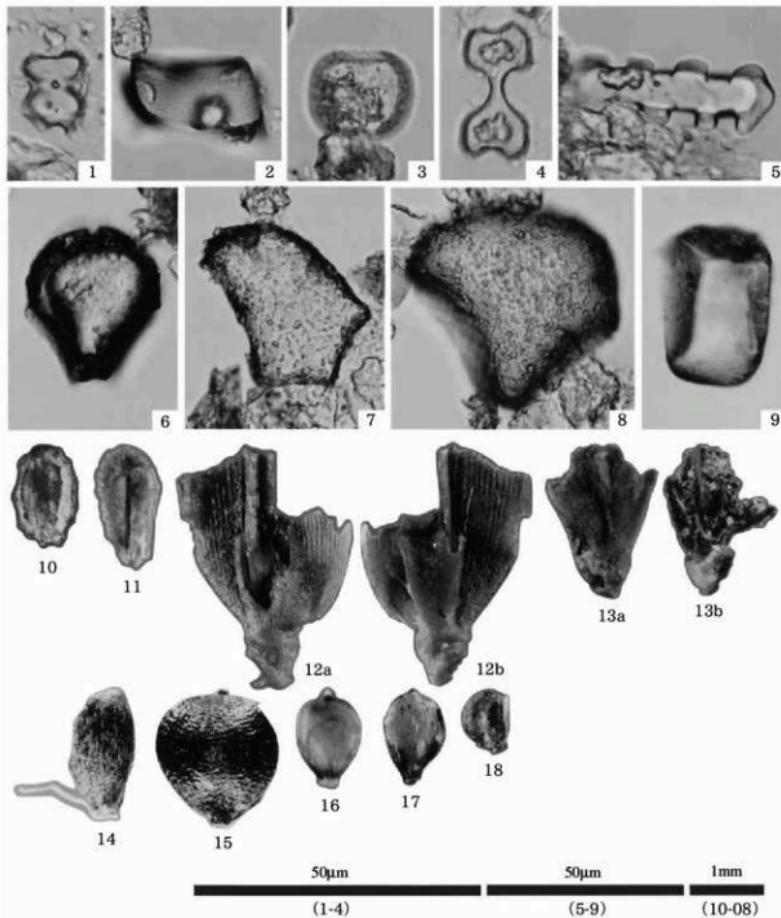
引用文献

- 石川茂雄 1994 『原色日本植物種子写真図鑑』石川茂雄図鑑刊行委員会 328p.
 近藤棘三 2004 「植物ケイ酸体研究」『ベドロジスト』48 46-64.
 三宅 尚・中越信和 1998 「森林土壤に堆積した花粉・胞子の保存状態」『植生史研究』6 15-30.
 宮脇 昭輔 1985 『日本植物誌 中部』至文堂 604p.
 中村 純 1967 『花粉分析』古今書院 232p.
 中山至大・井之口希秀・南谷忠志 2000 『日本植物種子図鑑』東北大学出版会 642p.
 徳永重元・山内 鞍子 1971 「花粉・胞子」『化石の研究法』共立出版株式会社 50-73.
 安田吉憲 1987 『文明は緑を食べる』談文新報社 227p.



1. マツ属 (B-SD42;1)
2. イネ科 (B-SD12;7)
3. プレパラート内の状況写真 (B-SD42;1)
4. プレパラート内の状況写真 (B-SD12;7)
5. プレパラート内の状況写真 (B-SD07;5)

第14図 花粉化石



1. イネ属短細胞珪酸体 (B-SD12;7)
 2. クマザサ属短細胞珪酸体 (B-SD07;4)
 3. ヨシ属短細胞珪酸体 (B-SD01;8)
 4. ススキ属短細胞珪酸体 (B-SD07;4)
 5. イチゴツナギ亞科短細胞珪酸体 (B-SD07;5)
 6. イネ属機動細胞珪酸体 (B-SD12;7)
 7. クマザサ属機動細胞珪酸体 (B-SD07;4)
 8. ヨシ属機動細胞珪酸体 (B-SD01;8)
 9. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (B-SD07;4)
 10.スプタ種子 (B-SD12;7)
 11.イネ穎 (B-SD12;7)
 12.イネ穎 (B-SD12;7)
 13.オモダカ科種子 (B-SD12;7)
 14.ホタルイ属果実 (B-SD12;7)
 15.カヤツリグサ科果実 (B-SD12;6)
 16.チドメグサ属果実 (B-SD12;7)

第15図 植物珪酸体・種実遺体

第VII章 まとめ

平成18年度調査では予想を上回る遺構が検出できた。特にB区では当初予想した遺構確認面の下に、間層(VI層)を挟みもう一枚の遺構確認面があることが判明した。2枚の遺構確認面の遺構群にはさほど大きな時間的開きはないようである。A・C区は搅乱による影響が大きく、検出した遺構はビット群・土坑・自然流路である。B区上面の遺構は炉跡4基、土坑8基、溝30基、ビット多数である。遺構の覆土は3分類でき、溝aとビットAは黒色粘質土をベースに黄砂を多く含む。溝bとビットBは黒色粘質土がベースで、黄砂をほとんど含まない。溝cとビットCは黒色粘質土とVI層の暗灰黄色シルトの混土層である。覆土分類によって遺構分布をみると、溝aは8B・C東部、9B・Cを除き広く分布する。溝bは8・9B・Cにほとんどが分布する。ビットAは7A・Bと8A・B西部で主体を占め、ビットBは8A～C東部と9・10A～Cで主体を占めている。土坑は黄砂をほとんど含まないので、溝b・c、ビットB・Cに対応すると考える。

B区上面の遺構は概ね9世紀末～10世紀初頭頃と考えられ、B区下面の遺構は出土遺物が数点と少なく明確な時期を示せないものの、概ね古代の範疇で捕らえられる。A・B区の遺構の時期は遺構検出面と覆土からB区上面の遺構に対応すると考えている。

平成19年度調査のD区では、出土遺物が少ないと予想でき、遺構の時期決定には綿密な精査が必要と考えた。そこで、D区上段は遺物包含層(V層)がB区よりも良好に遺存していて、上からV a層・黄砂層・V b層の層順が明確であり、V a層・黄砂層・V b層・VI層を土層ごとに遺構・遺物の検出に努めた。

V a層では古代の出土遺物がなく、黄砂層上面(1面)から溝7条・小ビットを検出した。遺構の覆土は黄砂を多く含み、覆土分類の溝a層、ビットA層である。黄砂層は無遺物で、V b層上面(2面)ではビットと小ビットを検出したが、遺物は出土していない。遺構の覆土は黄砂を多く含むものと、黄砂だけのものがあり、覆土分類では溝a層、ビットA層である。V b層は土師器細片が10点出土し、VI層上面(3面)で土坑3基、溝39条、ビット多数を検出した。遺構の覆土は黒色粘質土がベースで、覆土分類の溝b・c層、ビットB・C層である。D-SD26とD-SK08では土師器杯が出土し、ともにB区出土の土師器とほぼ同時期である。VI層は出土遺物がなく、VII層上面(4面)では4-1面が土坑3基、溝3条、ビット多数を検出し、遺構の覆土は暗灰黄色土をベースとしている。4-2面が土坑2基、溝13条を検出し、遺構覆土は暗灰黄色土・青灰色土・紫黒色腐植土が混在する。遺物は出土していない。遺物包含層の状態が良いと思われたD区においてもV層はあまり良い状態ではない。ただし、覆土分類は有効であり、B区上面で検出した遺構の覆土分類溝a層とビットA層のものはD区の1・2面に対応し、溝b・c層とビットB・C層のものはD区3面に対応すると考える。なお、D区のD-SD26で出土した土師器杯とB区のV b層から出土した土師器杯が接合している。B区下面の遺構はビットが4-1面、溝が4-2面に対応するものと考えられる。土坑はD区の4-1面と4-2面の両面に存在するが、4-1面のD-SK03～05はD-SD41・42とほぼ並行しており、溝の窪みが残ったものと考える。4-2面のD-SK06・07も溝の一部が残ったと考えている。

当遺跡は炉跡が4基検出されており、周囲のビットとあわせて、炉を持つ建物が存在したものと考えたい。土壤分析では水田・畑地としての利用は否定的である。しかし、遺物包含層と遺構覆土に炭化物が、特にB区VI層下面のB-SD48・49・50・51B-SK11・14には多量に含まれ、何らかの耕作に係るもの

と考えたい。これらのことから、調査範囲は集落縁辺部にあたるか、または建物と耕作地が近接する屋敷地か、開発集落の一部ではないかと推測される。

各遺構の遺物構成は土師器のみで、須恵器がほとんどない。B-SD31は須恵器を包含するものの、量的には少なく、やはり土師器主体といえる。これは包含層遺物も同様である。また、今回の調査では魚沼地域VI期〔春日1999〕に多く見られる黒色土器が全く出土していない。以上が当遺跡の特徴と考えられる。

県内の古代遺跡では9世紀代～10世紀前半の遺跡が多く確認されているが、この時期が古代律令体制の転換であることは周知のとおりである。水田開発が盛んとなり、新たな集落の発生もある。10世紀後半～11世紀代の遺跡は数が減少しているようにみえる。それは律令体制の変質、崩壊の進行にともない次第に從来の集落が解体分散した結果であろう。堅木遺跡もこのような時代背景から生まれたものと考えている。

土層の観察では古代包含層（V層）の上には4枚の水田が確認でき、古代包含層から10cm程の間層を挟み近世以降の水田が2枚造成されている。この近世水田は畦畔が約4m間隔で築かれ、間隔のせまい水田であることが理解できる。また、耕作土はIII層の中で上下2枚あり、下層を埋めて上層耕作土が作られている。このときに畦畔が追加されているが、間隔は見かけ上約3mと狭くなる。この追加された畦畔の東側、B区ほぼ中央に1m程の段差が検出され、この段が削れたために新たな畦畔を作り、かつ、耕作土のかさ上げをしたものかと考える。さらに上には昭和30年代の耕地整理によって埋め立てられた近・現代の水田が位置している。この水田はB区中央の段差の上段と下段に検出され、現代の水田の約半分の幅であったことが分かる。B区中央の段差は耕地整理で埋められ、現在の大区画水田となる。以上が、土層の観察による土地利用である。当地は古代以降に断続的に土地利用された。

C区近世以降の耕作土（III層）から木札が出土し、「小豆四斗入のだハ左エ門」と墨書きされていた。「のだ」は当遺跡の所在する野田と考えられ、屋号「ハ左エ門」は野田集落内に現在も存在しているという。

要 約

- 1 堅木遺跡は新潟県南魚沼市大字野田字堅木820-1ほかに所在する。
- 2 堅木遺跡は庄之又川左岸の河岸段丘上に位置する。
- 3 一般国道253号上越魚沼地域振興快速道路の一部である地域高規格道路（自動車専用道路）八箇峰道路建設に伴い発掘調査を行った。平成15年10月6日～9日・10月16日～30日に試掘調査を行い、平成18年9月4日～12月12日・平成19年4月25日～7月17日に本発掘調査を行った。
- 4 平安時代の須恵器・土師器1箱、珠洲焼10点、中世陶磁器3点、ほか近世以降の遺物が出土した。
- 5 中世の遺跡・遺構は近世以降の耕作等によって全壊していた。
- 6 平安時代の遺構は炉跡4基、溝104条、土坑21基、ピット多数である。
- 7 D区第3面の区画溝かと思われたD-SD17・19の埋土の自然科学分析の結果からは、遺跡が水田・畑地として利用されていたとの確証を得るには至らなかった。

引用・参考文献

- 安立 晃 2001 『塩澤町文化財報告書第19輯 来清東遺跡』 新潟県塩澤町教育委員会
- 安立 晃 2002 『塩澤町文化財報告書第20輯 来清西遺跡』 新潟県塩澤町教育委員会
- 飯坂盛泰 2004 新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成16年度（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 飯坂盛泰ほか 2006a 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第155集 金屋遺跡II』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 飯坂盛泰ほか 2006b 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第156集 北沖東遺跡 長表遺跡』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 池田 亨 1992 『大和町文化財発掘調査報告書第5号 御館遺跡』 新潟県大和町教育委員会
- 大河内勉 1980 『新潟県南魚沼郡六日町坂戸城跡（本丸・大手門）第一次発掘調査報告書 坂戸城跡』 新潟県六日町教育委員会
- 折原洋一 2005 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第148集 西部遺跡I』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1999 『第4章古代 第2節土器編年と地域性』『新潟県の考古学』 新潟県考古学会編 高志書院
- 加藤 学ほか 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第159集 用宮寺遺跡I』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 北村 亮ほか 1985 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第37集 金屋遺跡』 新潟県教育委員会
- 熊崎 保ほか 2005 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第144集 沢田遺跡 一杯田遺跡』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 桑原 孝 1976 『三国の歴史－越後の表玄闇』 野島出版
- 田村浩二 2002 『第三節 郷里と農民』『塩澤町史 通史編上巻』 新潟県塩澤町史編纂委員会・新潟県塩澤町
- 戸根与八郎ほか 1986 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第43集 長表遺跡』 新潟県教育委員会
- 中島栄一ほか 1989 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第53集 山三賀II遺跡』 新潟県教育委員会
- 南魚沼市 2006 『南魚沼市市勢データ』 新潟県南魚沼市企画情報課
- 余川誌編集委員会 1990 『余川誌』

別表 游物類新表

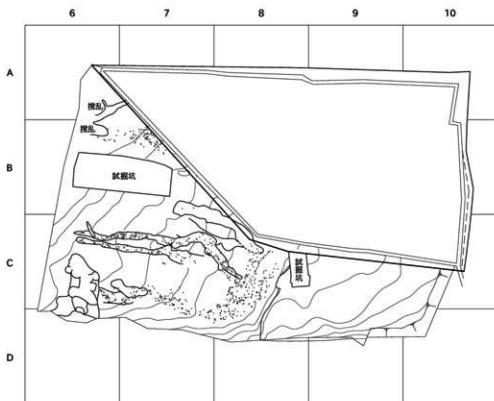
番号	種類	固相	ダリット半 年	通相	解体	法面 (cm)	色調		風化・付着物		前面	側面	背面	側面・背面	前面	側面
							上部	下部	裏面	外面						
1	土壌層	要	7105	B-1329薄		(18.9) (6.1)	赤褐色	灰褐色	有機質石炭付着	有機質石炭付着	1.1種・表面土層上位	3種	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む
2	土壌層	要	7105	B-1329薄		(6.3)					1.1種・表面土層上位上小片		長石粒含む		長石粒含む	
3	土壌層	要	8105	B-SK03	2	(4.5) (1.4)	9	黒褐色	有機質石炭付着	有機質石炭付着	1.1種・表面土層	3種	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む
4	土壌層	要	8105	B-SK06	1	(12.6) (3.65)	7.3	黒褐色	有機質	有機質	1.1種・表面土層	3種	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む
5	土壌層	桿	9104	B-SK06		(1) (5.8)					1.1種・表面土層	3種	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む
6	土壌層	桿	9104	B-SK06		(1) (4)					1.1種・表面土層	3種	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む
7	土壌層	要	111A22	C-SD01	1	(18.6) (4)	6	赤褐色	有機質	有機質	1.1種・表面土層	3種	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む
8	土壌層	要	111A11	C-SD01	1	(3.2) (2.9)	5	赤褐色	有機質	有機質	1.1種・表面土層	3種	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む
9	土壌層	要	111A17	C-SD01	1	(3.1) (2.9)	4	赤褐色	有機質	有機質	1.1種・表面土層	3種	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む
10	土壌層	小葉	13A235	C-SD01	1	(3.1) (2.7)	3	赤褐色	有機質	有機質	1.1種・表面土層	3種	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む
11	遊物層	長板根	11B2	C-SD01	1	(4.7) (1.1)	2	赤褐色	有機質	有機質	1.1種・表面土層	3種	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む
12	土壌層	桿	12A222	C-SD01	1	(4.1) (1.4)	1	赤褐色	有機質	有機質	1.1種・表面土層	3種	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む
13	土壌層	桿	10B5	C-SD01	1	(2.8) (1.1)	1	赤褐色	有機質	有機質	1.1種・表面土層	3種	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む
14	土壌層	桿	11A34	C-SD01	1	(4.6) (1.1)	1	赤褐色	有機質	有機質	1.1種・表面土層	3種	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む
15	土壌層	桿	11D21	C-SD01	1	(2.9) (1.1)	1	赤褐色	有機質	有機質	1.1種・表面土層	3種	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む
16	土壌層	桿	11A21	C-SD01	1	(2.7) (1.2)	1	赤褐色	有機質	有機質	1.1種・表面土層	3種	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む
17	土壌層	小葉	11A21	C-SD01	1	(5.3) (1.2)	1	赤褐色	有機質	有機質	1.1種・表面土層	3種	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む
18	園文層	桿	8105	N	V	(2.4) (1.1)	1	赤褐色	有機質	有機質	1.1種・表面土層	3種	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む
19	土壌層	桿	11A24	N	V	(4.6) (1.1)	1	赤褐色	有機質	有機質	1.1種・表面土層	3種	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む
20	土壌層	桿	7H10	V	V	(1.1) (1.2)	1	赤褐色	有機質	有機質	1.1種・表面土層	3種	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む
21	土壌層	桿	7H10	V	V	(1.1) (1.2)	1	赤褐色	有機質	有機質	1.1種・表面土層	3種	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む
22	土壌層	桿	8105	N	V	(1.0) (1.1)	1	赤褐色	有機質	有機質	1.1種・表面土層	3種	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む
23	土壌層	小葉	8105	N	V	(5.4) (2.1)	1	赤褐色	有機質	有機質	1.1種・表面土層	3種	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む
24	土壌層	小葉	11A24	N	V	(1.7) (1.1)	1	赤褐色	有機質	有機質	1.1種・表面土層	3種	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む
25	土壌層	要	11A24	N	V	(3.3) (1.1)	1	赤褐色	有機質	有機質	1.1種・表面土層	3種	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む
26	土壌層	要	11A25	N	V	(20.2) (5.25)	1	赤褐色	有機質	有機質	1.1種・表面土層	3種	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む
27	土壌層	要	8A20	N	V	(20) (4.1)	1	赤褐色	有機質	有機質	1.1種・表面土層	3種	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む
28	土壌層	要	11A25	N	V	(22.2) (2.9)	1	赤褐色	有機質	有機質	1.1種・表面土層	3種	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む
29	浮遊層	桿	11C5	N	V	(4) (1.1)	1	赤褐色	有機質	有機質	1.1種・表面土層	3種	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む
30	浮遊層	片岩	12C2	N	V	(14.7) (3.1)	1	赤褐色	有機質	有機質	1.1種・表面土層	3種	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む
31	底泥層	片岩	12B14	N	V	(2.2) (1.2)	1	赤褐色	有機質	有機質	1.1種・表面土層	3種	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む
32	底泥層	片岩	10B18	N	V	(12) (9.1)	1	赤褐色	有機質	有機質	1.1種・表面土層	3種	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む
33	底泥層	片岩	11B25	N	V	(6.4) (1.1)	1	赤褐色	有機質	有機質	1.1種・表面土層	3種	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む
34	底泥層	片岩	12C1	N	V	(3.6) (1.1)	1	赤褐色	有機質	有機質	1.1種・表面土層	3種	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む
35	底泥層	片岩	12C18	N	V	(4.5) (1.1)	1	赤褐色	有機質	有機質	1.1種・表面土層	3種	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む
36	底泥層	片岩	10B1	N	V	(3) (1.1)	1	赤褐色	有機質	有機質	1.1種・表面土層	3種	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む
37	底泥層	片岩	10A16	N	V	(2.1) (1.1)	1	赤褐色	有機質	有機質	1.1種・表面土層	3種	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む
38	土壤層	桿	10C17	D-SK08	2層	(1.3) (5.5)	2	赤褐色	有機質	有機質	1.1種・表面土層	3種	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む
39	土壤層	桿	7C5	D-SK06	2層	(2.4) (6.1)	2	赤褐色	有機質	有機質	1.1種・表面土層	3種	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む	長石粒含む

図 版

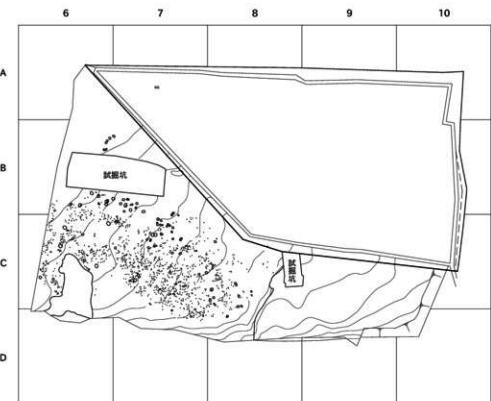
造構配置図 ①D区第1面②D区第2面③A区・B区上面・C区・D区第3面



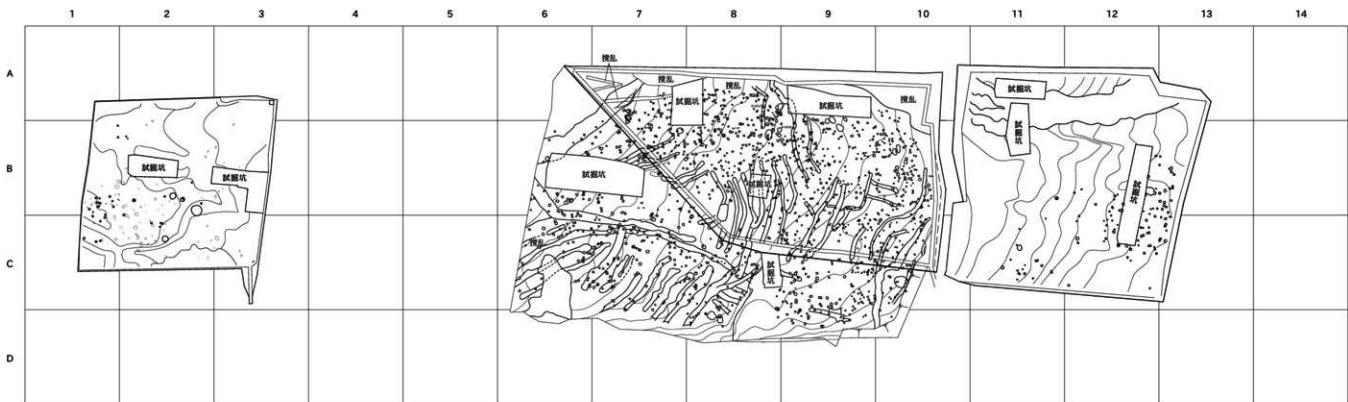
①D区第1面



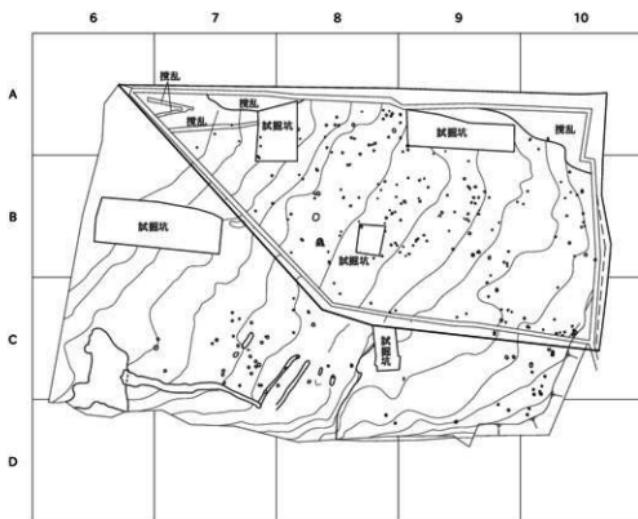
②D区第2面



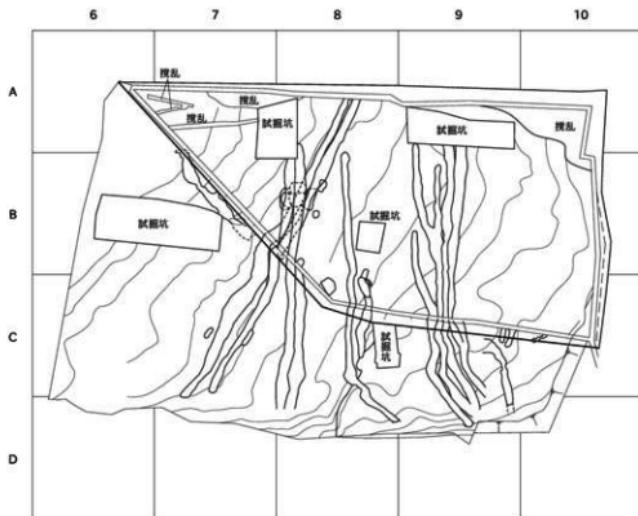
③A区・B区上面・C区・D区第3面

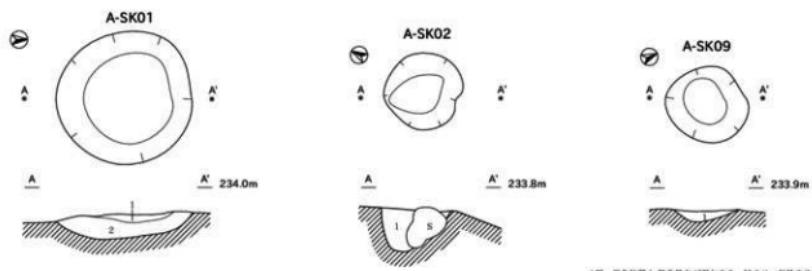
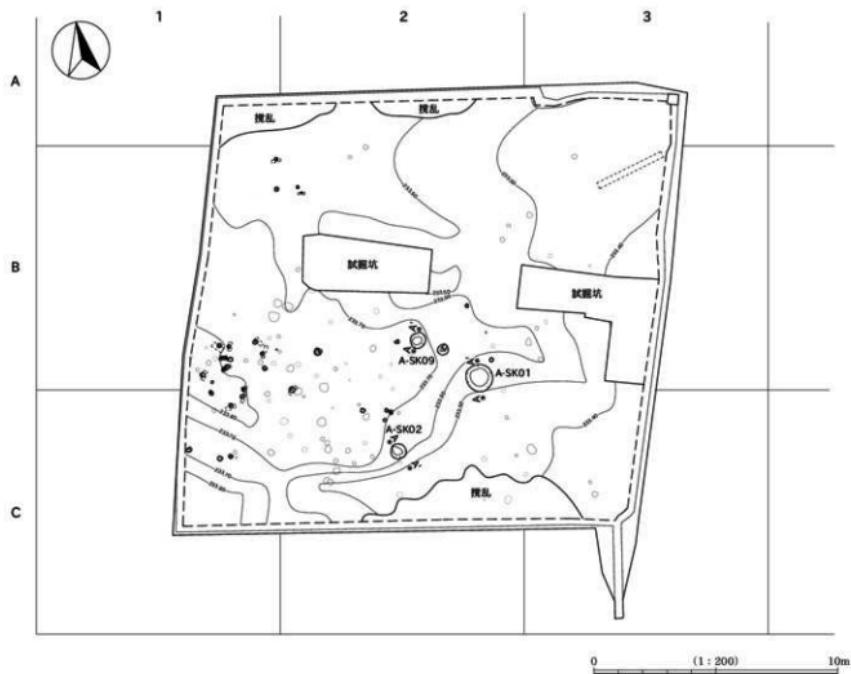


④B区下面・D区4-1面



⑤B区下面・D区4-2面



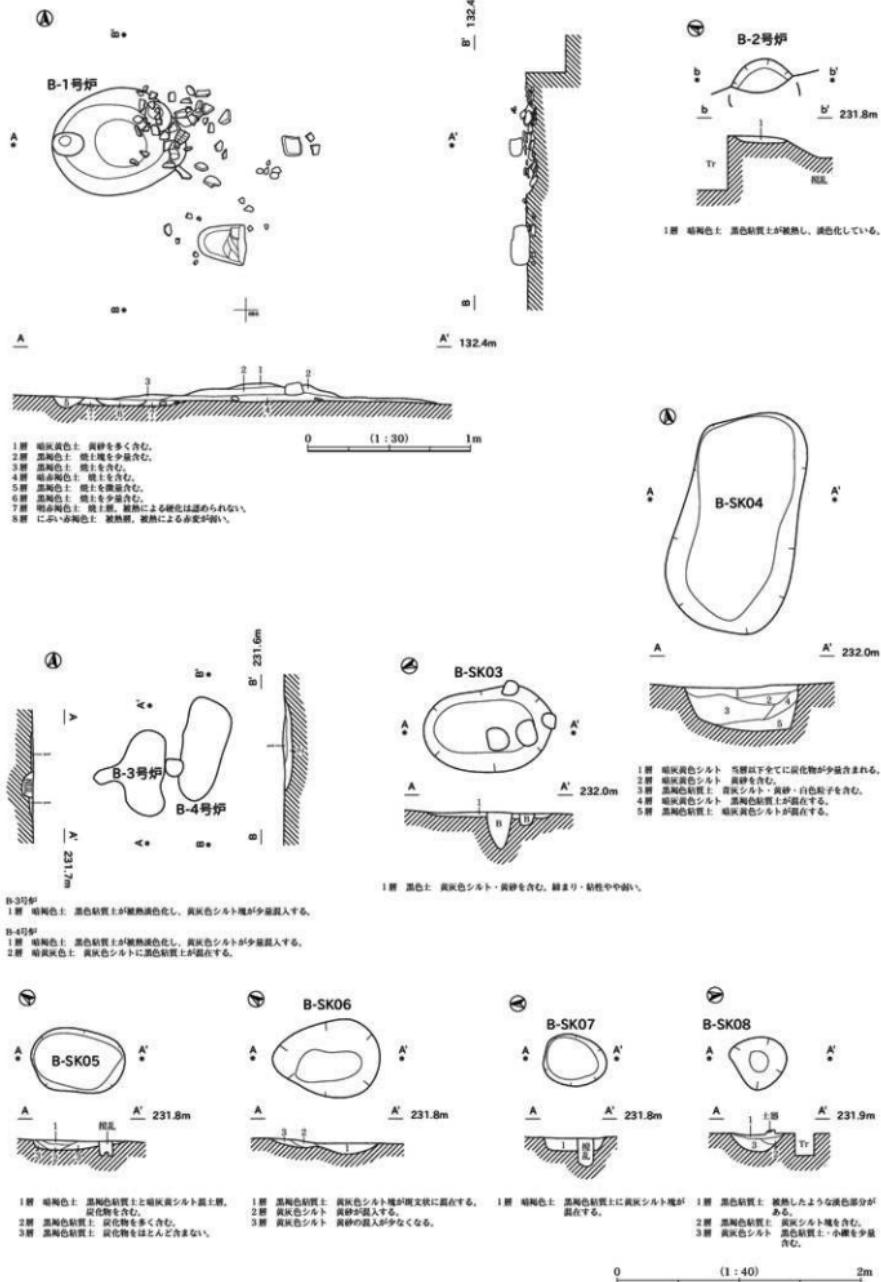


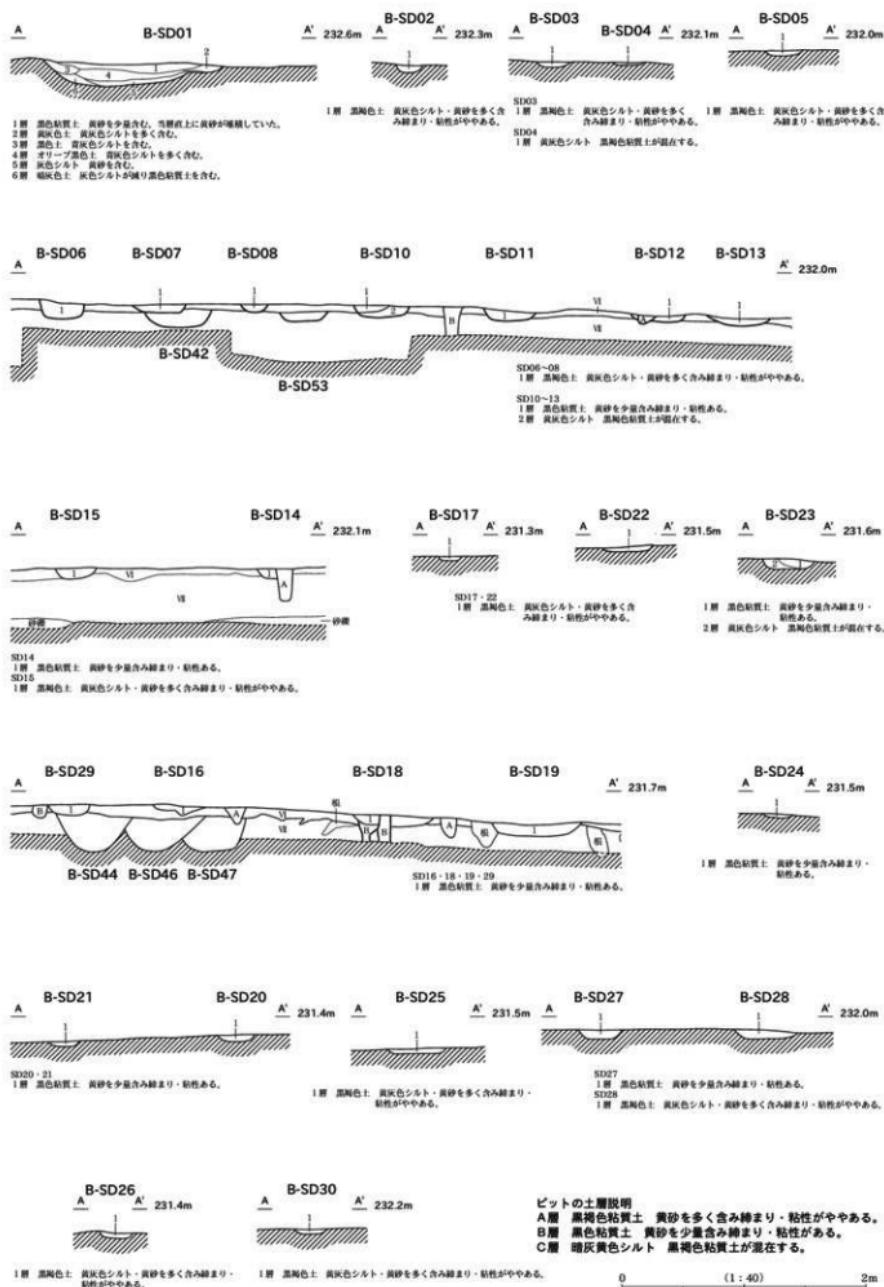
1層 黒色粘質土・微化鉄分が混在する。跡まり・鉄性やもある。

1層 黒色粘質土・黄砂土互層、跡まり・鉄性とともに弱い。
2層 白褐色土・黑色粘質土と青灰色シルトの互層。

1層 黒色粘質土・微化鉄分が混在する。



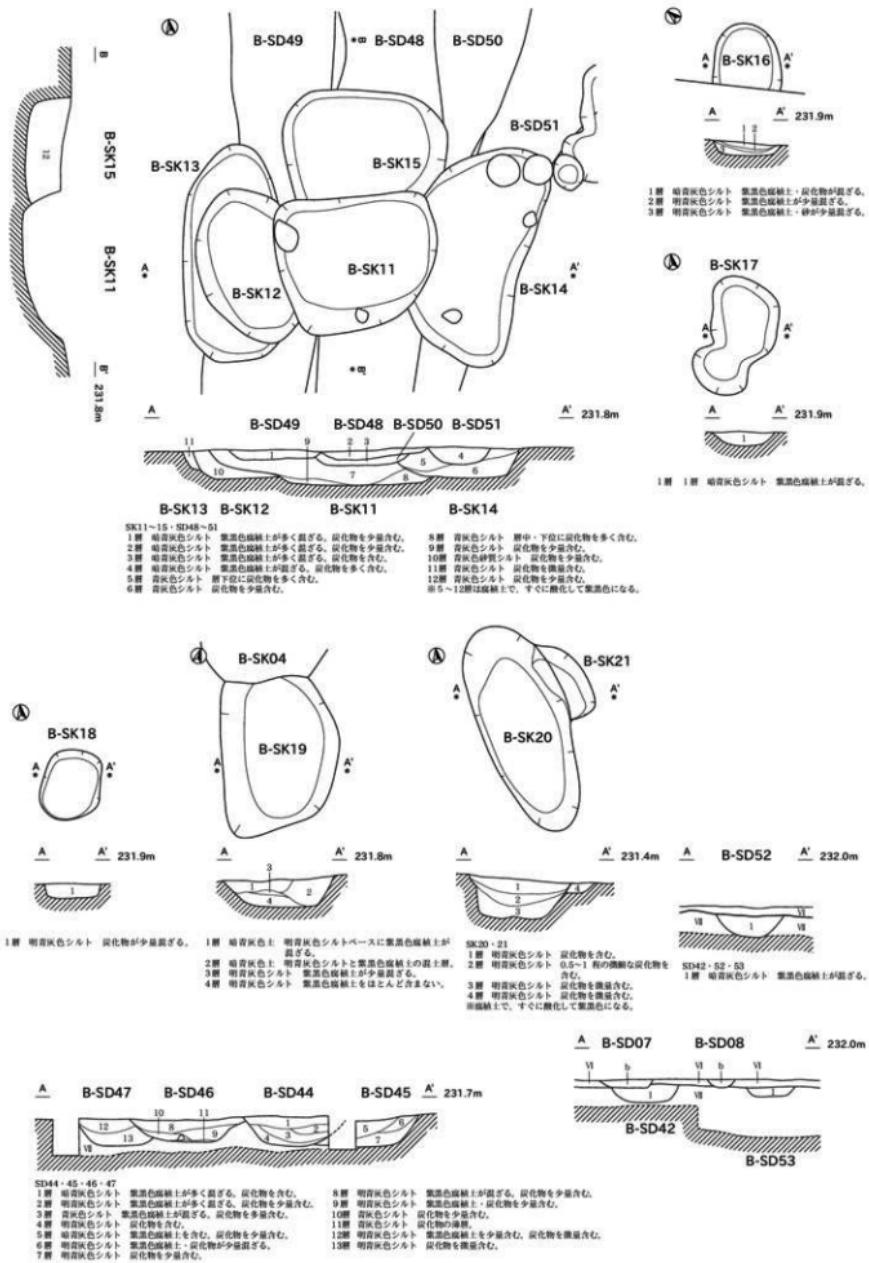


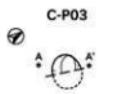
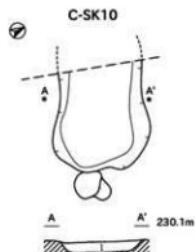
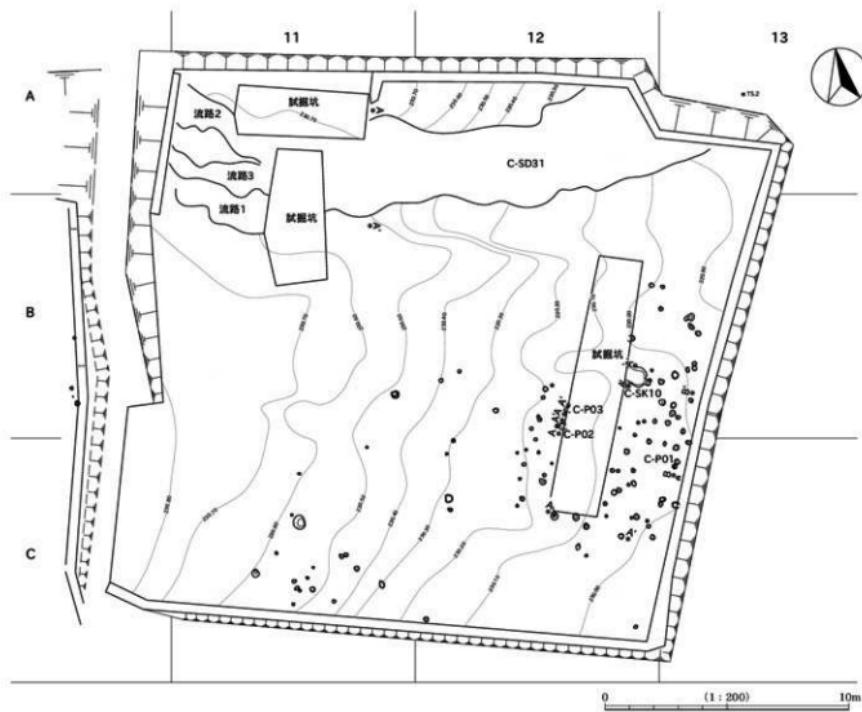


B区下面・D区4-1面の遺構









1層 明黄色シルト 硫化鉄分を多く含む。

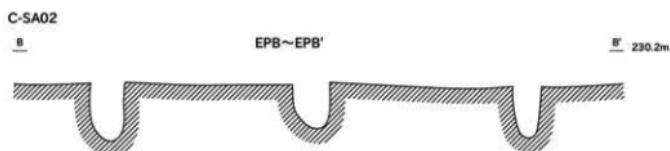
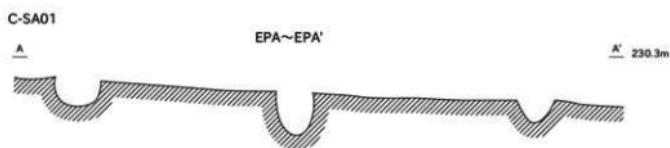
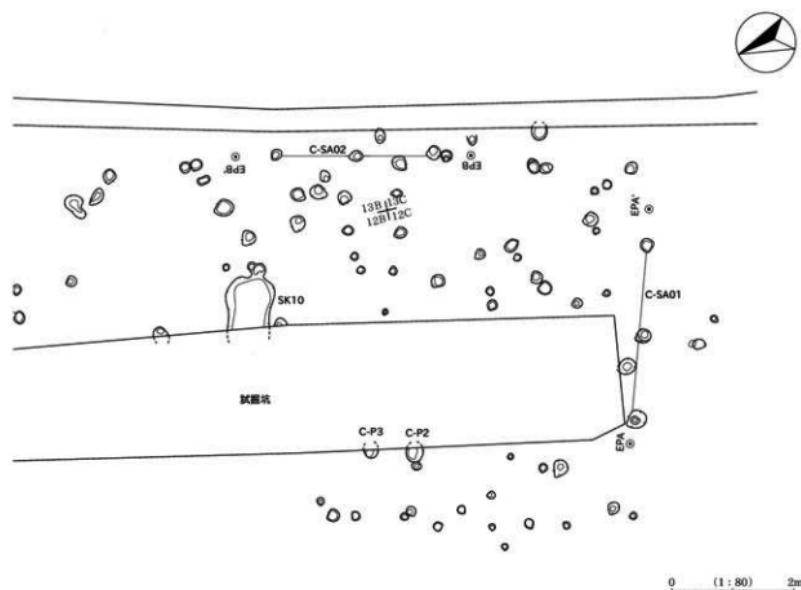
1層 黄白色シルト 硫まり、粘性ともに弱い。
2層 黄白色シルト 硫化物が強度混入する。

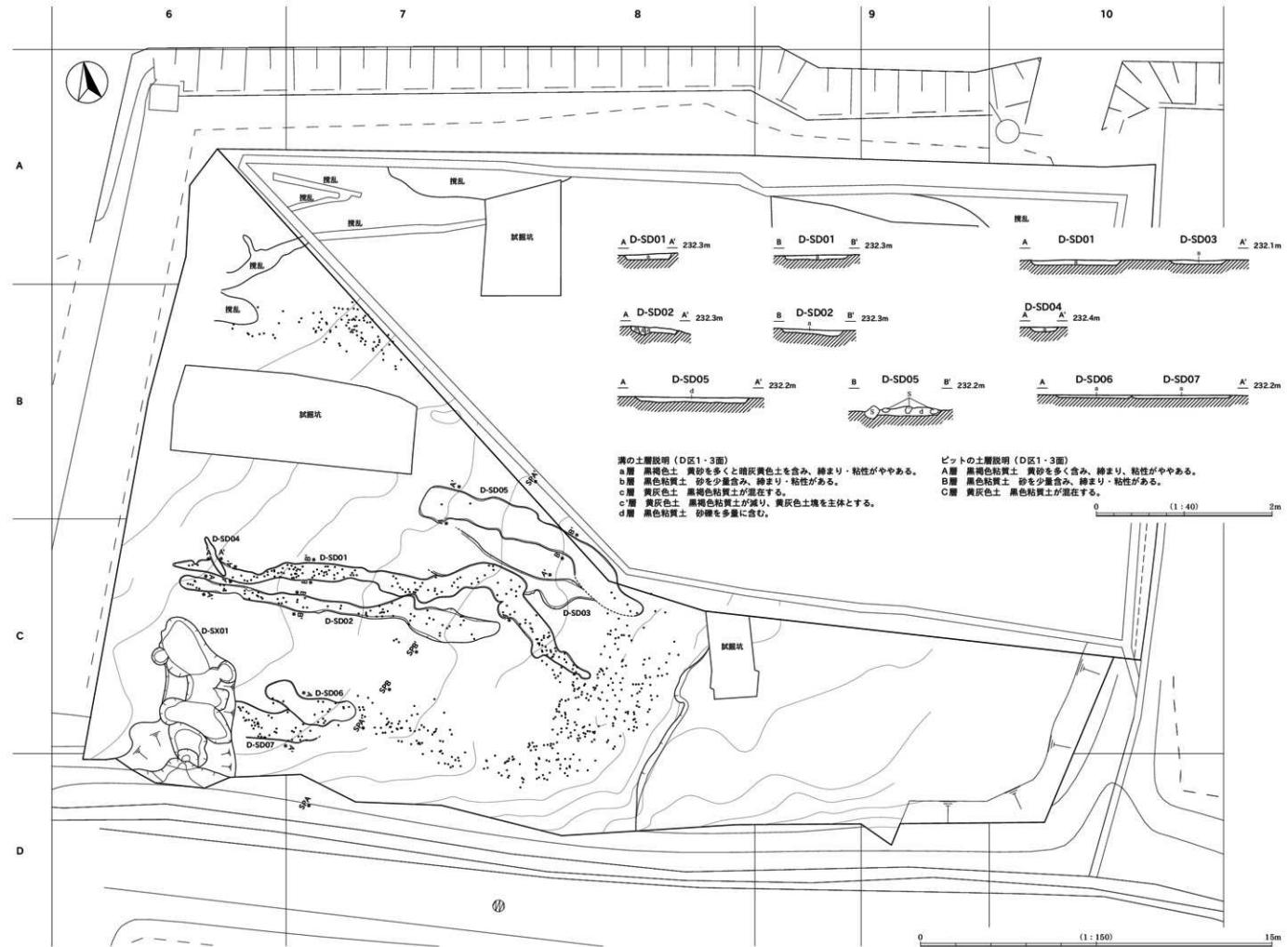
1層 灰白色シルト 緩まり、粘性ともに弱い。

2層 灰白色シルト 硫化物が強度混入する。



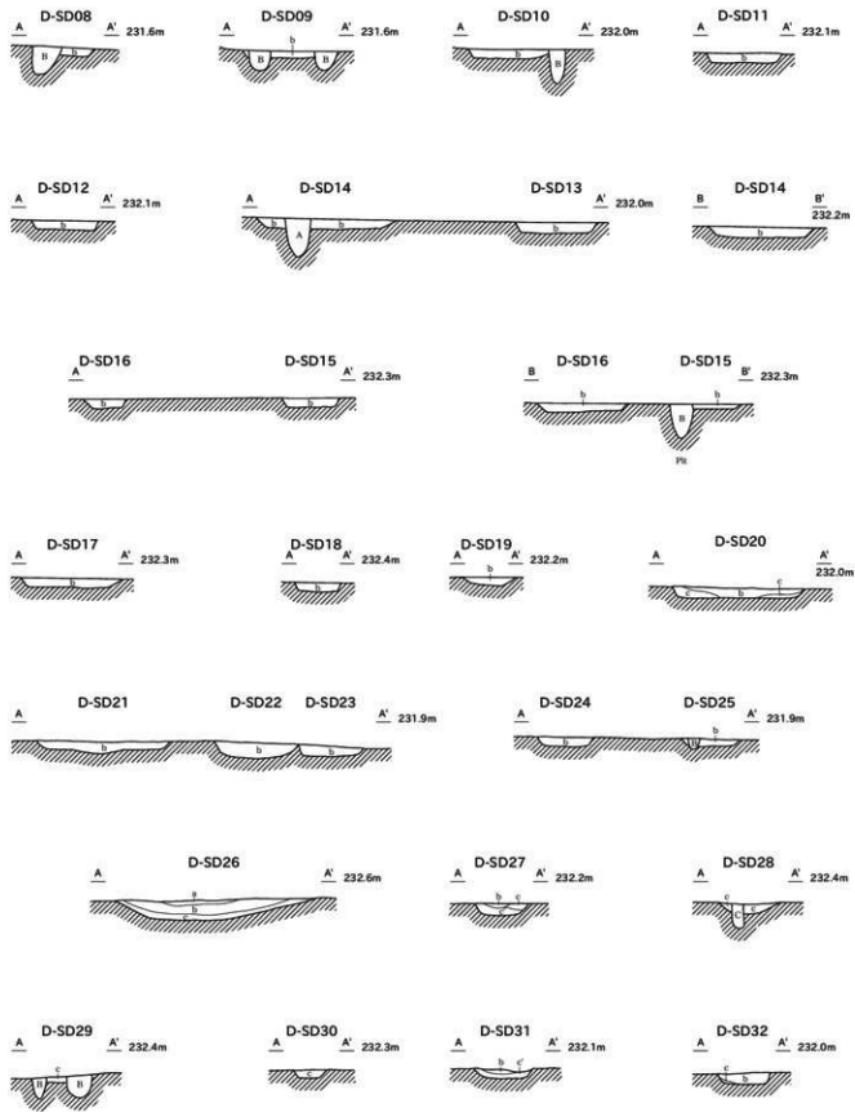
0 (1:40) 2m







D区3面の遺構 個別図(1)

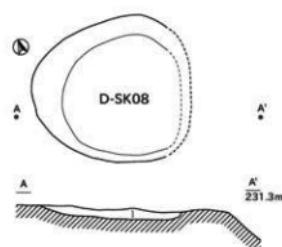
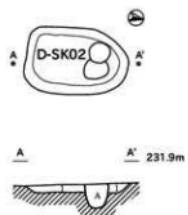
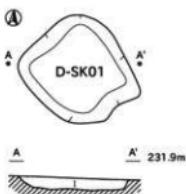
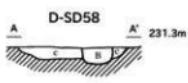
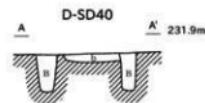
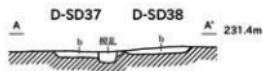
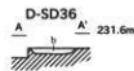
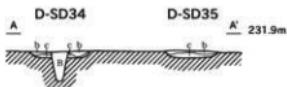


溝の土層説明(D区1・3面)

- a層 黒褐色土 黄砂を多くと暗灰黄色土を含み、締まり・粘性がややある。
- b層 黒色粘質土 砂を少量含み、締まり・粘性がある。
- c層 暗灰黄色土 黑褐色粘質土が混在する。
- c'層 暗灰黄色土 黑褐色粘質土が混り、暗灰黄色土塊を主体とする。

ピット(D区1・3面)の土層説明

- A層 黒褐色粘質土 黄砂を多く含み、締まり・粘性がややある。
- B層 黒色粘質土 砂を少量含み、締まり・粘性がある。
- C層 暗灰黄色土 黑褐色粘質土が混在する。



溝の土層説明(D区1・3面)

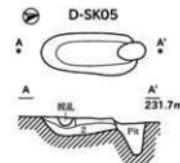
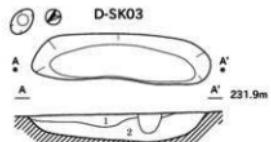
- a層 黒褐色土 黄砂を多くと暗灰黄色土を含み、締まり・粘性がややある。
- b層 黒色粘質土 砂を少量含み、締まり・粘性がある。
- c層 暗灰黄色土 黑褐色粘質土が混在する。
- c'層 暗灰黄色土 黑褐色粘質土が減り、暗灰黄色土塊を主体とする。

ピット(D区1・3面)の土層説明

- A層 黒褐色粘質土 黄砂を多く含み、締まり・粘性がややある。
- B層 黒色粘質土 砂を少量含み、締まり・粘性がある。
- C層 暗灰黄色土 黑褐色粘質土が混在する。

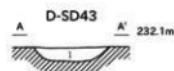
D区3面の土坑の土層説明

- 1層 黒色粘質土 砂・暗灰黄色土塊が少量まざる。

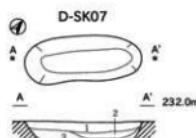


D-SD41

D-SD42 231.8m



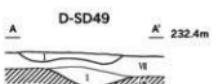
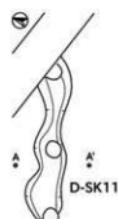
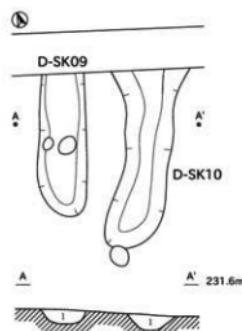
D-SK06-07
1層 青灰色土。炭化物を含む。
2層 青灰色土。砂礫土と青灰色土の混合層。
3層 青灰色土。砂礫土をほとんど含まない。



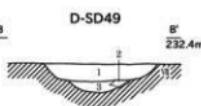
D-SK03 - 04 - 05
1層 鮎川灰土上 炭化物・白色粉土含むシルト。
2層 鮎川灰土 上炭化物を含むシルト。

D-SD41 - 42
1層 鮎川灰土 炭化物を含むシルト。

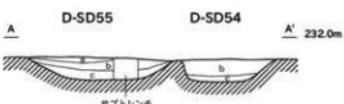
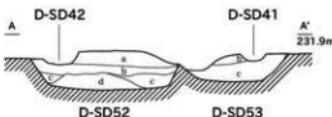
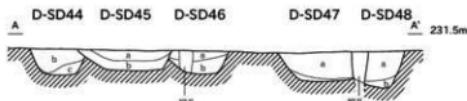
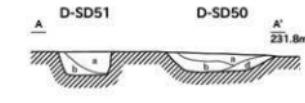
D-SD43
1層 鮎川灰土 最大3cmほどの砂礫層。



D-SD49
1層 鮎川灰土。砂礫土を下に鮎川灰土シルト層を斑状に含む。
2層 鮎川灰土上。砂礫層で耕作が少ない。
3層 青灰色 土青灰色シルト層。

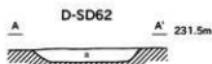


D-SK9 - 10 - 11
1層 鮎川灰土 炭化物を含むシルト。

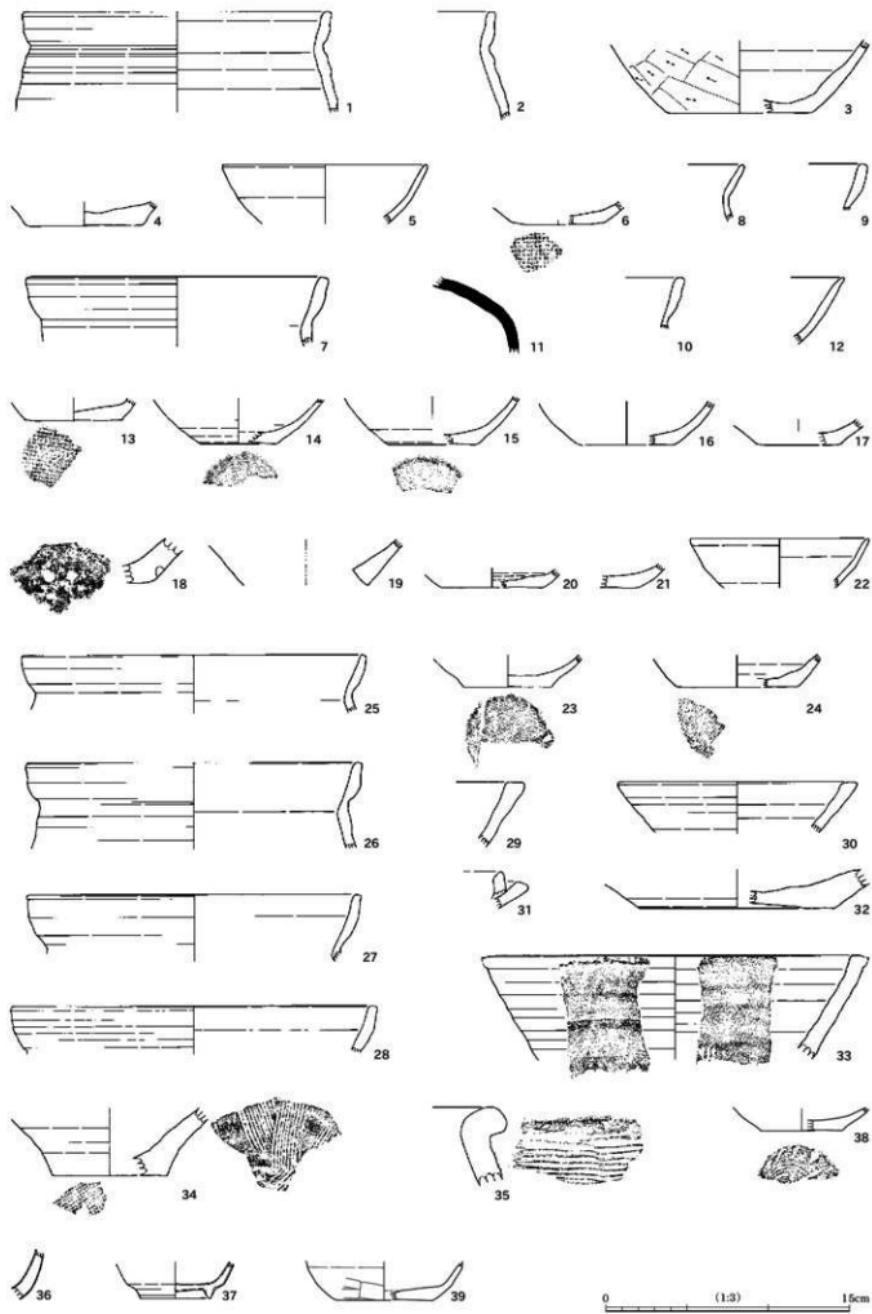


サブテンシ

溝の土層説明 (D-SD49以外)
1層 青灰色土 炭化物を含むシルト。
2層 暗青灰色土 炭化物を含むシルト。
3層 暗青灰色 炭化物を少量含むシルト。
4層 黒色土 腐植土で炭化物を含む。



0 (1:40) 2m





遺跡の位置と周辺の景観

(国土交通省国土地理院平成17年6月6日撮影 空中写真)



坂戸山から遺跡を望む



遺跡付近の地形（北西から）



遺跡調査区



A区全景



A区東壁基本層序（西から）



A-SK01 確出土状況（東から）



A-SK01 完掘（東から）



A-SK02 完掘（西から）



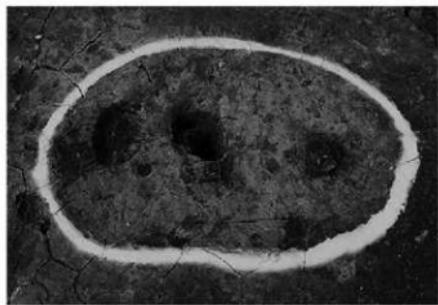
B区全景



B区北壁基本層序（南から）



B区南壁基本層序（北から）



B-SK03完掘（東から）



B-SK04完掘（北から）



B-1号炉及び周辺ピット（東から）



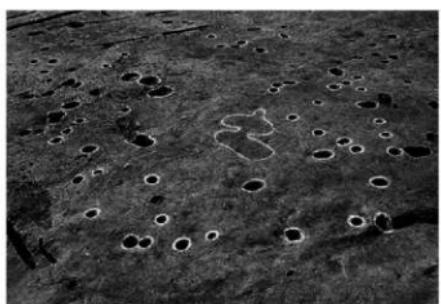
B-1号炉出土遺物（西から）



B-1号炉（東から）



B-2号炉及び周辺ピット（南から）



B-3・4号炉及び周辺ピット（東から）



溝完掘（西から）



B-SD44～47完掘（北から）



B-SK11～15完掘（西から）



C区全景



C区北壁基本層序（南から）



C-SD31 実掘（東から）



C区ピット群（東から）



C-PO3 実掘（東から）



D区基本層序全景（東から）



D区基本層序南部（東から）



D区基本層序7C13・18(東から)



D区耕地整理の埋め土(南から)



D区小ピット(南東から)



D区小ピット(南西から)



D区1面全景（西から）



D区1面全景（東から）



D区2面全景（西から）



D区2面全景（東から）



D区3面全景（上空から）



D区3面全景（西から）



D区3面溝完掘(南から)



D-SD19断面(東から)



D-SD26完掘全貌(北東から)



D-SD26断面(北東から)



D-SK02断面(東から)



D-SK02完掘(東から)



D-PO8断面(東から)



D-PO8完掘(東から)



D区4-1面全景（東から）



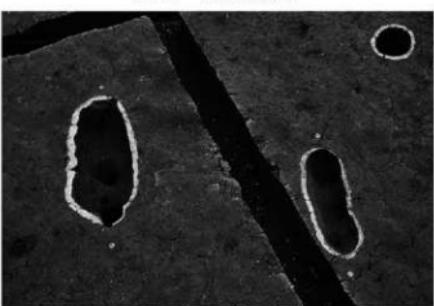
D-SD43完掘（東から）



D-SD41・42完掘（北から）



D-SD43断面（東から）



D-SK04・05完掘（北東から）



D区 4-2面全景（西から）



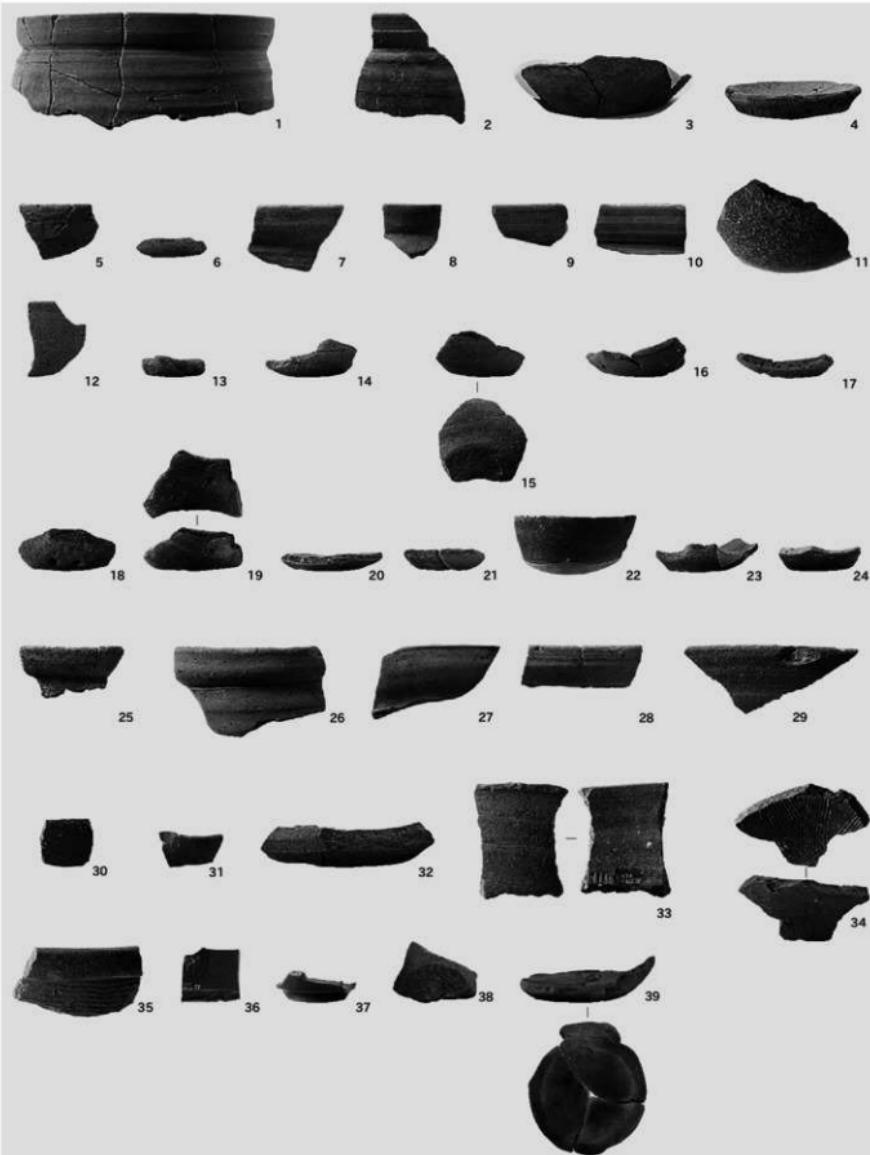
D区 4-2面全景（東から）



D区（18年）上面全景（東から）



D区（18年）下面全景（東から）



報告書抄録

ふりがな	かたぎいせき						
書名	堅木遺跡						
副書名	一般国道253号八箇峰道路関係発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第190集						
編著者名	藤巻正信・奥村伸男(埋文事業団)・高橋勝広・植木紀子(株式会社吉田建設)						
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団						
所在地	〒956-0845 新潟県新潟市秋葉区金津93番地1 TEL 0250(25)3981						
発行年月日	2008(平成20)年12月25日						
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 度	東経 度	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
堅木遺跡	新潟県南魚沼市大字野田字堅木820-1 ほか	15226 302	37度 5分 33秒	139度 51分 53秒	20060904~ 20061212 20070425~ 20070717	18年 2,295m ² 19年 2,700m ²	一般国道 253号八箇 峰道路建設
所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項
堅木遺跡	集落	平安時代	炉跡4基、溝104条、土坑・ ビット多数・小ビット多数			平安時代の須恵器・土師器1 箱、中世陶磁器14点	

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第190集	
一般国道253号八箇峰道路関係発掘調査報告書	
堅木遺跡	
平成20年12月24日印刷 平成20年12月25日発行	編集・発行 新潟県教育委員会 〒950-8570 新潟市中央区新光町4番地1 電話 025(285)5511 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1 電話 0250(25)3981 FAX 0250(25)3986 URL http://www.mai bun.net
印刷・製本 株式会社ハイングラフ 〒950-2022 新潟市西区小針1丁目11番8号 電話 025(233)0321	

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第190集『堅木遺跡』 正誤表

頁	位置	誤	正
抄錄	北緯	37度05分33秒	37度05分39秒
抄錄	東經	138度51分53秒	138度52分15秒